多摩川の漁撈文化史に関する研究

１９９５年

安　斎　忠　雄

安斎宣伝研究室代表

財団法人とうきゅう環境浄化財団助成報告書・一九九五年

多摩川の漁撈文化史に関する研究

安斎忠雄著

序

この一世紀の間に、多摩川は生命力の萎えた水路と化して、かつて首都西郊の清冽で豊かな流れは相貌を一変させて、都市化した流域を沈黙のまま流れている。

多摩川が滔々と流域を潤していた頃、流れには多彩な魚族が生息し、流域の人たちは伝統漁法による漁を行っていた。鮎の川として知られる多摩川は、地理的に江戸、東京に近いこともあり、特異な漁撈文化が開花し、発展した。二百数十年の長きにわたる清流讃歌の歴史をたどった多摩川は、全国でも稀有な栄光の流れであった。

現在の流れからは想像もつかないが、当時の多摩川は自然河川の躍動がみなぎり、流域の人たちはこの偉大な流れの恩恵を享受しながら、静かなくらしを営んでいた。流れとそこに生息する魚たちを背景に展開した人の営みが、多様な漁の文化を生むことになった。

河川の荒廃とともに栄光の時代は去り、今や人びとの記憶からは遠のいたが、多摩川の本来の在るべき姿を考える上で、本書が幾分なりとも資することができれば多とするところである。

多摩川の漁撈文化史に関する研究

目次

序 …… 3

第一編　流れと魚

恵みの流れ …… 11

○スナヤツメ　○ウナギ …… 12

○イワナ　○ヤマメ …… 13

○サクラマス、○アユ …… 14

○ウグイ …… 15

○マルタ　○ニゴイ、カマツカ　○コイ …… 16

○フナ　○タナゴ　○オイカワ …… 17

○モロコ、ヒガイ　○モツゴ …… 18

○ナマズ　○ギバチ …… 19

○ドジョウ、シマドジョウ、ホトケドジョウ

○カジカ …… 20

○ヨシノボリ　○シラウオ　○ボラ …… 21

○ハゼ　○ヌカエビ、スジエビ、テナガエビ

○タニシ　○シジミ …… 22

第二編　漁撈技術の変遷

第一章　先史時代 …… 28

一、原始雑漁法 …… 31

○手摑み漁 …… 31

○石ぶち　○叩き　○石倉　○漬漁　○瀬干し

○すくい・かぶせ …… 32

○毒流し …… 33

二、刺突漁法 …… 33

三、網漁法 …… 33

四、筌漁法 …… 33

五、釣漁法 …… 34

第二章　古代・中世……35
第三章　江戸時代の記録に残る漁法……37
一、筌漁法……37
二、網漁法……37
三、釣漁法……38
四、雑漁法……39
第四章「瀬張」と「しら」……41
第五章　明治、大正、昭和期の伝統漁法……45
多摩川の四季別伝統漁法……48
第六章　伝来漁法の盛衰……51
第七章　多摩川の鵜飼……57
一、歌に詠まれた多摩川の鵜飼……57
二、「ケ」の鵜飼……58
三、江戸時代の多摩川鵜飼……59
四、明治以降の多摩川鵜飼……62

第三編　多摩川の鮎

第一章　香魚・鮎……67
第二章　上納鮎……70
第三章　石川千代松博士の偉業……72
鮎の味……74
第四章　多摩川の鮎稼ぎ……76
一、流域の半漁民と川漁師……76
二、川魚販売……77
三、鮎担ぎ……79
四、鮎　籠……80
第五章　多摩川鮎異聞……82

第四編　清遊の流れ

第一章　紀行記録の清遊と漁－江戸時代……89

第二章　曽遊の川辺－明治以後……93
第三章　多摩川の鮎料亭……97
一、林泉の鮎……97
二、鉄道の開通と鮎料亭……97
三、丸芝館……98
四、玉川亭……98
五、立川亭……100
六、府中・調布の鮎料亭……100
七、亀　屋……100
八、喜月樓、柳屋、玉泉亭……101
第四章　遊漁の流れ……103
流域の漁……105
筌漁法……105
網漁法……105
釣漁法……106
刺突漁法……106
雑漁法……107

第五編　多摩川の漁撈画

絵画、図絵に描かれた多摩川の漁撈……111
1・玉川秋月……111
2・多摩河乃里……112
3・鮎……112
4・玉川の鮎と里……113
5・武蔵多満川之里……113
江戸名所図会に描かれた多摩川の漁撈……115
6・多摩川其一・其二……115
7・玉川猟鮎……116
8・日野津……117
9・登戸渡……117
10・代太橋……118
11・四谷　内藤新宿……118
12・多摩川漁業図……118
13・魚留瀧の鱒跳網漁……120
14・鰷魚歳貢……120
15・年中祭絵巻鵜飼神事……121
16・調布玉川絵図……122
17・玉川遊漁の圖……122

18・貝殻坂立川亭鮎漁場……122
19・多摩川河畔丸芝鮎漁場……122
20・21多摩川の鵜飼スケッチ……124
22・多摩川鮎漁之図……125
23・玉川の鮎漁……125
24・奔湍釣魚……127
25・夏川……127
山村の漁撈画　26～31……128

第六編　漁撈文化の終焉

第一章　漁撈文化の終焉……135
一、大量の川砂利採取……136
二、治水・利水施設の増大……137
三、水質汚濁の進行……138
四、川漁の終焉……139
第二章　多摩川における漁撈文化の特質……141

資料編

多摩川水系伝統漁法一覧表……147
多摩川水系魚種別漁法一覧表……165

参考文献

……171

第一編　流れと魚

恵みの流れ

はるか先史時代より豊かで清冽な多摩川にはさまざまな魚族が生息し、近くの崖線沿いの湧水地には古くから人が住みついて、流れで魚をとってくらしていた。歴史時代に入っても多摩川は清らかな水をたたえ、自然の流れそのままの姿であった。

江戸時代以前は、多摩川も他の河川と同じように坂東の一隅を流れる一河川にすぎなかったが、徳川家康の江戸開府以降、多摩川は防備上の西端線となり、また鮎の供給河川として重要な役割を果たす存在になった。

江戸から明治期にかけて、多摩川は丘陵地にひらけた田園地帯を流れる自然河川であり、広い河原と礫におおわれた川床、それにきれいな水をたたえた流れは、流域のくらしにさまざまな恵みをもたらしていた。流れには魚の往来をさまたげる堰も少なく、川岸の蛇籠や沈床などの護岸水制は魚たちの恰好の棲み場所となり、淵から瀬へと蛇行する流れが、数多の魚族を育み、その頃の多摩川は旺盛な生命力に満ちあふれていた。

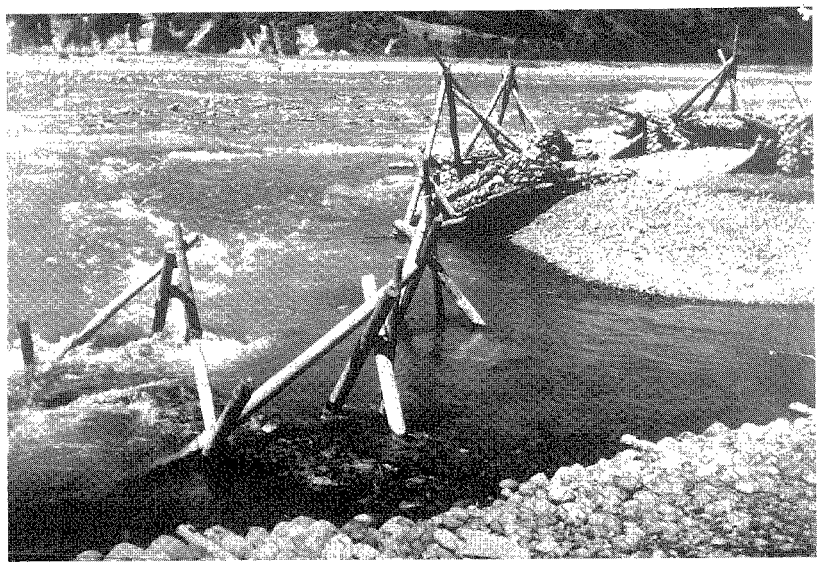
冬から春にかけて、東京湾からは白魚が産卵のため遡上し、下流の浅瀬に群らがった。白魚の時期から間もなく、鮎の稚魚が河口近くの川面を真黒になって上流めざして上り、この頃、マルタの大群が河口からやってきて、中流の川底の小石に産卵をはじめる。

梅雨の頃になると、鰻の稚魚が、長い旅のはてにようやく河口にたどりつき、それからはひたすら上流に向って行く。

夏から秋にかけては、海洋を回游した桜鱒が遡上する。大きな魚体を躍動させて流れを上る魚群は、かつての多摩川の豊かさの証であった。いつもは内湾を遊泳するボラやスズキも、群れ跳ねながらやってきた。

多摩川は季節ごとにさまざまな魚の往来で賑わったが、流れに定着して生息するカジカなどは川石の数ほどもおり、これらの魚たちが多彩な生活史をくりひろげていた。

秋になると抱卵した鮎が下り、モクズガニも河口めざして落ちて



昔の多摩川の流れと護岸水制の蛇籠と菱牛

行った。

冬の流れは一見静かそうに見えるが、水中ではカジカが産卵をひかえて盛んに餌をあさっている。多摩川は一時も生命の営みを休むことなく、豊かに魚たちを育みつづけた。

だがあれほど豊潤な流れの多摩川も、昭和になり、特に三十年代以降には流域の開発が進み、人口が増えて市街化が進むと、徐々に川としての生命力を失っていった。

昭和初期以後、多摩川における大量の砂利採取や河道の直線化、コンクリート護岸化、用水堰の多設などで河川形状は一変し、魚の生息環境が破壊された。加えて流域からの大量の汚水流入で、清冽をほこった多摩川は水質汚濁の流れに変貌し、流れから消えたり、数を激減させた魚が少なくない。

以下は、かつて多摩川に生息した魚介類について、漁撈的な観点から簡単に述べてみた。なお、巻末の資料編に「多摩川水系魚種別漁法一覧表」を付し参考とした。

スナヤツメ

○スナヤツメ

きれいな水の、砂地の川底を好む長さ十五、六センチの小さなウナギに似た魚であるが、ウナギとは別種である。清水が湧いて岸辺に水ゼリが生えているような砂底の清冽な流れに生息し、昭和十年代頃まではよく見かけた。多摩川の水質が悪くなり、砂地の川底が汚染されるようになると姿を消した。多摩川流域ではスナヤツメをヤツメウナギと呼んだが、本来のヤツメウナギとは別の種類である。漁撈上さして重要な魚ではないが、掬い網などでたまにとれることがある。

○ウナギ

ウナギは、多摩川の上、中、下流とその支流の全水域にわたって広く分布、生息した魚であり、流域の人たちはさまざまな漁法で鰻漁を行った。

戦前、初夏の頃になると、東京湾から長さ五、六センチに成長した稚魚が流れを遡り、途中、真黒になって堰をはい登る姿が見られた。鰻はその一生を通じて、鮎や桜鱒と同じように、川と海を往還するライフ・サイクルの魚種で、流れを遡った鰻は多摩川の本、支流に居着いてそこで成長し、再び秋の出水とともに流れを下り、海で産卵して生涯を終える。

昔、多摩川の水域ではどこでも鰻がとれた。美味で栄養に富むため珍重され、鮎とともに川漁師たちの重要魚種であった。また流域の住民もさまざまな漁法を駆使して鰻とりを行い、自家の菜料にしたり、或いは川魚仲買人に売って小遣い稼ぎのできる、鮎に次ぐ有用魚種であった。

鰻料理は蒲焼が主で、柳川風の煮込鍋、それに、ワタを抜き丸ごと串刺しにして焼鰻にすることもあり、当時の貴重な栄養源になってい

た。だが、多摩川に堰が多くなるにつれて、戦後では天然鰻が次第に少なくなり、現在は放流鰻が主流になっている。

○イワナ

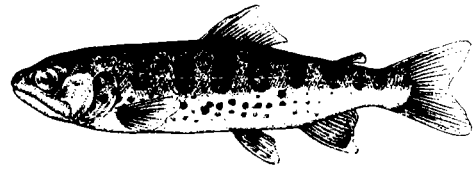
多摩川で最上流の源流水域に生息するサケ科の渓流魚で、山女魚（ヤマメ）と同様に、奥多摩最奥部の人たちにとって、昔から貴重な蛋白源になっていた。

岩魚（イワナ）は貪欲で警戒心の強い魚で、物影や音におびえ易く、すぐ岩の下に身をひそませてしまう。だが貪欲さが仇となり、静かに漁場に近ずき餌や毛鉤を落せば、すぐさま食いついて簡単に釣り上げられる。釣り方も山女魚とさして変らず、他に突刺し漁や投網、手摑み漁、川干し、毒漁などがある。食味は美味、淡白で調理法も山女魚と変らない。

冷水と清冽さを生息の場とする岩魚は「水の精」ともいわれるが、源流水域の環境変化で激減の一途をたどり、今では種の保存が危ぶまれるほど数が少なくなっている。かつて、渓谷の職漁師をして「岩魚なんざぁ魚でねえ、川の蛆だ。とってもとっても川の中から湧いてくらぁ。」と言わしめたほど、奥多摩の源流部には沢山の岩魚がいた。だが現在では、あれほど旺盛だった在来種の魚影は見られず、かつての豊穣な源流の面影は失われている。

○ヤマメ

多摩川の上流水域に生息するサケ科の魚で、その一部が流れを降り、海で回游して再びサクラマスとなって母川を遡る。山女魚は冷水を好む動作の俊敏な、肉質の美味な渓流魚で、昔から山間地の貴重な蛋白源として塩焼、煮つけ、肉身を水にさらした洗いなどで食した。餌や毛鉤による渓流釣りの他に、山女魚簗や投網、籖突き、瀬干し、手摑み漁、中には毒漁などでとるが、とれた山女魚を串に刺して白焼にして、囲炉裏の上に下げた「べんけい」に刺し並べて保存し、必要に応じて利用した。



ヤマメ

昭和三十年代頃までは、山女魚とりを生業とする渓流釣り師が奥多摩の山間部におり、主に毛鉤釣りで渓谷の漁場を渡り歩いて、とれた山女魚を旅館や魚屋に卸していた。だが、徐々に川が荒廃して山女魚の漁獲が少なくなり、職漁者も高齢化したため姿を消して今では見られなくなった。奥多摩山女魚の衰退の理由は色々と考えられるが、渓谷の奥まで設けられた砂防堰堤や山林の農薬撒布、遊漁者の激増による乱獲、加えて生態系を無視した養殖魚の放流や生活汚水の流入、利水による河川水の涸渇などであり、かつての流れは豊かさを失って、現在の流れに変貌した。

天保十三年（一八四二）の『玉川泝源日記』に、著者の山田早苗が奥多摩の丹波川の辺で、

「…ここは山蔭なれども、来し道のやうなる谷川ならで、すこぶる打開けて、川原は曠谿にて、さながら青梅あたりの川原に似たり。美景の川原に莚まうけて、石を竈に茶を物す。…漁夫とともに網打てり。やがて山目魚を漁れり。家より酒肴おこせつ。かたみに呑み交はしけるに、漁れる魚をとみに調じて食ろひたる味はひ、いえばさらなり。…」

と記し、奥多摩の川原での、豊かな流れを前にしての饗宴の模様を伝えている。

○サクラマス

多摩川上流に生息する山女魚の一部が降海し、数年の後、成魚となって、初夏から秋にかけて産卵のため川を遡る。豊富な餌に恵まれた海洋での回游生活で、川の上流に留まる山女魚とは姿、形も見違えるような大形魚になり、多摩川流域ではカワマスと呼び、山女魚とは別種の魚と思われていた。

江戸時代までは東京湾から盛んに遡上し、流域では昔からさまざまな漁法でとっていた。上流の鳩の巣近くの本流に、現在では埋まってしまったが魚留(なる)滝という滝があり、この滝を上ろうとして桜鱒が跳躍を試みるが、流れに抗しきれず魚体は宙に舞い、下の滝壺に落ちる。この様子を見た近在の農民が、長い叉手網を滝壺の脇で構え、落ちる鱒を受けてとる「鱒跳網」を行ったと『武蔵名勝図会』にあり、鱒とりの絵図まで挿入されている。また支流の秋川の滝場でも、同様な方法で桜鱒や鮎、ウグイをとったと『新編武蔵風土記稿』に記されている。

今日では想像もつかないことだが、その当時、多摩川の偉大な生命力を物語るような桜鱒の群来が、先史時代から江戸時代までつづいていたのである。だが、季節毎に河川を往来しなければならない魚種にとって、流れを遮断する堰の出現は種の存亡にかかわるものであり、加えて、上流の山女魚の乱獲、砂防ダムの多設などによる河川改修などの影響により、川を往還する桜鱒は激減する。

昭和三十年代頃までは、桜鱒が網漁などで稀にとれる程度で、大変に少なく、専業の川漁師でさえ年に数えるほどであった。鮎の「ひっかき漁」で、箱眼鏡を通して淵の物陰に身をひそめる桜鱒を見かけることがあったが、当時でも珍しい魚種であった。食味はサケ科特有の身ばなれの良いしまった肉質で、川魚中最も美味であった。たまたまとれると、こればかりは川魚仲買人にも売らず、自家で塩焼にするか、或いは日頃世話になっている人への贈り物にした。この頃の桜鱒は江戸時代とは異なり、多摩川流域では一部の人にしか知られない、貴重な魚になっていた。

○アユ

鮎は多摩川を代表する魚種で、多摩川の漁撈文化の発展はこの魚に負う所が大きい。鮎については別項を設けて述べることにした。

○ウグイ

多摩川の上流から下流まで生息域の広い魚種で、流域一帯では昔から「ハヤ」といい、昭和期以降にはウグイとオイカワを併せて「雑魚」と呼ぶこともあった。雑魚の呼称は鮎を本命視した江戸時代以来の川漁師が、鮎漁法にかかったウグイを外道魚とし、雑魚と言ったのに始まる。

幕府への上納や江戸、東京向けの商品であった鮎よりも、はるかに経済的価値の低い下魚として扱われたウグイであるが、その実、昔からこれ程流域社会に貢献した魚は他にない。何時の時代にあっても、ウグイは四季を通じて大量に獲れ、庶民が気安く求めることのできた川魚であり、漁獲量は鮎のそれをはるかに超えていた。従ってハヤとりの漁法は多彩であり、多摩川の伝統漁法の中で最も多く、鮎漁を上廻っていた。多摩川流域ではハヤは鮎に比して地味ながら、根強い人気の魚として住民の間に親しまれていた。

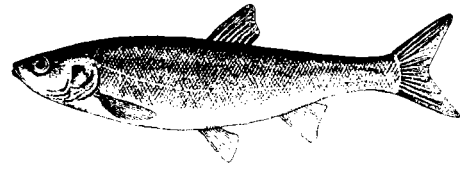
古より鮎の川として知られた多摩川であるが、漁獲量で群を抜いていたのはウグイであり、多摩川は鮎の川であるとともにウグイの川でもあった。この水系における魚種別の蛋白質総生産額において、鮎はウグイに遙か及ばない。それはウグイの広範囲な生息習性にもよるであろうが、本来多摩川の河川形状は、中流水域の占める割合が多く、中流はウグイの生産性が最も高い水域であったことにもよる。

鮎は時の為政者や一部の特権階層が消費した、いわば「ハレ」の魚であり、これに反して、ウグイは流域住民が自分で漁をし、また魚商より容易に求めることのできた「ケ」の魚であった。またウグイは多摩川にあって、鮎や桜鱒のように流れを往還する生活史の魚種でなく、一定の水域に留まりながら生息する、個体数の極めて多い優占魚種でもあった。

多摩川の職漁者、それに半農半漁の人たちや遊び漁を楽しんだ流域住民が、豊かな流れに育まれたウグイを筌漁法をはじめ、網、釣り、刺突、雑漁法など、さまざまな伝統漁法で大量にとっていた。とれたウグイを串刺しにして塩焼、それにハヤの魚田、天婦羅などに調理したり、焼干しにしたものを甘辛く煮たハヤの甘露煮、佃煮などにして食していた。

だがさしもの豊かさを誇る流れも徐々に陰りはじめて、昭和三十年代に入るとウグイの生息数もめっきり少なくなった。「瀬付き漁」のように流れに人工産床を設け、そこに寄る成魚を一網打尽にする乱獲的な伝統漁法に多摩川の生産力が追いつけず、徐々にウグイ資源が涸渇して行った。現在ではその逆に、漁業組合員の手により、多摩川の上流や秋川では、かつての瀬付き漁と同じ場所にウグイの産床を設けて、孵化効率の向上を計るとともに繁殖を保護している。

その昔、鮎の盛名の下で川漁師からは雑魚と呼ばれ、下魚扱いされたウグイであるが、当時の流域住民の食生活に最も貢献した魚である。そうした歴史的経緯の認識の下で、鮎に優るとも劣ることのない評価



ウグイ

を得たとしても、決して不思議ではない魚種で、また多摩川の漁撈文化上、ウグイの復権について改めて考える必要がある。

○マルタ

ウグイに似た大形魚で、成魚では体長が五十センチにもなる。春になると産卵のため河口から大挙して遡上し、明治、大正の頃は日野、立川地先までマルタの群れが押し寄せたが、多摩川下流から中流にかけて堰が増えると、マルタの遡上は途絶えた。小骨の多い魚で食味も劣り、多摩川流域では鶏の餌程度にしか利用されなかったが、大形魚を釣り上げる豪快さを楽しむ遊び漁として、またマルタ投網や大型簪での突きとり漁などの対象になった魚である。

○ニゴイ、カマツカ

ニゴイとカマツカは、スナヤツメと同じようにきれいな水質の砂地や礫質の川底がある水域を好む魚で、まだ多摩川が清冽であった戦前には、中流一帯に数多く生息していた。共に水の汚染に弱い魚種で、多摩川の水質汚濁でまずカマツカが、次いでニゴイが姿を消した。

ニゴイは多摩川流域で「サイ」又は「サイッコロ」、「ミゴイ」などと呼ばれた魚で、成長が早く、成魚は五、六十センチになり、戦前には数も多かった。ニゴイは体の小骨が多く、食味の劣る下魚とされていた。せいぜい鶏の餌程度にしかならなかったが、魚体が大きいので遊び漁の「掛け釣り」や「簪突き」の魚として、また職漁者にとっては「ひっかき」の練習用になった魚で、大形魚で食味に劣り、遊び漁の対象魚という点ではマルタと似ている。

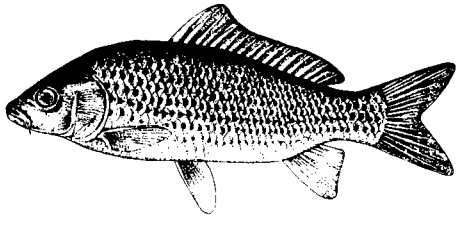
カマツカは多摩川流域で「コト」又は「コトブシ」といい、昔、中流の水のきれいな砂地で、頭を出しているユーモラスな姿がどこでも見られた。動きの鈍い魚でカジカと同様、子供が遊び漁に「簪突き」や「手摑み漁」でとった。白身の肉質は淡白、美味で頭や鰭が固く、塩焼きや天婦羅、砂糖醤油で煮付けて食した。

○コイ

鯉は深い淵のある泥質の川底の水域に生息する大形魚で、多摩川で礫の川床が多かった戦前は、中流の生息数はあまり多くはなかった。今日のように土砂の流入や水質汚濁で川底が泥質になり、加えて鯉の大量放流が行われたため、中、下流にはおびただしい鯉が見られるようになった。それまでは鯉が生息しなかった奥多摩湖や上流にも、鯉の姿が見られるようになった。

戦前、多摩川の中流で鯉がとれたのは「寄せ網」や「投網」の外道としてで、中流に比べ鯉の数も多かった下流では「鯉投網」や「鯉突き」が行われ、鯉の洗いや鯉こく、煮付けなどで食していた。

現在、多摩川の大物釣りの筆頭は



コイ

鯉釣りであり、川辺には四季を通じてリール竿を林立させて「鯉のぶっこみ釣り」をする釣り人たちの姿を見かける。鮎の漁期は数ヶ月にすぎないが、鯉やヤマベ、クチボソなどを対象にした遊漁は、年間を通じて行われている。水質汚濁の進行と流域の都市化によって、多摩川の流れもそこに棲む魚も変った。そして、流れに漁する人の姿も自づと変って行ったのである。

○フナ

鮒は鯉と同じように、多摩川が清冽な流れであった頃は本流での数は少なく、主に水田地帯の用水路や小川、池、砂利穴などの水域に生息し、子供たちの遊び漁に最も親しまれた魚である。中流域の方言で鮒を「ブンショウ」或いは「キンショウブナ」と呼んでいた。

流域一帯の細流で「掬い網」などの網漁法をはじめ「鮒笱」、「雑魚笱」、「手摑み」、「かい掘り」など、さまざまな漁法で鮒をとった。その頃、田圃を流れる小川での「鮒釣り」は、多くの人たちが体験したのどかな釣りであった。牧歌的な世界の流れに生息するこの魚を、多摩川の川漁師たちはあまり関心を示さなかった。商品価値が低く川魚仲買人も引きとりたがらない鮒は、職漁の対象外とされた。

川漁師とは別に、流域の人たちにとって、鮒は泥鰌と同様に、昔から「ケ」の魚として、日常の食生活に深くなじみ、当時の貴重な蛋白源になっていた。甘露煮や煮付けによく、白焼きにして「べんけい」に刺しておいて保存し、必要に応じて汁用のダシにも利用した。

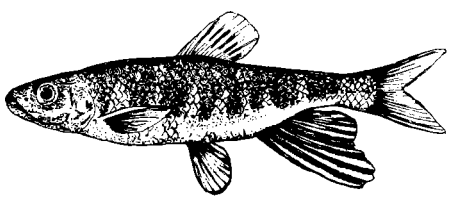
○タナゴ

多摩川の本、支流に生息する小形の魚で、中流域ではタナゴを「イタブナ」と呼んでいた。その当時の子供や老人の遊び漁の対象魚で、川漁師はとらなかった。イラガの幼虫を餌にした「タナゴ釣り」でよく釣れ、また、タナゴの群れに大きな石を投げつけ、そのショックで浮き上るのをとらえる「石ぶち」は、原始的で簡単な漁法だが、当時はタナゴがたくさんおり、この様な方法でも菜料程度の漁果があった。タナゴの腹わたにはにが味があるが、これを抜かずに砂糖と醤油で煮付ける。人によってはこのにが味が好まれた。

○オイカワ

オイカワは多摩川流域で通称「ヤマベ」の名で親しまれるコイ科の魚で、琵琶湖産放流稚鮎に混じって移入された。環境の変化に対する適応力があり、また旺盛な繁殖力によって新たな場を得た外来の新魚種は、またたく間に多摩川一帯の水域に生息範囲をひろげて行った。中流域の本、支流を中心に、昭和三十年代の砂利穴や、今では奥多摩湖上流の丹波川にも生息しており、ウグイをもしのぐ優占魚種になった。

オイカワは湖産稚鮎放流以前には多摩川に生息せず、従って江戸、明治期にオ



オイカワ

イカワとりの漁法はなかった。大正時代以降になると、多摩川ではオイカワを対象にした漁法が行われるようになり、遊漁では多摩川の「ヤマベ釣り」が、釣人たちに人気のある釣りとして知られるようになった。

川漁師たちはオイカワとウグイを雑魚と呼んで、鮎より下位の魚として扱ったが、戦後から昭和三十年代にかけて、川漁師の漁獲の中で鮎、ウグイ、オイカワが主流を占め、年々オイカワの比重が高まっていった。こうした生息魚の変化に対応し、オイカワの捕採に重きをおく漁法が多摩川で発達した。「ペラ網」や「ヤマベ刺し網」など、明治以前には見られなかった新しい技法が行われるようになった。

湖産の移入魚は二、三十年で多摩川の重要魚種として定着し、オイカワは今や、鮎やウグイ、鰻などと同様に川魚商が扱う仕入品目となった。川漁師は年間を通じて漁のできるオイカワ漁に重きをおくようになり、昭和三十年頃の多摩川では、筌漁法から網、釣、雑漁法など二十五、六種にのぼるオイカワ漁法があり、鮎やウグイのそれと少しも遜色がない。この漁法の多さが多摩川でのオイカワの重要性をよく物語っている。

昔から魚をとり、それをくらしの食に生かしてきた多摩川流域では川魚を好む人が多く、食魚としてのオイカワを抵抗なく受け入れた。天婦羅にして良く、煮付け、焼き魚など、当時の流域には、鮎よりもオイカワ料理を好む人たちがいた。

明治以前、多摩川には生息していなかった魚が、新しい水域に適応してまたたく間に広がった。この間数十年余り、琵琶湖から多摩川への移入と河川での適応と拡散の経緯の中に、オイカワという魚の秘めた、したたかな生命力の証を伺い知ることができる。

○モロコ、ヒガイ

モロコとヒガイはオイカワと同じく、琵琶湖産の稚鮎に混じって多摩川にもたらされた魚で、湖産鮎放流前には見られなかった。オイカワが多摩川に定着し、水質の汚濁にもめげずに大繁殖し、今日ではこの川の優占魚種にまでなったのとは対照的である。

モロコは多摩川中流域では、「モロッコ」と呼び、主に砂利穴水域でフナやモツゴと共に生息していた。数もモツゴほどではなく、川漁師もこの魚には関心が薄く、雑魚の一種として扱い、もっぱら遊漁者の「小物釣り」の対象魚になっていた。から揚げ、煮つけにして食した。

ヒガイは水のきれいな砂礫質の川底を好む魚で、大正の中頃から昭和の初めにかけて、多摩川中流にかなり生息していた。水質の変化に敏感な魚種で、多摩川の水質汚濁の進行により姿を消した。から揚げ、塩焼き、煮付けにして美味であり、当時、ヒガイの食味を好む人たちもいた。

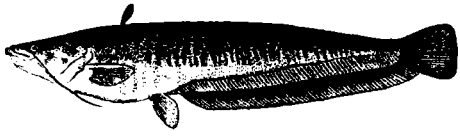
○モツゴ

モツゴは多摩川流域で一般に「クチボソ」といわれる魚で、戦前、本流には見られなかった。まだ多摩川の水がきれいだった頃は、主に砂利採取跡地の砂利穴などの止水域に、フナやモロコと共に生息して

いた。多摩川の本流でモツゴを見かけるようになったのは、昭和三十年代後半の、水質汚濁が問題にされるようになった頃から後であり、モツゴの生息範囲は、今や多摩川の中、下流水域一帯で大繁殖し、圧倒的な数を占めるようになった。

モツゴは比較的水質汚濁に強い魚種で、かつては下魚扱いされたが、現在では多摩川の「小物釣り」の代表的な魚種となり、クチボソ釣りは子供から大人まで、多くの釣り人たちに親しまれる対象魚になっている。食味に欠ける魚とされており、成魚の雄は骨っぽいため鶏の餌程度でしかないが、雌魚をから揚げや砂糖醤油の甘辛煮、串刺しにした筏焼きなどで食する人もいる。

○ナマズ



ナマズ

夜行性の肉食魚で、成魚の大きなものは体長五十センチほどになり、昔は多摩川の中、下流と支流、それに用水路などに生息していた。鯰は鰻と同じように物音に対して非常に敏感で、通常は薄暗い場所の泥質の川底を好む魚である。日中、本流では沈床や蛇籠の崩れ穴や乱杭回り、淵の繁みなどの障害物に身を潜め、夜になると棲み場を出て徘徊し、盛んに餌をあさる。

多摩川流域では遊び漁にとり、自家の菜料に用いたが、食味は淡白で、焼き上げて砂糖醤油のタレをつけ、鰻の蒲焼風にしたり、煮つけて食した。川漁師が鯰をまとまってとると仲買人に売り、こうした鯰が川魚屋の店頭で売られていることもあった。鯰とりは夏が主で、専用漁法の「鯰簀」や「ポカン釣り」をはじめ「雑魚簀」や「天王簀」の筌漁法、その他にさまざまな網漁法、釣漁法、刺突漁法、雑漁法などがあり、鯰とりの技法は多彩である。

○ギバチ

外見は小形のナマズに似た魚で、背と胸に鋭い棘があり、これに刺されると大変に痛い。きれいな水の砂礫の川底を好み、昼間は岩陰や石の下に潜み、夜間や出水で川が濁った時に活動し、動物性の餌を貪欲に食いあさる。かつて多摩川中流を中心に生息したが、水質汚濁により姿を消した。

ギバチは「雑魚簀」や「掬い網」、「置鉤」、「石倉」などでとれたが、この魚のとり上げには鋭い棘に注意しなければならない。淡白な食味の魚で、焼干しにして汁のダシとりなどに用いたが、専業の川漁師たちはこの魚を嫌った。ギバチが刺網にかかると他の魚がかからなくなり、さらに背と胸の棘が網糸にからみついて、夜間漁では外すこともできず、網を引き上げなければならない。ギバチは川魚仲買人も買ってくれず、網を台無しにするこの魚は邪魔者扱いにされた。だが、川濁りの時の「ぶっこみ釣り」や「かい掘り」でとれたのを白焼きや煮びたしにして、この魚の淡白な食味を楽しむ人もいた。

○ドジョウ、シマドジョウ、ホトケドジョウ

多摩川の本、支流と用水路や小川、水田地帯にはドジョウ、シマドジョウ、ホトケドジョウなどの泥鰌類がおり、それぞれの習性に応じた場所に生息していた。

ドジョウは泥鰌汁や鍋物に用いる普通の泥鰌で、流域に田圃がひらけていた頃、水田や畦畔沿いの水路など、泥質の水底の水域に生息していた。化学肥料や農薬も使われていなかった当時の水田は有機質に富み、プランクトンや藻類も豊富で、泥鰌にとっては恰好の生息場所であった。

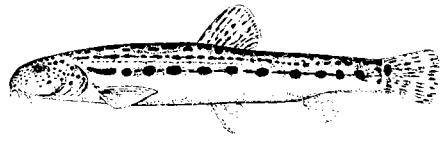
姿、形に似ず美味な魚で、栄養もある泥鰌は、農家をはじめ流域の人たちが好んで食した。専用の「泥鰌簽」をはじめ、「掬い網」や「泥鰌刺し」、「かい掘り」や寒期の「泥鰌掘り」などで盛んにとった。ほとんどが自家の菜料として泥鰌汁や柳川鍋、煮付けなどで食した。

その昔、広大な水田面積が産出する泥鰌の総量は大変なもので、手軽にとることのできた川魚の筆頭が泥鰌であった。正確な統計資料を欠くものの、当時、多摩川水系における魚種別蛋白質消費量の点では鮎を抜いて、ウグイに次ぐものであったろうと考えられる。

稲作以来、庶民のくらしに最もなじみの深い「ケ」の魚としての泥鰌は、かつてわが国各地の水田地帯がそうであった様に、多摩川流域の泥鰌が果たした役割も、ひっそりとしかも大量にとられて、夕餉の一品に加えられ、その当時の貧しい食生活に華をそえることのできた有用魚種であった。

シマドジョウは多摩川流域で「オイノメ」又は「オイノメドジョウ」と呼ばれた魚で、泥鰌とは生息の場を異にしていた。主に多摩川の本流や支流の水のきれいな砂地の川底におり、形は泥鰌よりも小さく、体側に美しい斑紋がある。

食味は泥鰌のような泥臭がなく、淡白な肉質の大変美味な魚で、「掬い網」や「ドンドン筌漁」でとった。汁の具によく、佃煮風の煮付けも美味であり、この魚の愛好者は今でもその味が忘れられないという。だが、きれいな水と砂底にしか生きられない小魚は、多摩川の水質汚濁の影響で、いち早くその姿を消した。



シマドジョウ

ホトケドジョウは、用水路や小川などで筌漁や網漁の際に、泥鰌に混じってとれることがあり、泥鰌より生息数が少なかった。子供たちの「掬い網」の対象魚程度であったが、水田に化学肥料や農薬が使われると、泥鰌とともにいなくなった。

○カジカ

多摩川中流を中心に、その上、下の水域一帯に生息する底生魚で、今では滅多にその姿を見ることができなくなったが、流れが豊かであった頃、箱眼鏡で水中をのぞくと、きれいな川底のあちこちに鰍が沢山いた。多摩川流域では鰍を「カジッカ」と呼び、体長五センチ前

後の保護色をまとった小魚は、動作もあまり俊敏でないため、流域の子供たちが恰好の獲物として追い求めた魚である。

岩の隙間を棲み場所に川底を徘徊する小魚を、箱眼鏡で探して箍で突く「鰍突き」は、流域の多くの少年たちが体験した楽しい遊び漁であった。とれた鰍を竹串に通し白焼きにして「べんけい」に刺しておいて、後日焼き戻して生醤油をつけて食べたり、ソバ汁のダシなどに用いた。姿、形からは想像もつかない肉質の淡白な美味な小魚で、人によっては鮎より鰍の風味が好まれ、酒の肴に合う「ケ」の魚として根強い人気があった。

きれいな川底に生きる鰍は、多摩川の水が徐々に汚染されて川底にヘドロが沈積するようになると、生息の場と餌と産床が一挙に失なわれた。かつて流れの石周りに点々と散らばって、子供たちでも容易にとることができた小魚の姿は、今では見られなくなった。

○ヨシノボリ

多摩川の下流から中流にかけて生息したハゼ科の魚で、腹部の吸盤を川底石に張りつかせながら移動することから、立川、日野辺りではヨシノボリを「スイツキ」とか「スイッチョコ」といい、下流では「ゴリ」と呼んだ。

ヨシノボリはきれいな水を好み、川底をスイスイと泳ぐ動作の早い魚で、下流では「ゴリ網漁」でとり佃煮の材料にした。大量の砂利採取で多摩川の川床が変り、戦前から激減した魚種であるが、その後の水質汚濁によって姿を消した。

○シラウオ

多摩川の下流では一月から四月頃にかけて、白魚が産卵のため東京湾から大挙して遡上する。白魚はシラウオ科の美味な魚として知られるが、体が透明の一年魚で、東京湾から汽水域一帯にかけて生息している。

江戸時代より隅田川の白魚が有名だが、多摩川では白魚を「シラス」と呼び、下流ではシラス舟を繰り出して「白魚四つ手網」や「白魚刺網」、「白魚掬い網」、「白魚引網」などが行われた。戦後も丸子堰下まで白魚が遡り、職漁者たちが網漁を行っていたが、昭和三十年代に至り、長い伝統を誇る多摩川の白魚漁は廃絶した。

シラウオ

○ボラ

ボラは東京湾に生息する魚であるが、春から夏にかけて河口から大挙して多摩川を遡上し、中流にも沢山やってきた。まだ堰がなかった明治、大正頃までは、秋川の合流点あたりまで遡上し、秋になると川を降る。

ボラは水面をよく跳ねる魚で、「張り網」で魚群を寄せてもポンポン飛び回り、とれるのは一割にも満たないことがある。刺身、塩焼き、フライなどに良く、昭和に入り多摩川に堰が増えるとボラの遡上は止

んだ。ボラの跳躍は、今では下流の汽水域でしか見られない。

○ハゼ

鯊（ハゼ）は東京湾とその流入河川の下流に生息する魚で、多摩川では夏の終りから晩秋にかけて、河口から汽水域に大挙して遡上した。職漁者は「四つ手網」や「追い寄せ網」で大量にとるが、鯊は江戸時代から遊び漁として庶民の人気を集めた魚であった。姿、形に似ず淡白な味の魚で、甘露煮や白焼き干しにして食した。

東京湾一帯の水質汚濁の影響で、鯊の数が一時減ったことがあったが、今では増えつつあり、伝統的な江戸前の「鯊釣り」が盛んになっている。

○ヌカエビ、スジエビ、テナガエビ

多摩川流域の自然が豊かであった頃、本、支流や用水路、それに砂利採取跡地（通称砂利穴）などの水域には、甲殻類のヌカエビやスジエビ、それにテナガエビなどの淡水蝦が生息していた。

ヌカエビは体長二、三センチの小さな蝦で生息数も多く、ゆるやかな流れの岸近くで「掬い網」や「ぶったい」でいくらでもとれた。ヌカエビとりは誰でも手軽にできる漁で、「カジカ突き」と同様、子供たちの恰好の遊び漁であった。とれたヌカエビをかき揚げや砂糖醤油で佃煮風にして自家の菜にした。

ヌカエビより大形で体長五、六センチのスジエビは、半透明の腹部に七本の黒い縞があり、水のきれいな所に生息していた。ヌカエビほど数は多くなかったが「柴漬け」や「石倉」でとれることがあり、ヌカエビと同じ調理法で食した。ヌカエビ、スジエビとも美味なため、好む人が多かった。

テナガエビは第二胸脚が長くつき出た淡水蝦で、スジエビよりも大きく体長十センチほどで、砂利穴などの止水域に生息していた。「掬い網」でもとれるが、昭和三十年代まで梅雨の季節に、砂利穴で「手長蝦釣り」を楽しむ釣人の姿が見られた。テナガエビも美味な蝦で、炭火で焼く鬼がら焼きや佃煮、天婦羅などで食した。

甲殻類の蟹や蝦は水質汚濁に大変抵抗力の弱い生き物で、とくに農薬系の汚染にはひとたまりもない。多摩川の汚れが徐々に進み、かつての砂利穴も宅地化で消滅し、以後、蝦たちの姿は見られなくなった。

○タニシ

多摩川の流れに沿って水田がひらけ、まだ農薬も化学肥料も使われていなかった頃、田圃にはたくさん田螺がいた。稲刈りが終り田の水を落した田圃では、農家の子供や老人たちが田螺を拾い集めて、田螺汁や田螺味噌などの自家菜料にした。

戦後、多摩川流域の宅地化、市街化が急速に進む中で、水田は次々と失われ、かつて流域の人たちが好んで食した田螺も見られなくなった。

○シジミ

多摩川の下流水域、それと中流では本流に注ぐ支流や小川の砂と泥

とが混じる川底に、蜆がたくさんいた。その頃、蜆は体に良く、薬になる貝として知られ、流域の人たちがとっていた。中流では笊やじょれんを使った「蜆掘り」があり、下流では職漁者による「腰巻き漁」で大量の蜆をとっていた。多摩川の水質汚濁が進む中で、烏貝や田螺などと同じように蜆も姿を消した。

第二編　漁撈技術の変遷

多摩川の漁撈は、流域に人が住みついて以来、先史時代からさまざまな漁を行っており、長い時間をかけて魚とりの技法を発展させてきた。「手摑み漁」や「追いこみ漁」、それに簡単な「刺突漁」など、多摩川水系で自然発生的に行われた原始漁法に加えて、他水系との交流による新技法もある。中にはこうした伝来技法の基本をふまえながら、多摩川の魚族や川の状況により適合したものに再構成されて、流域に定着したものもある。

外来の新技法が流域に定着した後、多摩川水系にとどまることなく、やがて他水系間との交流で近隣流域に伝播し、そこでも多摩川と同様の推移を経て定着すると、さらにより遠くの水系へと伝わる。伝播と定着の相互作用による広域諸河川流域の間で技法の普遍化が進んだ結果、生息魚種と河川形状に著しい差異のない多摩川と近隣河川とでは、共通した技法が営まれることになり、それぞれの河川の伝統漁法としての長い歴史を有することになる。一般的にはサケ水系とアユ水系、或いは河況を異にする大河川と小河川、制度を異にする流域社会との間では、近隣水系であっても技法の普遍化は限られたものとなる。とは言うものの、多摩川流域に定着した伝統漁法の中には、全く性格を異にした湾岸漁撈の影響が見られる例もある。魚族の捕採原理を移入しながらも、形式をその河川に適応させた技法として確立させており、このことは沿岸と河川との交流、伝播、定着を考える上できわめて示唆に富むものといえる。

魚種も漁場も異る東京湾岸で行われた技法が多摩川中流に伝わり、その川の魚族、漁場に適合する技法として再構成され、定着した例がある。昭和三十年頃まで多摩川の中流域で行われた「ペラ網漁」は、その系譜をたどれば、魚追いの原理としては古くからの在来漁法「鵜縄漁」の形を変えたものであるが、ペラ網漁の技法手順、使用漁具の形状からして、その淵源は鵜縄漁ではなく、多摩川河口一帯の湾岸、さらに外海で行われた技法の影響が濃厚にみられる。さらに多摩川近隣河川の荒川では、同様の技法が「ガラ引き漁」として行われていた。

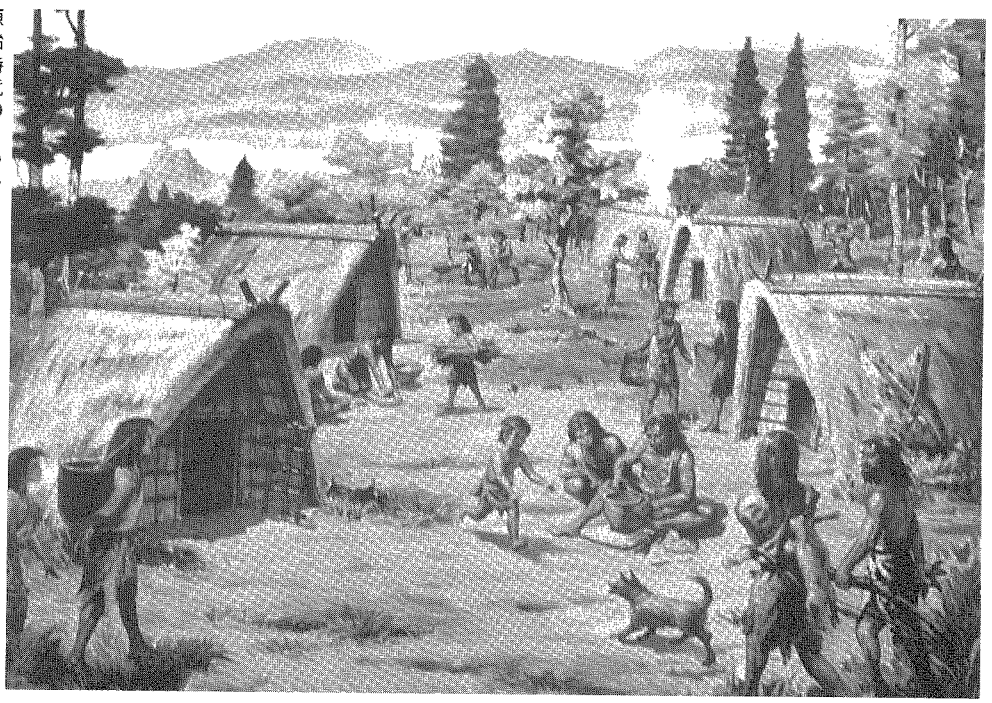
先史時代から古代、中世を経て、流れで営まれた多摩川の伝統漁法は、江戸時代中期から後期にかけて急速な発展をとげ、引き続き明治、大正、昭和初期にいたり、その間に輝やかしい漁撈文化を開花させる。かつては東国の辺境を流れる一河川にすぎなかった多摩川が、長い歳月の下で営んできた技法の変遷の中に、この川の生命力の消長がうかがわれる。

第一章　先史時代

多摩川の漁撈が有史以前より行われていたことは疑問の余地がないが、当時の実状を物語る出土品はきわめて少ない。多摩川流域での発掘調査が進み、先史時代の人々の営みが次第に明らかにされているが、漁撈関係資料としてはわずかに石錘や土錘、それに土器片錘にとどまり、漁網や筌、釣鉤、銛など、その当時に使用された筈の漁具の出土例はない。極めて限られた出土品である錘類のみで当時の多摩川で営まれた漁撈を論じることは、史実を限定した過少評価の危険を伴うものであり、少ない出土品を基本としながらも、考古学や漁撈民俗学、文化人類学などの成果をふまえながら、先史時代における多摩川の漁撈について、ある程度の解明を試みることができる。

今からおよそ一万年前、多摩川流域に人が住み、生活していた。

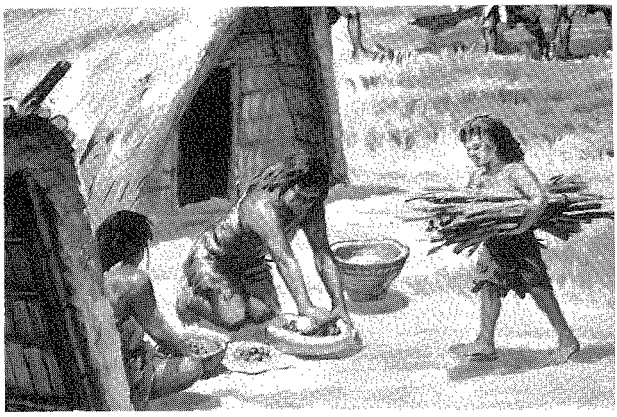
武蔵野台地を流れる多摩川沿いに浸蝕地形の洪積世河岸段丘が発達し、そこは「ハケ」と呼ばれる湧水崖線がつづき、崖下には豊富な地下水が湧き出ていた。水が人のくらしの基本条件であることは昔も今も変りなく、古代人たちもこうした場所に住みついて、小単位の集落生活を営んでいた。当時、東日本一帯は栗やドングリが実る落葉樹林がひろがり、緑あふれる深い森におおわれていた。発掘で明らかにされた住居跡は、いずれも飲用水の得られる場所で、近くには多摩川が



原始時代のくらし

豊かに流れ、そこには今日では想像もつかないほど沢山の魚が生息していた。周辺の山野には鹿や猪が棲み、豊かな流れと深い森に育まれた大自然の中で、縄文人は狩猟、漁撈、植物採集等によるくらしを営んでいた。人びとの往来には河岸が利用され、多摩川は漁の場であるとともに道であり、簡素な丸木舟で流れを行き来することもあった。

多摩川は豊かな魚族を育み、季節になると鮎や桜鱒、ウグイなどが群れ泳ぐ姿が見られた。縄文人たちはこれらの魚を獲り食用にしたが、その中で、網漁法に用いた石錘や土器片錘が縄文期の住居跡から出土している。



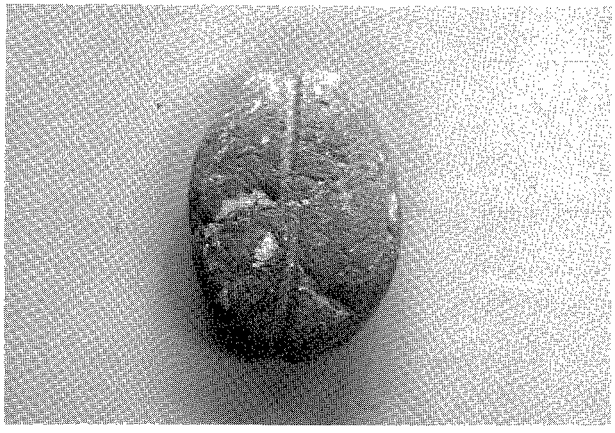
原始時代のくらし

石錘は長さが十センチ前後の偏平な卵型の川原石に、糸をくくりつける溝を穿った石の重りで、土器片錘は焼成土器の破片を加工して、石錘と同様の糸のくくり溝を刻んだ素焼き土器の重りで、双方とも、漁網の一方を沈めて水中に張るための重りである。この出土錘は、流れを泳ぐ魚を取り囲む網や魚を捕採部に追い寄せる網に使われたと思われる。当時の漁網は植物繊維をより合せた太い糸で、網目の粗い、今日から見れば大変に粗雑な漁具であるが、これで十分魚がとれた。その当時、流れに生息する魚の数量は、われわれの想像をはるかに超えたものであり、多摩川は生命力に満ちあふれていた。

その頃の多摩川で、大型魚といえば桜鱒がある。

春から夏にかけて、東京湾から体長五、六十センチに成長した桜鱒の大群が産卵のために上流めざして遡る。中流の淵から瀬へ群れ泳ぐ大魚の到来は、毎年、多摩川沿いに住む縄文人たちが心待ちにしていた獲物であり、早速に石錘や土器片錘のついた網を持ち出して流れに張り、川岸に追いこんで大量の桜鱒をとっていた。この漁で網が桜鱒の追い寄せに使

網漁に使われたと推定される縄文時代の石錘／都立五日市高校出土、同校所蔵



奥多摩町内から出土した石錘／奥多摩郷土資料館蔵

われたと考えるならば、昭和三十年代まで行われた多摩川の伝統漁法である「寄せ網漁」と同じ網機能であり、魚の追い寄せ網漁の系譜は、はるか縄文時代にまでさかのぼる。

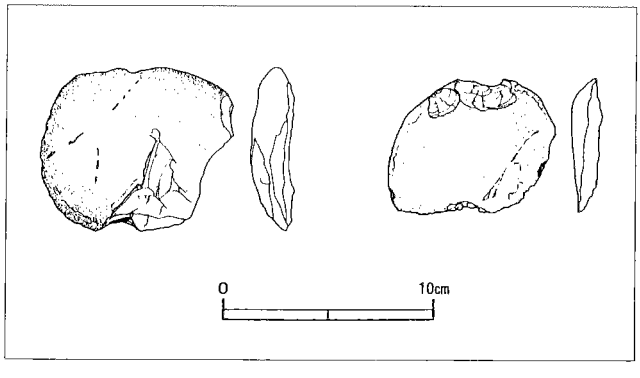
魚追い寄せの網漁法に使われたと考えられる石錘や土器片錘は、多摩川沿いの幾つかの遺跡から出土しており、手許の限られた資料だけでも、石錘に関しては秋川沿いの台地（都立五日市高校構内敷石住居址・前田耕地遺跡）、立川段丘、拝島段丘の崖線上の遺跡、日野市内で多摩川と浅川が合流する微高地の南広間地遺跡、それに狛江第一小学校遺跡での出土例があり、石錘の出土箇所は多摩川流域ではまだ他にも見られる。一方、土器片錘については、八王子市内で出土しており、時代は降るが、平安期の土器片錘が調布市内の府中崖線下の杉森遺跡から出土している。

その当時における多摩川の漁撈の実体は、限られた出土品のみによるものでは正しく解明されない。幸いにして錘類は後世に残されたが、それに関連する漁網は根跡をとどめず、いずれの住居跡からも縄文人が魚とりに用いた筌や釣竿、刺突具などは発見されていない。当時の日常生活で用済みとなった古い漁具は、焼却処分されるか打ち捨てられたまま腐蝕にまかせ、消滅したのである。故にこれらの漁具は出土品として発掘されることがない。

昭和の初期頃まで多摩川で行われた伝統漁法の中で、古い歴史を有する幾つかの漁法がある。それらはいずれもきわめて原始的で単純、直截な技法であり、人が魚と対した時、時代や洋の東西を問わず必ずや行うであろう、人間習性に根ざした本能的な漁法である。

漁具を持たない人間が、流れに群れ泳ぐ大量の魚と出会った時、川に入って手摑みするか、石を投げたり、或いは手近な棒で突いて魚をとろうとするだろう。これは人間の本能的な行動習性であり、きわめて自然な行為として理解される。こうした原始的な漁法は多摩川に限らず、普遍的、自然発生的な漁（すなどり）の技法として、人が水辺に住んで以来、連綿として行われてきた。そうした片鱗を、昭和初期まで継承された多摩川の伝統漁法の中に見ることができる。「手摑み漁」や「石ぶ

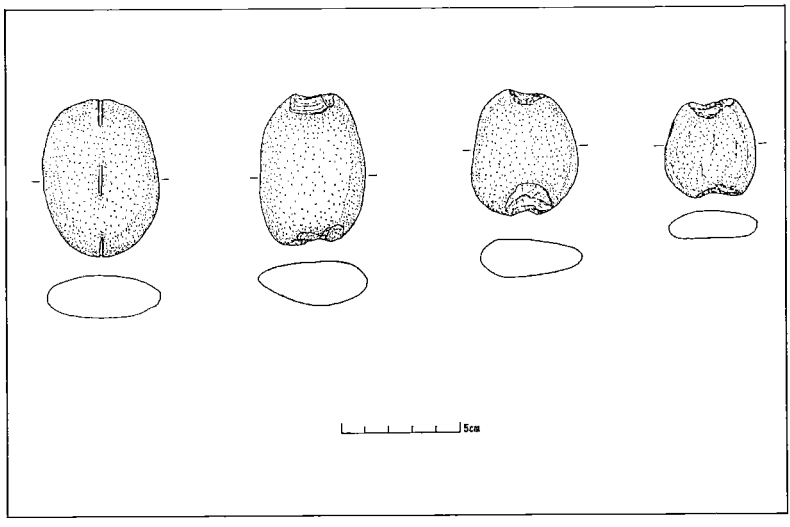
縄文時代の石錘計測図／南広間地遺跡出土・日野市



ち」、それにさまざまな「刺突漁法」などは、有史以前から多摩川で行われていた漁法と考えられるのである。

現在判明している多摩川の伝統漁法の中で、原始性が濃厚で長い歴史を持つ技法について、漁法発生経緯の必然性、妥当性を勘案しながら、縄文・弥生の原始時代に多摩川で行われていたと想定される漁法の幾つかをあげてみる。

秋川の河岸段丘前田耕地遺跡から出土した石錘計測図
（縄文時代）・秋川市



一、原始雑漁法

○手掴み漁

水中の魚を素手で掴みとるもので、原始未開の種族では普遍的に行われている技法であり、流れの魚が川石の間や川岸の「えぐれ」などに潜んでいるのを素早く手掴みしてとる。ヤマメ、ウグイ、ナマズ、ウナギ、コイ、フナなどがとれ、漁具を使わない最も原始的な漁法といえるが、手掴み漁は、現在でも各地の河川で

奥多摩の秋川渓谷山女魚やウグイを手掴みする山窩
／『サンカの社会資料篇』より

行われている。

三角寛の『サンカの社会資料編』に、昭和二十四年八月、奥多摩秋川源流で山窩がヤマメ、ウグイを手摑みする記録がある。二人の男が褌一つで細流に入り、魚を追いながら石の下に潜んだ魚を次々と手摑みして川岸に放り投げ、それを女房たちが拾い上げて串焼にする。いとも簡単に川から魚をとり上げる男の妙技に感心させられたとあるが、山窩を縄文・弥生の古代人におきかえれば、豊かな魚族を育んだ当時の多摩川では、手摑み漁こそ最も単純で効率的な技法であったかも知れない。

また淵などの深場所では、素潜りの手摑み漁が行われた。自然の流れに馴れ親しんだ彼等にとって、水中の魚をとらえることなど造作もないことで、大形魚のマスやコイなどの魚を易々ととらえていた。

○石ぶち

水中を群れ泳ぐ魚めがけて石を投げ、直撃で浮き上る魚をとる粗暴な漁法であるが、多摩川では昭和初期まで行われていた。また、石の下に潜んでいる魚をとるために、その石の頂点めがけて川原石を力いっぱい投げ下す。その時の衝撃で魚が脳しんとうを起し、浮いた所をとり上げる大変に手荒らな技法である。

○叩き

石ぶちと同様にきわめて単純、直截な技法である。木の棒などで魚群を素早く叩きつけ、直撃や衝撃で浮く魚をとり上げる。石ぶちといい、叩きといい、漁法とはいえないような単純、粗野な技法であるが、太古、沢山の魚が群れ泳ぐ多摩川では、現在のわれわれが想像するよりも有効な漁法であったに違いない。

○石倉

川岸近くの流れに川石を積み上げておき、石の間にウナギやナマズ、ギギなどの魚が居ついたのをとらえる。人為的に魚の寄り場をつくり、石の隙間を好む魚の習性を利用した巧妙な技法。

○漬漁

石倉と同じように魚寄せに葉つきの枝や笹を束ね、水中に浸しておいて魚が寄った所を引き上げてとる。ウナギ、ナマズ、エビなどをとる。

○瀬干し

流れを遮断して堰とめ、水が引いた所で下流の魚をとり上げる。原始的な漁法だが干し上げた区間の魚が総どりでき、瀬干しに適した漁場は、流れが分流しているような所で、止め水を迂回させる。瀬干し漁は、漁場の規模によって共同で行うこともある。

○すくい・かぶせ

植物の繊維で作った粗雑な網、或いは竹や蔓で編んだ篭状の用具で水中の魚を追いこんで掬いとる。原理的には今日の網掬いと同じだが、

当時の掬い具は手製の粗雑なものであったが、魚が豊かであった当時の流れでは十分な機能をはたしていた。また、こうした漁具を、魚群に素早くかぶせとることも行っていたであろう。

○毒流し

山椒の樹皮と木灰を混ぜ合せた煮汁を細流に流して魚をとる毒流しは、最近まで山間部で行われていた。山野をかけ廻り、草木の効能について豊富な知識をもつ古代人たちが、魚を酔わせる毒性植物を、魚とりに利用していたとしても不思議はない。

二、刺突漁法

魚を突き刺してとらえるのは、未開種族の間で普遍的にみられる漁法である。刺突具の穂先には単穂と複穂があるが、初めは単穂の銛から、魚種に応じた複穂の簪へと分化した。こうした銛や簪で流れの魚を仕止めるが、当初は木や竹の先を鋭利に削いだ簡単な刺突具であったが、やがて獣骨や石器を刺突先端部にとりつけたものに進化し、さらに時代が降ると金属へと変った。こうした刺突具で、太古の人たちは群泳するマスやコイ、マルタ、ウグイなどの比較的大型の魚をとっていた。

三、網漁法

多摩川流域から出土した縄文期の石錘や土器片錘は、当時の漁撈文化の根跡を物語る数少ない網漁具部品である。これは先述のように、寄せ網のような流れを仕切る漁網の重りに用いられたと思われる。所で当時の漁網についてだが、この時代、麻や絹は使われておらず、漁人たちは山野に自生する植物の繊維を撚り合せて編んだ、粗雑な網で流れを仕切ったり、魚掬いに用いていた。

多摩川流域で、麻や絹が漁網の素材に使われるのは奈良時代以降であり、細い繊維を撚り上げた製網技術の進歩で、縄文期のそれよりはるかに精巧なものが使われた。

四、筌漁法

竹や木で編んだ筌を流れに仕掛けて魚族を陥穽させる筌漁法は、未開種族の間でひろく行われているが、縄文期の多摩川で行われたと推測する根拠にとぼしい。だが、静岡県浜松市の伊場遺跡からは奈良時代、七世紀後半の筌が出土しており、多摩川の筌漁の歴史も西日本からの伝播漁具としてこの頃から始まるものか、或いはサケ、マス北方文化圏の影響により、縄文期にはすでに筌漁法が行われていたものかどうかは、確証に欠ける分野である。

五、釣漁法

釣鉤を用いて魚を釣りとる漁法は、古くから行われたが、内水面漁撈としての釣鉤の出土例は、多摩川流域には見られない。だが東京湾沿いの遺跡からは釣鉤が出土していることから、内湾部と河川流域の交流で、釣鉤による漁法が多摩川にもたらされた可能性は十分に考えられる。

今からおよそ一万年から二、〇〇〇年前の多摩川は、東京湾の海進で河口部は七、八キロ内陸にあったといわれるが、現在のように堰も護岸もない自然河川のままで滔々と流れ、豊かな魚族を育みつづけていた。この地に住む人たちは魚を手摑みし、銛で突いてとらえていた。

太古に行われた原始漁法の一部が、昭和の初期まで行われていた事実に驚かされるが、これらの漁法は、先史の時代に漁の技法として、すでに完成されていたことを物語っている。きわめて単純な魚とりの手法は、後世にいたるも改良と進歩の余地がなく、手摑みをはじめ、石ぶち、瀬干し、それに刺突漁法などは、太古以来そのままの姿で現代に継承されたのである。

第二章　古代・中世

古墳・奈良時代における多摩川の漁撈が、どのようなものであったかを示す資料は見当らない。だが前述の縄文、弥生期の技法を継承しながら、徐々に改良が加えられ発達したことは疑いない。時代が降るにつれて人の往来が盛んになり、他水系からの漁撈技術の移入や伝播で、漁具の改良や新しい漁法が多摩川流域にもたらされ、そこで定着するとともに、そうした技法がさらに別の水系に影響を与えて行く。長い時の流れの下で、水系相互の間では、漁技法の伝播、交流、定着が行われ、その結果として関東の各河川では技法の普遍化が進んで、ほぼ同様レベルでの漁撈が行われたと考えられる。

六・七世紀の多摩川の漁撈文化について考える際に、当時、この地域に定住するようになった帰化人がもたらした技術について、注目する必要がある。

六世紀から七世紀にかけての朝鮮において、古代朝鮮が多数の部族国家から新羅、百済、高句麗の三国統一への過程で、またその後の百済、高句麗が新羅に滅ぼされる戦乱の中で、朝鮮からは多くの人が新天地を求めて日本に逃れた。国内の各所に散在した朝鮮からの帰化人は、大陸の新しい技術を扶植し、古代日本の文化や技術の向上に計り知れない貢献を果した。当時、未開の辺境といわれた関東一円にも、帰化人たちが住んでいたが、時の政府は統制上、散居する帰化人を一ヶ所にまとめることにした。

七一六年、「元正天皇の霊亀二年五月、駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野等七ヶ国に安置した高麗人総て壹千七百九十九人を武蔵国に移し、新に高麗郷を建てた。」と『続日本紀』にある通り、高句麗や百済からの帰化人を、現在の埼玉県入間郡、東京都狛江市などに再移住させた。高句麗は高麗（こま、こうらい）とも呼ばれ、現在の多摩川沿いの狛江市の狛の字は、高麗の転訛といわれる。その当時、未開の多摩川流域に住みついた帰化人は、朝鮮からの新しい技術をもたらしたが、その中で養蚕と織布による絹織物や麻布があり、これらの品は帰化人に対する「調」として、政府への納税品になっていた。『万葉集』巻十四に、

多摩川にさらす手作りさらさらに
何ぞこの児のここぞ愛（かな）しき

とあるように、調布や狛江地先の多摩川で、布曝しが行われ、また「調布」の地名は、この地がかつて織布の特産地であったことの証であり、世田谷区内の「砧」の地名も織布に関係し、古代の多摩川沿いの地は布の里として知られていた。布を織るためには、原材料の生産から撚糸、織りに至る高度な技術が要求されるが、八世紀頃にはすぐれた製糸品の出現により、網漁具も飛躍的な進歩をとげたと考えられる。

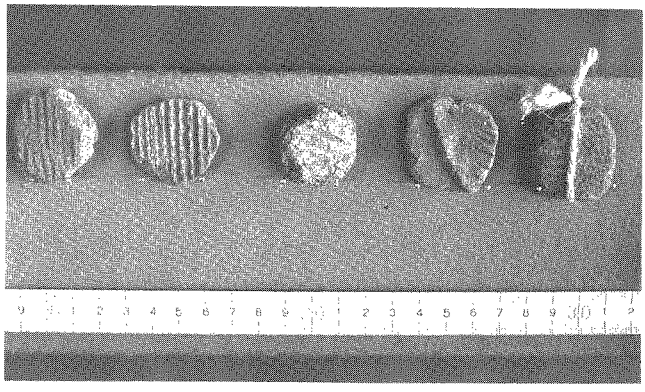
それまで山野に自生する植物の繊維を用いた粗雑な漁網は、より細く強い麻糸や絹糸に代り、軽量化した漁網は操作性、耐久性によりすぐれた漁具として、漁獲効率の向上に大きな貢献を果たしたであろう。

また、従来の粗い原始的な網漁具ではなしえなかった、細かい細工を施した網構造の新漁具も考案され、帰化人が伝えた製糸技術は、当時の多摩川の漁撈に技術革新をもたらしたのである。

時代が平安期になり、多摩川における漁撈の消息を伝える資料は、依然として少ないが、この頃の網漁法の存在を伝える土器片錘が、調布市杉森遺跡から出土している。多摩川左岸の段丘崖（府中崖線）下の沖積低地の住居跡から出土したが、この頃には、縄文時代よりもすぐれた性能の網で漁をしていた。

平安時代の多摩川の漁撈で特筆される記録としては、十一世紀の中頃、府中地先の多摩川で行われた夜川鵜飼を詠んだ和歌があり、当時、瀬で篝火を焚きながら川面を照らし、鵜を放って鮎をとる徒鵜飼が行われていたが、この鵜飼については、別項で述べることにする。

平安から鎌倉、室町時代にかけて、坂東の地は都の人たちから見れば依然として辺境であり、多摩川は東国を流れる一河川にすぎなかった。多摩川における漁撈関係資料が見られるようになるのは、江戸時代を待たなければならない。それまでの間、多摩川は黙して語らないが、流域の住人たちは、昔から受け継いださまざまな漁法を駆使して流れで魚をとっていた。



平安時代の土器片錘／調布市郷土博物館蔵

第三章　江戸時代の記録に残る漁法

江戸時代以前、坂東の一河川にすぎなかった多摩川は、家康の江戸開府により、西郊を流れる軍略上の河川として、さらに幕府への鮎上納の御菜河川として、重要な役割を果たすことになる。多摩川はそれまでの様相を変え、江戸と深く係り合いながら特異な漁撈文化を開花させる。江戸期前までは記録に留められることの少なかった多摩川は、時の政治、経済、社会、文化など、広範な分野と関連を持ちながら、さまざまな記録を後世に残すことになった。そうした資料の中で漁撈に関する記録も見られ、同時代に行われた漁の実態を伺い知ることができる。清流に魚を求めて漁する技法について、現存の資料から列記してみた。（　）内は漁法の異称で、漁場と付記、年代、それに出典を略記した。

投網漁／『江戸名所図会・玉川猟鮎』部分

一、筌漁法

●瀬張（もじ漁・瀬張網・部屋網）＝府中～拝島地先水域・鮎威しの張網使用／文政六年（一八二三）『武蔵名勝図会』

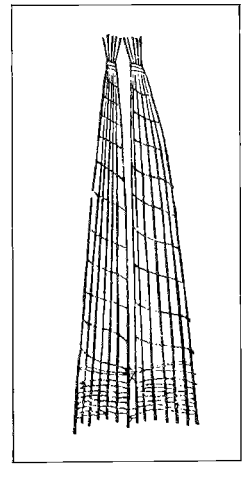
＝多摩川中流の漁撈図絵／江戸後期『江戸名所図会』

●鵜縄もじとり＝瀬田（二子多摩川）地先・鵜縄で鮎を追い仕掛けたもじに入れてとる／天保三年（一八三二）『玉川遊記』・『漁猟手引』

●しら＝二子多摩川地先／宝暦三年（一七五三）『鈴木家文書』

＝狛江地先水域／『狛江市史料集』

●ツツッポ（竹筒漁）＝多摩川河口／『羽田史誌』

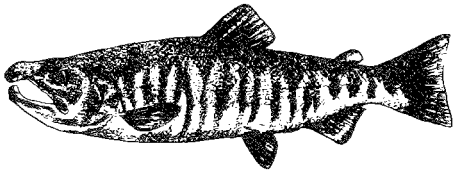


江戸時代に描かれた「もじ」の図／『魚猟手引』（天保年間）より

二、網漁法

●投網（打網・唐網・扨網）＝多摩川上流の丹波村ではヤマメ、二子多摩川では鮎をとる／天保十二年（一八四一）『玉川泝源日記』

魚留瀧鱒漁図の拡大。瀧の水しぶきを浴びながら二人の漁人が手にした叉平網で、跳び落ちる鱒を待つ姿が描かれている。／『武蔵名勝図会』



サクラマス。降海型のヤマメが体長四、五十センチに成長し、産卵のため母川に回帰する。江戸時代には玉川ではサクラマスが盛んに遡上した。

＝府中領から三田領（多摩川中流）にかけて行う／文政六年（一八二三）『武蔵名勝図会』

＝秋川では昼夜にわたり行う／『秋川市史史料集』

●鱒跳網＝鳩の巣地先の魚留（なる）滝で桜鱒が滝を上りきれず、跳ね戻る時叉手網に受ける／文政六年（一八二三）『武蔵名勝図会』

＝秋川では桜鱒の他に鮎やウグイをとる（踊網）／文政五年（一八二二）『新編武蔵風土記稿』

●鱒地引網＝技法の内容不詳・鱒の寄せ網漁か（筆者注）／文政六年（一八二三）『武蔵名勝図会』

●寄せ網＝宇奈根村（砧）地先で行う／天保三年『松の柴折』

●鵜縄＝玉川瀬田（二子）で行う／嘉永五年（一八五〇）『瀬田之記』

●跳網＝拝島のあたりで六、七月の炎天下に行う／文政六年『武蔵名勝図会』

●さで網（纚（さで））＝多摩川支流の小川や枝川／文政六年（一八二三）『武蔵名勝図会』

＝多摩川河口で白魚をとる／『大田区史誌第十六号』

●袋網＝玉川瀬田（二子）の鮎漁／天保三年（一八三二）『玉川遊記』

●火振網＝多摩川上流での鮎追い網漁／『奥多摩町誌』

●白魚四つ手網＝多摩川河口から大師沖／『羽田史誌』

三、釣漁法

●鱒釣り＝技法の内容不詳／文政六年『武蔵名勝図会』

●さくり＝拝島地先水域・六月末からの釣漁／文政六年（一八二三）『武蔵名勝図会』

●おとり釣り＝秋川で行われた江戸後期の新技法／『秋川市史史料集』

●はや釣り（雑魚釣り）＝多摩川中流域／江戸中期以降『江戸名所図会・多摩川鮎猟』に描かれた左二人の釣人は、鮎漁ならぬ雑魚（ハヤ）釣り姿である（筆者注）

●まるた釣り＝川崎・羽田で十月頃の遊漁／文政年間（一八一八～二九）『釣客伝』

●せいご釣り＝川崎・六郷で秋の遊漁／『釣客伝』

四、雑漁法

●鵜飼＝秋留川（秋川）で火を灯して夜川鵜飼を行う／文政六年（一八二三）『武蔵名勝図会』
＝柴崎村（立川市）地先での鵜飼記録／宝暦九年（一七五九）『鈴木家文書』
＝二子地先の将軍御成川狩・鵜飼他／宝暦三年（一七五三）・文化四年（一八〇七）・天保二年（一八三一）・天保十二年（一八四一）『五日市町史』
＝玉川瀬田（二子）／天保三年（一八三二）『玉川遊記』
＝柴崎村（立川市）地先の多摩川／寛政元年（一七八九）『柴崎往来』
＝多摩川中流での夜川鵜飼の浮世絵／江戸後期・広重画『江戸近郊八景之内・玉川秋月』
＝多摩川中流の鵜飼図絵／江戸後期『江戸名所図会・多摩川』・『調布玉川図会』
●梁（魚簗）＝押立の渡付近（府中市押立）の梁場の夜漁／天保十二年（一八四一）『玉川泝源日記』
＝府中領より三田領の水域（多摩川中流）／文政六年（一八二三）『武蔵名勝図会』
＝玉川瀬田の簗／天保三年（一八三二）『玉川遊記』
●瀬干＝玉川瀬田（二子）で流れを干上げて鮎をはじめ魚を総どりする／天保三年（一八三二）『玉川遊記』
●川倉＝玉川瀬田（二子）で行う／天保三年（一八三二）『玉川遊記』
＝青梅地先で行う／『青梅市史史料集』
●火振＝夏・青梅地先で行う／『青梅市史史料集』
●毒流し＝昭島地区の多摩川支流／『昭島市史附編』

以上、当時の記録から江戸時代における多摩川の漁法の大要を知ることができるが、手許の限られた資料のためまだ他にもあると思われるが、これらの漁法は鮎とりに関するものが多く、当時の多摩川で行われていた筈の漁法が欠落している。

太古以来、多摩川では鮎漁に限らず、さまざまな漁法が行われた。鮎以外の魚族を漁する流域住民がおり、流れでひっそりと単独漁を行っていたが、そうした漁法については記録者もあまり関心を示すことなく、鮎漁に集中している。

多摩川流域では、昔から鮎以外の魚をひとからげに「雑魚」として扱う風潮があり、流域住民による自家菜料用の雑魚とり漁法は、記録的価値に欠けるものであったかも知れない。そうした欠落漁法の理由が、当時の社会制度と無縁ではないように思われる。

その当時、多摩川で行われていた漁法の中で、記録に残らない主な漁法についてみると、

●筌漁法－雑魚筌・鰻筌・どじょう筌
●網漁法－刺網漁・掬い網漁
●釣漁法－鰻釣り・置き鉤・流し鉤
●刺突漁法－刺突漁全般
●雑漁法－手摑み漁・柴漬・石ぶち・ブッタイ・鰻掻き

などが主な漁法であり、刺突漁法に至っては、寡聞にして記録が見

当らない。これらの漁法は、いずれも雑魚とりの技法であり、多摩川流域に住む人たちが昔から行っていた。その当時、制約の多かった鮎漁法とは一線を画する庶民漁として、草の根的なたくましさで長きにわたって継承されたものである。

筌漁法の「雑魚筌」（雑魚筌漁）は、汎用性能にすぐれた雑魚筌を用いた漁法で、流域の人たちはこの筌を使って多様な漁を行っていた。雑魚筌は多摩川中・下流とその支流で広く使われたが、多摩川の漁法名はこの雑魚筌からも明らかなように、漁法の名称を使用漁具で呼ぶことが多い。本稿も多摩川流域本来の呼称によっている。

「鰻筌」（鰻筌漁）は、多摩川の本・支流で古くから行われ、流域住民の伝統的な単独漁である。また釣漁法では、「鰻穴釣り」、「置き鉤・流し鉤」など、鰻筌と同様の単独漁で、他者に漁場を見せない隠密漁法で、記録者の眼にふれなかったとしても不思議はない。また、雑漁法の「手摑み漁」や「石ぶち」、「柴漬」など古い歴史の漁法や、「ぶったい」、「鰻掻き」が記録から外れているのは、これらがいずれも、多摩川の鮎漁に注目する記録者たちの関心を呼ばなかったためであろうか。

雑魚を対象にした流域住民の単独漁は、多摩川流域の各地でひっそりと行われていた。その長い歴史にもかかわらず、常民の「ケ」の漁として記録されることもなく、技法の命脈は、次の明治、そして大正、昭和へと受け継がれて行くのである。

第四章　「瀬張」と「しら」
――鮎上納を支えた技法

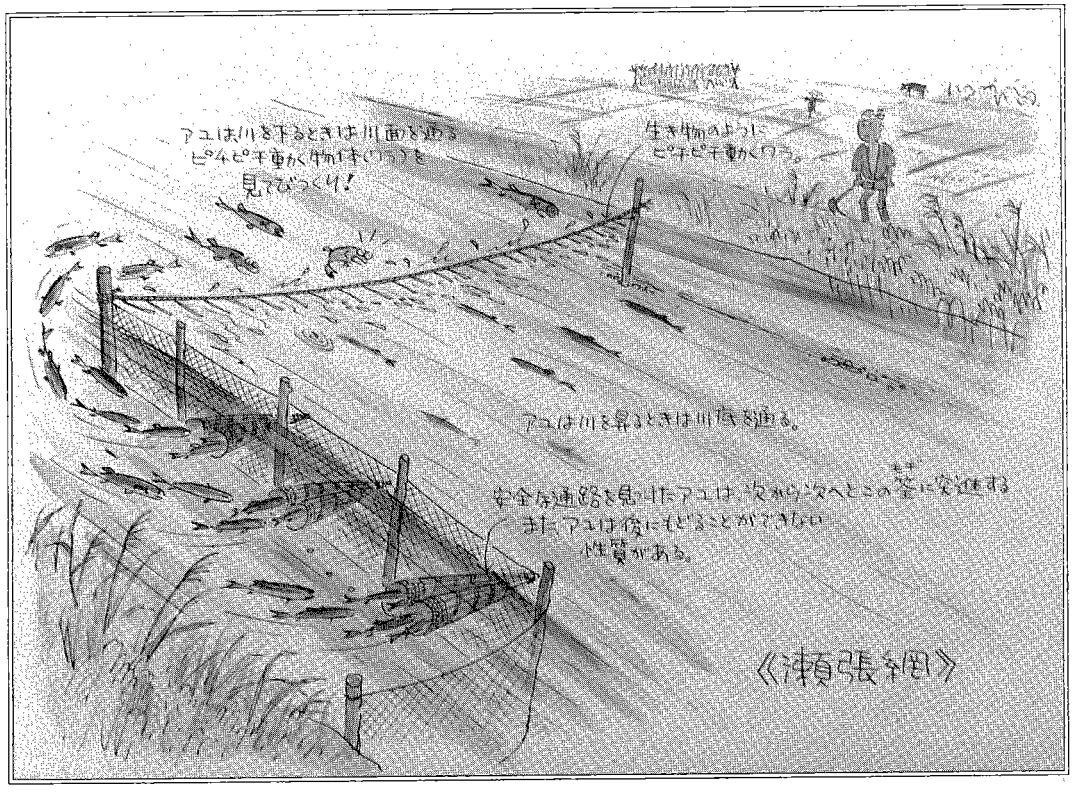
江戸時代、幕府に納める大量の御用鮎の供給に大きな役割を果した漁法に「瀬張」と「しら」がある。いずれも流れを横切る鮎おどしを仕掛け、川岸の捕採部に鮎を誘いこんでとらえる筌漁法の一種で、多摩川流域ではこの筌を「もじ」と呼んでいる。

瀬張としらは鮎の習性を見極めた巧妙な漁法で、捕採部に設置した「返し」のない双胴型のもじは、鮎とりの専用筌としてすぐれた機能の漁具であった。瀬張としらの技法上の相違は、流れに設けた鮎おどしにあり、その後の捕採手順や手法についての顕著な差はない。

瀬張は別に「もじ」、「もじ漁」、「注連縄漁」とも呼び、水深二尺未満の瀬を漁場とする。流れを横切って四尺ほどの間隔で木杭を打ち、多摩川流域では「おかざり」と呼ぶ五、六本の稲藁を四、五寸おきにつけた注連縄状の荒縄を木杭に渡し、流れにヒラヒラさせておく。

川を横切るおかざりが、水の抵抗でゆれ動いている。これが鮎のおどし具で、水中では稲藁と縄の表面に細かい気泡が宿り、白銀色のにぶい光を放つ。水中で光り、ゆれ動くものに対して、鮎は異常なほど恐れる。川を降る鮎が、流れの前方に白銀色にゆらめくものを見た途端に、おかざりを避けて川岸近くの捕採部に逃げこむ。

川漁師が「部屋」と呼ぶ捕採部は網で仕切られ、川底に幾つかのも

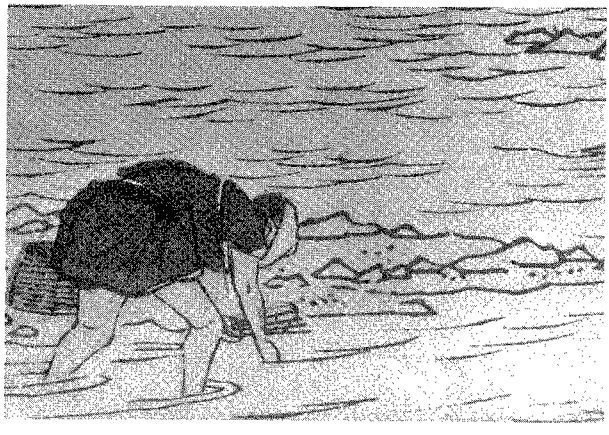


瀬張漁法の説明パネル／世田谷区立郷土資料館蔵

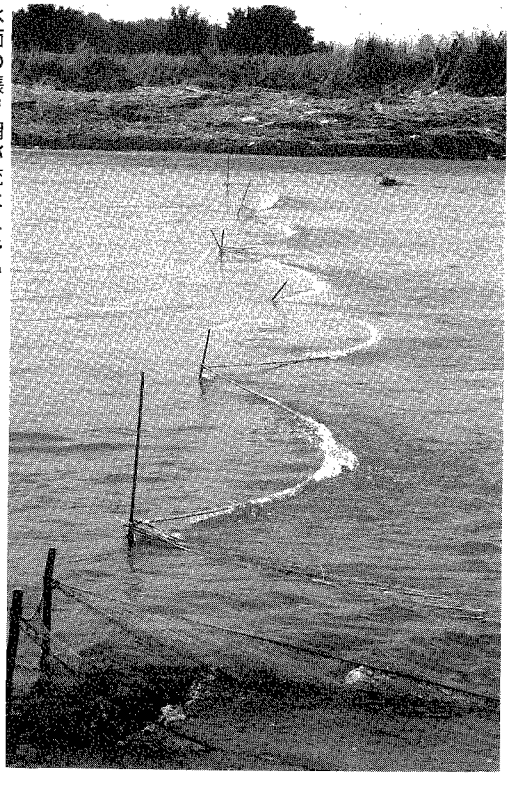
じが伏せてある。おかざりに驚き狼狽した鮎は、返しのない筌に自ら入りこむ。驚き鮎が次から次へともじに入り、中には体が入りきれず、頭だけ突っこんでいる鮎もいる。頃合いを見計らって漁人がもじに入った鮎をとり上げ、空にしたもじを再び仕掛けておく。

鮎へのおどしを徹底させるため、おかざりの他に木杭の水面近くに荒縄を張り、水の抵抗で縄が伸び縮みして川面を叩くようにする。水中で白銀色がゆらめき、張り縄が水面を叩く光景に、鮎は恐れをなして部屋に逃げこみもじに入る。鮎の習性を利用した瀬張漁法は、鮎のおどしから誘引、陥穽まで、漁撈者が手をわずらわすことがない巧妙な漁法である。

おかざりに代って鮎のおどしに「しらた」と呼ぶおどし網を用いることもある。この網は木綿製の比較的太い糸で編んだ白地の網で、水中でもよく目立つ。流れを降る鮎は、前方に立ちふさがるゆれ動く白いものに威怖して、おかざりと同様にもじの方に誘引される。



流れにもじを仕掛ける。（江戸末期）／二代廣重筆『玉川乃鮎と里』部分



水面の張り網が流水に勢いよくはじけ、鮎威しの効果を発揮する。昭和五七年八月・浅川日野上田地区地先水域での「伝統漁法実演」。

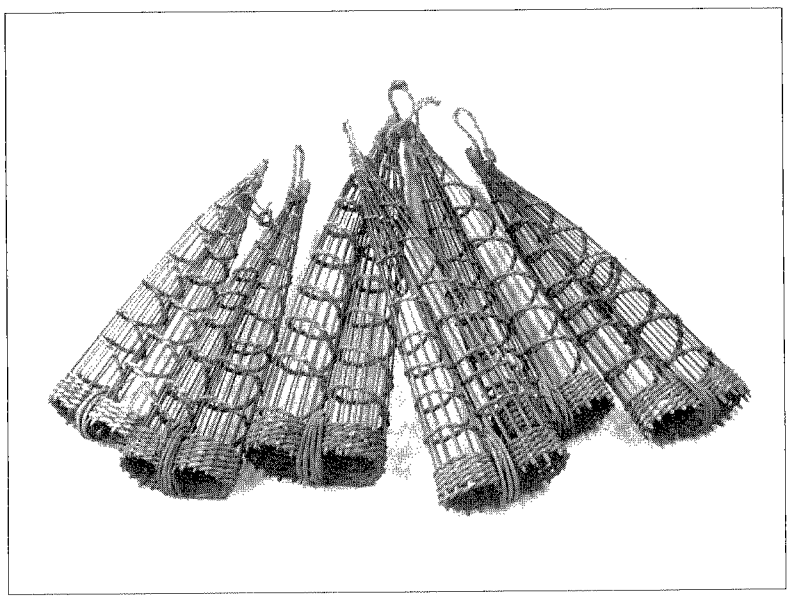
鮎おどしに川を横断して張る網はかなりの量で、木綿の撚糸や網を編む費用は漁撈者にとって大変な負担であった。江戸時代、おどし網を使っての瀬張が、おかざりのそれより少ないのは、そうした費用面ばかりではなく、おかざりが上り鮎に対して影響が少ないのに対し、網は鮎の遡上を遮断するため、降り鮎用に使われた。この点で稲藁製のおかざりは、川を上下する鮎に対して降り時に有効で、あまり費用もかからないおどし具として広く使われた。

多摩川のしらは、瀬張と同様に鮎をおどし、部屋に仕掛けたもじでとらえる技法であるが、鮎おどしの素材と構造に違いがある。江戸時

代では、しら漁を行うことを「シラを切る」といい、また漁場にしらの仕掛けを設けることを「シラを掛ける」と呼び、漁は瀬張より晩く、旧暦七月下旬以降の降り鮎の時期に行った。

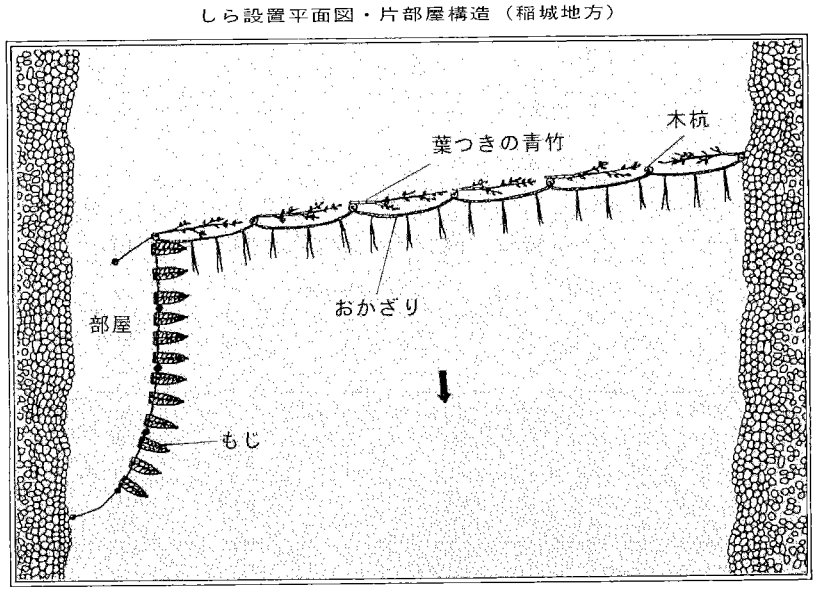
しら漁ではおかざりを用いず、川を横切って木杭を打ち並べ、そこに葉付きの青竹や笹などを組み込んで鮎おどしにする。流れの片側もしくは両側に、もじをたくさん仕掛けた部屋と呼ぶ、驚き鮎が逃げこむ安息所を設ける。竹や笹の葉の裏側には細かい毛が密生しており、水中では気泡を宿しておかざりと同じように白銀色に光り、流れにゆらめいている。鮎はこれを恐れ川岸に設けた部屋に逸走し、もじに入る。

多摩川ではしらと似た漁法に「堰漁」がある。堰漁ではしらのように川岸近くに部屋を設けず、流れを横断する木杭と竹、笹で仕切る。流れを降ろうとする鮎は、川を横切るおどしを恐れ、群泳しているところを「投網」や「ひっかき」、「さくり」などの漁法でとる。

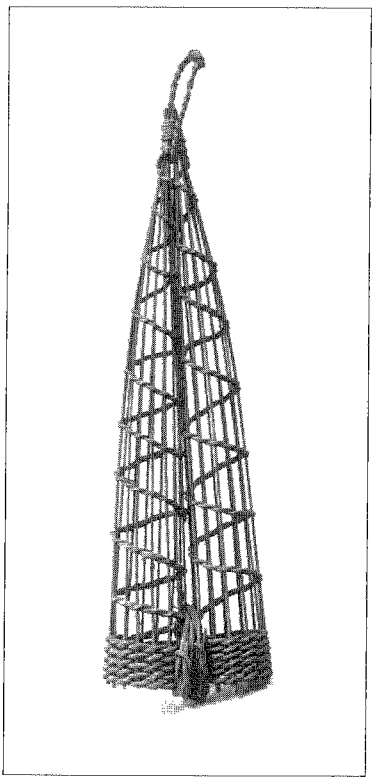


多摩川中流域のもじ／鈴木由太郎蔵

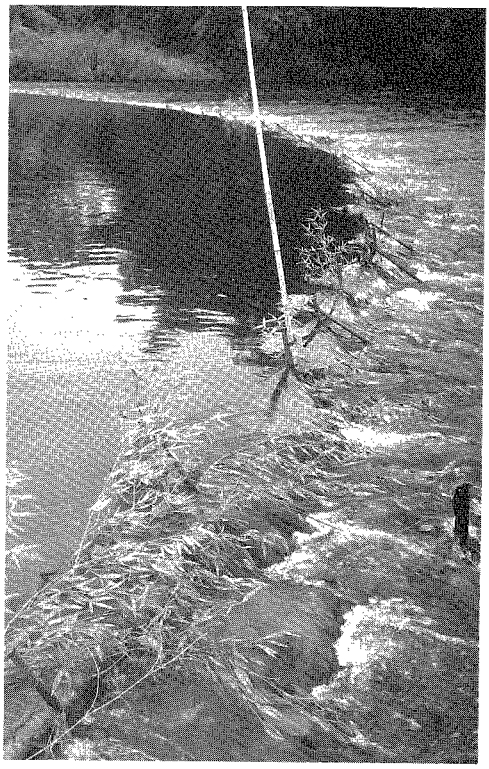
しら設置平面図・片部屋構造（稲城地方）



しらは瀬張に比べてより規模の大きな漁法で、費用もかかる。瀬張が数人で行うのに対して、五、六人以上の組で行った。川を横切る鮎おどしの竹材の伐り出しから運搬、設置に人手を要するが、降り鮎に対する遮断とおどしが徹底し、部屋のもじも瀬張より多く仕掛けた。



洗練された機能美のもじ／多摩川中流



那珂川水系荒川の「鮎の縄張り漁」。降り鮎をとるため、川を横切って打った木杭の間に葉つきの竹を組みこんで鮎をおどし、寄った所を投網でとる。／昭和五三年十月

木杭と竹、笹で流れを横断する構造のしらは、増水に弱く、秋出水には流されることも度々で、上納鮎の数揃えに支障をきたすこともあったが、平水時がつづけば御用鮎の大量捕採に有効な漁法として、多摩川の中流域では盛んに行われた。

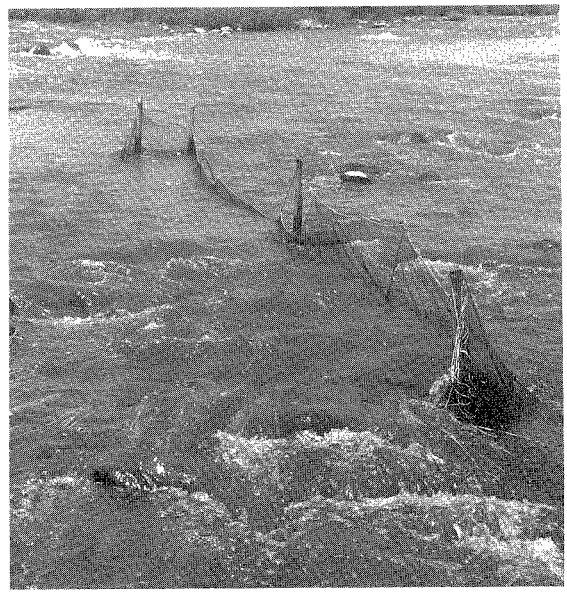
第五章　明治、大正、昭和期の伝統漁法

幕末から明治初期にかけて、徳川幕府の崩壊で御用鮎の制度が廃止され、また維新の動乱期にあたって、多摩川の漁撈は一時沈滞するが、やがて世情も安定し多摩川沿いに鉄道が開通すると、東京方面から大勢の人が来遊するようになった。明治二十年代以降になると、清遊客たちの前で「鵜飼」や「投網」、「跳網」などを行い、鮎料理を供する料亭が店を構え、多摩川は都会人士の曽遊の地として知られるようになった。

人びとで賑わう川辺をよそに、流れでは鮎漁をはじめ、さまざまな漁法が行われていた。人の往来が盛んになるにつれて他水系からの新しい技法も伝えられ、多摩川の伝統漁法は以前にも増して盛んになった。専業の川漁師をはじめ、他に職業があり、鮎の漁期に漁する半漁民や流域の遊漁者、それに都会からの釣り人たちが、さまざまな漁法で魚とりを行っていた。

明治以後、昭和三十年代までに多摩川で行われた伝統漁法は百十余種にも及び、各漁法の経緯については、先きの財団助成報告書『多摩川水系における川漁の技法と習俗』で述べた。個々の漁法に関する簡単な内訳を、本書巻末の資料編で「多摩川水系漁法一覧表」として参考のため再録した。

多摩川が、その当時いかに豊潤な流れで、生命力にあふれていたかを、これらの漁法から伺い知ることができる。今の流れからは到底想像もつかぬことだが、往年の多摩川は数多の魚族を育み、流域のくらしに大きな恵みをもたらしていた。今は昔、豊かな流れにくりひろげられた川漁の歳時記をたどってみることにする。



下流から見た瀬張の部屋／昭和五四年八月、多摩川の日野栄町地先水域での「伝統漁法実演」。

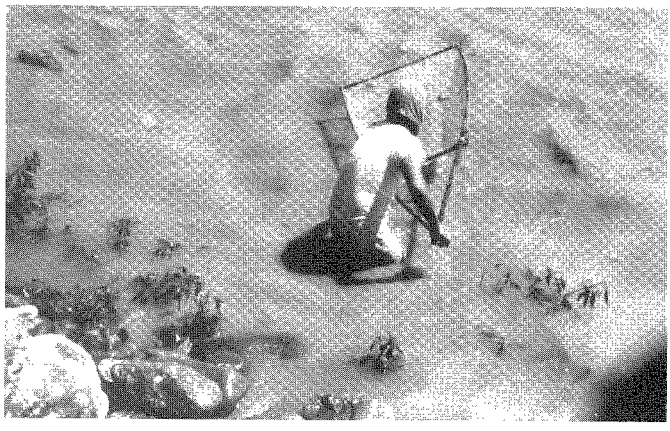
春に先がけて河口から白魚が遡上し、下流の汽水域では「四つ手網」や「掬い網」、「刺網」、「地曳き網」で白魚網漁が行われる。網元傘下の半漁民たちが一月から漁を行い、四月下旬に豊漁感謝の水神講を催して白魚漁が終る。この季節には魚たちが群れをなして遡上してくる。大形魚のマルタを川漁師が「マルタ投網」や大型籍で「マルタ突き」をし、遊漁者は大きな掛け鉤で「マルタ釣り」を楽しむ。その間に河口からは鮎の稚魚が真黒になって群れ、上流目指して押し寄

せる。

コブシの花が咲く頃、多摩川の中流では川瀬にウグイの人工産床をつくり、魚を誘い寄せて投網でとる「瀬付き」が盛んになる。川漁師が一坪ほどの付き場に真黒になって集まるハヤを一網打尽にする。魚が入りすぎて投網を持って行かれることも度々で、昔はそれほどとれた。また流域の農民が自家の菜料に味の良いシマドジョウをとるため、流れのゆるやかな砂礫の川底に「ドンドン」を仕掛けている。上流で山吹の花が咲く頃になると、山女魚釣りが始まり、新緑の渓谷に竿を振る釣り人の姿が見られるようになる。

多摩川流域にひらけた水田地帯が田植の準備に忙しくなる頃、苗代

舟から投網を打つ／大正末期・写真集『むかしの府中』より



待網漁／昭和三十年代・立川市教育委員会提供

大正時代の寄せ網漁／『むかしの府中』より

のあちこちで松明やカーバイドランプをかざしながら「ドジョウ刺し」が行われる。夜間に灯りを点して苗代に眠るドジョウを、櫛状の籍で突いて回る。簡単な漁法なので、老人や子供たちも楽しめる漁であった。

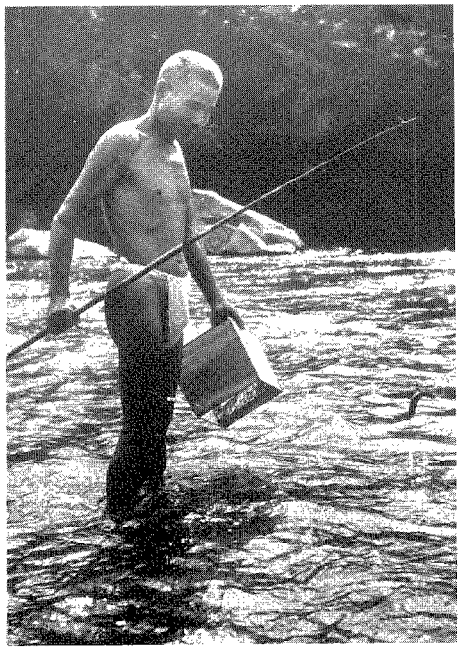
春も過ぎ、やがて多摩川は鮎の解禁を迎える。

前夜から川辺に待機した釣り人たちが、解禁とともに「ドブ釣り」の竿を一斉に林立させる。解禁当日の模様が翌日の新聞に報じられ、多摩川の漁撈歳時記の中で最も賑わしい話題として、釣り人たちの関心を集める。やがて「友釣り」の季節となり、「ころがし」も瀬で行われる。こうした遊漁の鮎釣り人たちをよそに、職漁者や半漁民たちが「瀬張」や「しら」、それに「鵜飼」、「ペラ網」、「ひっかき」、「鮎投網」、「鵜縄」、「刺網」、「さくり」など、多彩な漁法で鮎とりをした。

夏の多摩川は、流域の子供たちにとっても清流天国で、用水路や小川での「ビン簽」や田圃の水口に「ドジョウ簽」を仕掛けて魚とりを楽しんでいた。本流では水遊びのかたわら、箱眼鏡で水中をのぞき、籍で「カジカ突き」や潜りで「鉄砲銛」、「手摑み漁」などを行い、瀬では「按摩釣り」や「瀬干し」など、さまざまな遊び漁に時のたつのも忘れて、川遊びに夢中になっていた。

真夏の烈しい日射しの下では、農家の人たちによる「寄せ網」や「跳網」が行われる。流れに大勢の人がくり出すこの漁は、村落共同体の連帯をそのまま多摩川に持ちこんだ大規模な川狩りで、集落あげてのお祭りさわぎとなる。清遊客をのせた屋形船の傍では、料亭お抱えの「鵜飼」

武蔵府中多摩川原鮎釣りの景／大正時代の絵はがきより



ひっかき漁のいでたち／写真・三田鶴吉氏提供

や「鮎投網」の鮎とりショーがあり、ここだけは賑々しい雰囲気につつまれている。

夕方近くになると、瀬に「ハヤ釣り」をする人の静かな姿があり、流れに筌を伏せる「鰻筌」や「雑魚筌」、また「置鉤」、「流し鉤」を仕掛ける人影が、薄闇の中に消えて行く。

多摩川の豊かな恵みは全水域に及び、とりわけ夏の期間は、鮎をはじめさまざまな魚がとれる、最も活力にあふれた季節であった。

秋になると、産卵のために流れを降る魚も多く、鮎や鰻、モクズガニが「簗」でとれる。秋出水には増水した川岸で叉手網を使って魚を掬いとる「待網」や「撫で網」があり、平水の瀬では「瀬張」や「しら」で下り鮎をとった。上流山間部の渓流では流れを下る山女魚を「山女魚筌」を仕掛けてとっていた。

漁期外れと思える冬でも、多摩川では魚とりが行われていた。「柴漬け」や「エビ掬い」、「石叩き」、「ドジョウ掘り」は寒中ならではの漁で、この時期の「ハヤ釣り」は、微妙な釣趣を楽しむ人たちに好まれた。また下流では、職漁師による「シジミ漁」の最盛期に入り、河口からは白魚が遡上しはじめる。

春夏秋冬、多摩川では休む間もなく漁が行われ、職漁者から半漁民、それに流域の遊漁者や都会からの釣り人たちを十分に受け入れることのできた、奥の深い流れであった。だが、多摩川の漁撈文化は、河川の荒廃とともに昭和三十年代で終焉を迎え、長い歴史を誇る伝統漁法も、川漁師や半漁民とともにその姿を消したのである。

多摩川の四季別伝統漁法（明治～昭和三十年代）

春

○筌漁法―雑魚筌・鯰筌・ドンドン・鮒筌・鰍筌・鯉筌・ビン筌

○網漁法―雑魚投網・マルタ投網・鯉投網・瀬付き・鵜縄・追羽根棹網・ペラ網・ゴリ網・板もみ・エビ掬い・掬い網・置網・刺網・ハヤ刺網・カマツカ網・鯉刺網・白魚刺網・投げ網・鱒跳網・白魚掬い網・四つ手網・白魚四つ手網

○釣漁法―山女魚釣り・流し鉤・置鉤・瀬釣り・マルタ釣り・ハヤ釣り・ふっとばし・鯉釣り・小物釣り・ウシガエル釣り

○刺突漁法―鰍突き・雑魚突き・マルタ突き・ドジョウ刺し

○雑漁法―瀬干し・かい掘り・石倉・ぶったい・鰻掻き・毒漁

夏

○筌漁法―瀬張・しら・追込みもじ漁・雑魚筌・鯰筌・鰻筌・ドジョウ筌・鮒筌・鰍筌・天王筌・桶筌・鯉筌・ビン筌

○網漁法―鮎投網・山女魚投網・雑魚投網・鯉投網・寄せ網・鵜縄・追羽根棹網・ペラ網・ゴリ網・板もみ・エビ掬い・掬い網・跳網・置網・刺網・鮎刺網・カマツカ網・鯉刺網・投げ網・鱒跳網・受け網・四つ手網

○釣漁法―岩魚釣り・山女魚釣り（餌釣り・テンカラ）・流し鉤・置鉤・打ち釣り・瀬釣り・ドブ釣り・友釣り・さくり・ころがし・ひっかき・按摩釣り・ハヤ釣り・ふっとばし・鯉釣り・

カジカ突き／昭和三十年・福生市提供

かい掘り。水田地帯の水路を堰止め、水を汲み出して魚をとる／昭和二七年・八王子小宮地区『写真でつづる八王子の歴史』より

秋

○筌漁法—瀬張・しら・雑魚筌・天王筌・桶筌・山女魚筌・鰻筌・ドジョウ筌・鮒筌・鰍筌・鯉筌・ビン筌

○網漁法—鮎投網・鯉投網・雑魚投網・鵜縄・追羽根棹網・ペラ網・ゴリ網・板もみ・エビ掬い・掬い網・張網・置網・刺網・鮎刺網・カマツカ網・鯉刺網・投げ網・受け網・待ち網・撫で網・四つ手網

○釣漁法—流し鉤・置鉤・さくり・ころがし・ひっかき・ハヤ釣り・鯉釣り・小物釣り・穴釣り

○刺突漁法—鰍突き・雑魚突き

○雑漁法—鵜飼・築・堰漁・瀬干し・かい掘り・石倉・ぶったい・鰻掻き・毒漁

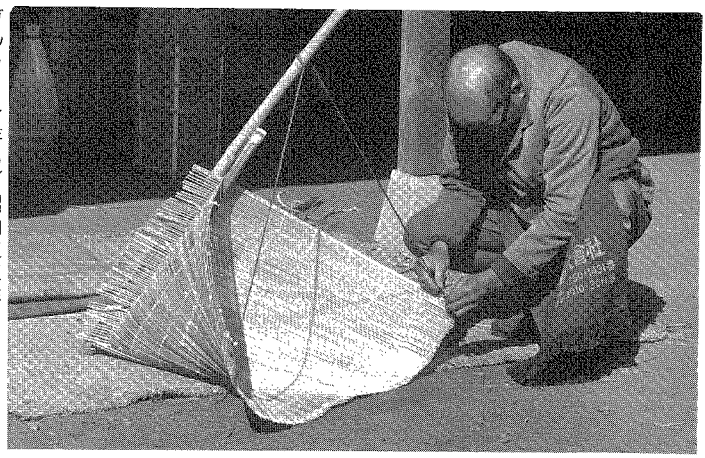
ぶっこみ釣り・ポカン釣り・とびつき・小物釣り・穴釣り・ひっこくり・数珠子釣り・手長蝦釣り・ウシガエル釣り

○刺突漁法—山女魚突き・鰍突き・雑魚突き・火振り・鉄砲銛

○雑漁法—鵜飼・手摑み漁・瀬干し・かい掘り・石倉・ぶったい・鰻掻き・毒漁

冬

○網漁法—雑魚投網・鯉投網・ペラ網・板もみ・エビ掬い・張網・置



ブッタイを作る／昭和五五年・製作者　小林勝太郎

網・刺網・カマツカ網・鯉刺網・投げ網・白魚刺網・白魚掬い網・白魚四つ手網・白魚地曳網

○釣漁法―ハヤ釣り・鯉釣り

○刺突漁法―鰍突き・雑魚突き・鯉突き

○雑漁法―柴漬・笹びて・石倉・石ぶち・石叩き・ぶったい・ドジョウ掘り・シジミ漁・毒漁

第六章　伝来漁法の盛衰

――「投げ網」と「ペラ網漁」――

明治以降、水系相互の交流が盛んになると、多摩川流域から他の水系にもたらされた技法もあり、逆に他水系から伝来した漁法が多摩川流域に定着し発展したものや、或いは伝来したが定着することなく途絶えた漁法もある。他水系からの伝来漁法の中で、伝播、定着という点できわめて対照的な経緯をたどった「投げ網」と「ペラ網漁」について考察してみることにする。

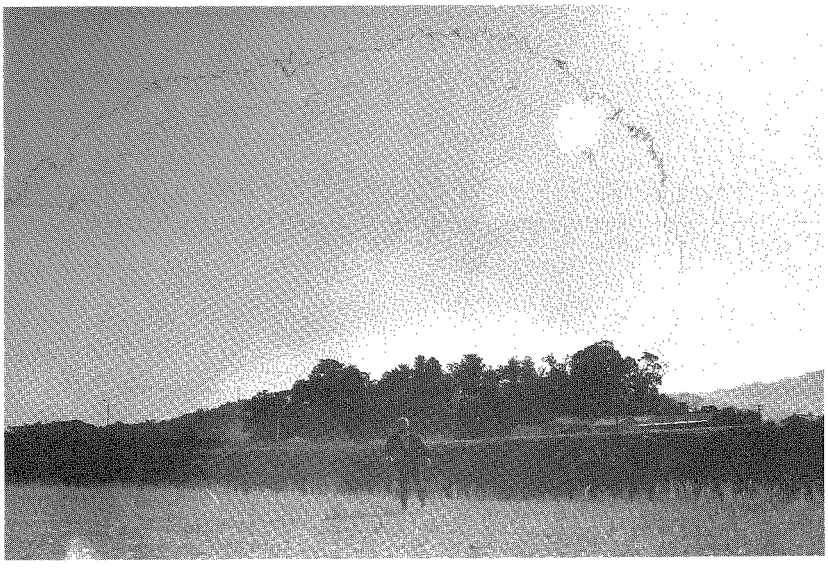
江戸時代の多摩川で、投げ網が行われたという確証はない。明治になり、四国方面からもたらされた技法といわれるが、この漁法は西日本では珍しいものではなく、現在でも各地で行われている。

投げ網は「投網」とは使用漁具の形状も魚の捕採方法も異なり、主に鮎をとる手投げ刺網漁法で、琵琶湖では鮎の他にオイカワ、ハスをとり、その他西日本の河川ではウグイもとる。江戸時代、美濃、飛驒両国（岐阜県）を流れる木曽川、長良川、揖斐川のいわゆる木曽三川の中流水域で行われ、「手投網」と呼んだと『美濃・飛驒両国漁具及使用帖』にある。また、伊賀国（三重県西部）内の河川では、江戸期から明治にかけて投げ網の記録があり、当地では他に「打ち網」、「小鷹網」と称していた。

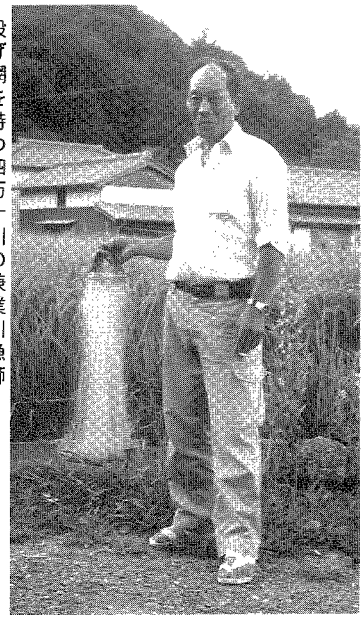
現在、西日本各地の河川において投げ網漁法が行われており、高知県下の仁淀川や鏡川、四万十川、愛媛県の小田川など、四国は投げ網漁の盛んな地域である。また九州の筑後川や大淀川の中流、和歌山県の紀の川筋や奈良県吉野川など、枚挙にいとまがない。それに引きかえ、東日本で投げ網漁の盛んな河川は見られない。

江戸時代の西日本水域に拡散、定着した投げ網の技法が、明治に到り東日本に伝播しはじめたものの、投網よりも熟練を要するこの技法が十分に定着する時間を経ることなく、飛び火的な根跡を多摩川流域に残して、消えたものであろうと思われる。

投げ網は、高さ四尺、巾三間



投げ網が空中に開く／高知県錦川・昭和四二年



投げ網を持つ四万十川の兼業川漁師（普段は農業）／窪川町・昭和六〇年

前後で横に長く、網目が三分目の細かい絹糸製の投げ刺網で、網の下端に鉛錘、上端に桐製の浮子がとりつけてある。漁人は川岸から流心に向けて網を投げ、網は中空で半円形の帯となって開き、そのまま流れに落ち、魚を取り囲む。すかさず手にした棒で水面を叩いて魚をおどし、或いは予め手にした川石を投げて魚を網の方に追う。驚いた魚が流心に逃げようとして刺網にかかる。

投げ網は、網の投げ技術と迅速な魚追いが漁果を左右する熟練を要する漁法で、初心者では魚がとれない。しかし有能な漁撈者にとって有効な一人漁法であり、軽快に漁場の移動が容易である。漁果も漁撈者の技能と漁場次第で、大量の魚がとれる。

昭和十年代まで、多摩川では一部の川漁師が投げ網漁を行ったが、昔から鮎とりの技法が発達した多摩川流域においては、定着することなく途絶えた。

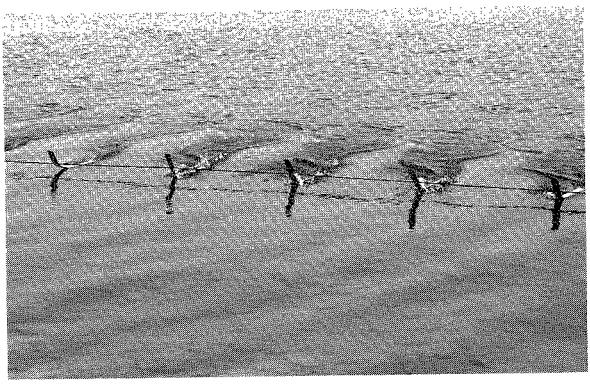
伝播、定着の実ならず、投げ網がわずかな根跡を残したまま消滅したのに対して、大正末期に西日本から移入されたと伝えられる「ペラ網漁」は、鮎やウグイ、オイカワなど、素早い行動の魚族に有効な漁法として多摩川に定着した。昭和三十年代における多摩川の伝統漁法の終焉とともにペラ網漁も姿を消すことになるが、それまでの間、すぐれた技法として多摩川の漁撈文化の晩期を飾

ペラ網漁の実演／浅川・昭和五五年

ることになった。

ペラ網漁法は、「ペラ」と称する桧や杉の薄板片の一方を曲げたものを、棕梠縄に四、五十センチ間隙に取りつけた魚おどしの追い具を用いて、流れの魚を追い寄せてとる技法で、古くから行われた「鵜縄」と原理的には同じである。だが、鵜縄では魚追い寄せ縄に鵜や烏の羽根、或いは黒布を裂いたものなどを付けるが、ペラ網漁では木の薄板片を用いる。

魚が鵜羽根などのような水面にゆらめく黒いものを、本能的に畏怖する習性を利用したのが「鵜縄」や「追羽根棹漁」である。ペラ網漁では、魚おどしに木の薄板片をとりつけた追い縄を水面で引く。それによる水切りやしぶきの音と、一列のペラが襲う物影におびえ、恐怖して逃げる習性を巧みに利用した用具で、鮎やウグイ、オイカワなど、水中で動きの早い魚にとっては大変有効な追い寄せ漁具であり、多摩川のペラ網漁の魚捕採には、巻どり刺網を使う。



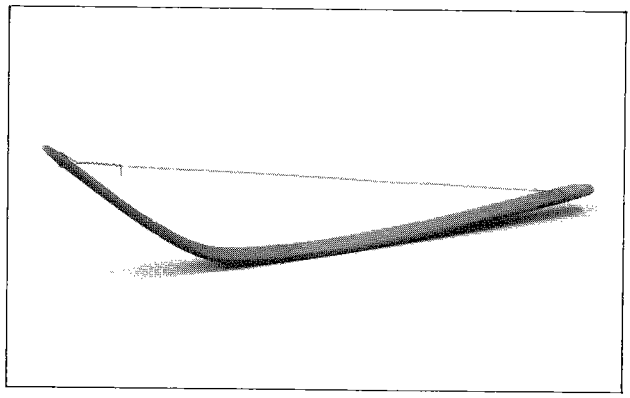
流れを進むペラの襲来に水中の魚は恐怖する

ペラ漁でとれた魚／昭和五二年・多摩川日野地先・写真・三田鶴吉氏提供

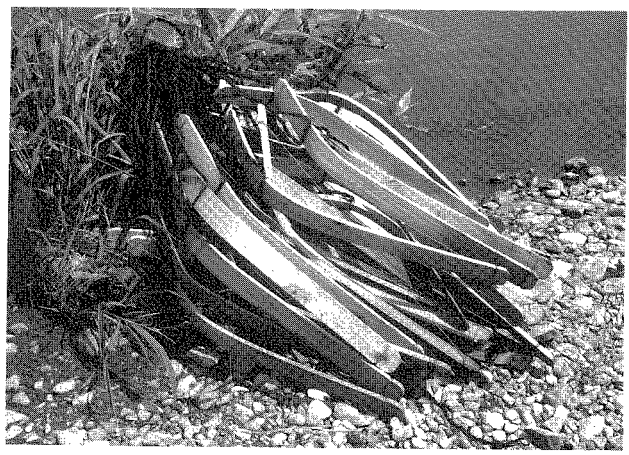
ペラ網漁は川漁師の漁法で、二人で行う。川を横切ってペラ縄を張り、両岸から上流もしくは下流へ魚を追う。突然の水音とペラの揺れ動く影に恐怖した魚が、網持ちの方に追い寄せられたところを刺網で囲みとる。ペラ網漁はそれまでの多摩川の伝統漁法には見られない電撃的な技法で、漁獲も多いが漁撈者の消耗も烈しい。俗に「ペラの一食一升飯」といわれるほどで、こうした苛烈な漁法を行う川漁師は多摩川でも限られていた。

漁獲効率にすぐれたペラ網漁法が多摩川にもたらされたのは、大正末期頃といわれるが、何処の水系からかは不明で、ただ漠然と西日本方面と云われている。

多摩川流域では、ペラ網漁法を別に「ペラ」、「巻き網」、「朝鮮網」或いは単に「朝鮮」とも呼び、この漁法の淵源が韓国であるとの説もあるが確証に欠ける。ただ広島県三次地方の江の川では多摩川のペラ網漁と同様の技法が行われ、漁法名を「鵜縄」といい、魚追い寄せの桧の薄板片を「へら」もしくは「へぎ」と呼んでいる。多摩川での呼称が江



魚追い寄せのペラ／鈴木由太郎蔵



ペラ一式／昭和五三年・多摩川日野地先

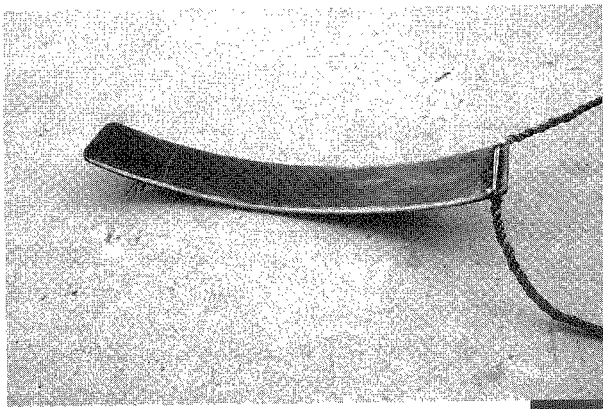
の川の「へら」の転訛したものか、或いは薄板片の形状から「ペラ」と云うようになったかは不明である。

呼び名は異るが、多摩川近隣河川の荒川中流ではペラ網漁法と同様の技法があり、魚の追い寄せ具を「ガラ」、その漁法を「ガラ引き」と呼んでいる。ガラで追い寄せた魚を投網でとるが、それまでの手順は多摩川の場合と変らず、昭和三十年代まで行われていた。魚の最終捕採具が異なるにしても、ガラの荒川とペラの多摩川は双方とも東京湾に係りのある水系で、技法の伝播を考える際に、この内湾漁撈の影響を無視することはできない。

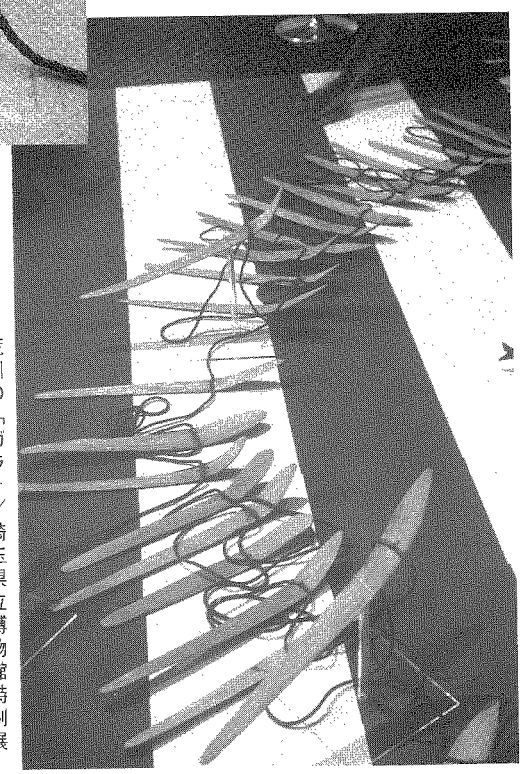
家康の江戸開府以来、江戸前の内湾漁業はそれまでとは異なり、他水域から新しい技法が移入されて飛躍的な発展をとげることになる。そうした内湾漁業の中で、鵜縄漁の一種である「ウナ漁」がある。舟による内湾沖漁の「オオウナ」と湾岸近くの浅場で徒による「カチウナ」があり、この漁法では魚の追い寄せに「ガワ」と呼ぶ木の薄板片を用いる。

岡山県下の高梁川や児島湾に注ぐ河川で、東京湾のそれと同一名称の「ガワ」、「ガワ引き」という漁法が行われ、また、荒川のガラに類似したその呼称は、荒川のガラ引き漁が、東京湾からもたらされた内湾漁法に由来することを伺わせる。荒川のガラは内湾のガラに比してより巾が狭く、河川での操作性によりすぐれた形状に変化したものと思われ、内湾から流水域への適応と理解される。一方、多摩川のペラは荒川のガラより細身で、水の抵抗がより少ない構造になっている。技法が多摩川流域にもたらされた後、改良が加えられ今日に残る形状となったものと思われる。

多摩川にもたらされたペラ網漁法が、西日本からとの説もあるが確証に乏しく、荒川のガラや東京湾内のガワの存在を考慮する必要がある。西日本の何処かの河川での魚追い寄せ技法が、大正末期に多摩川の流域に飛び火し、定着したという説が論拠を欠く限りにおいて、ペラ網漁法の淵源を多摩川河口付近の湾岸漁法に求めることの方が、より自然ではなかろうかと思われる。



「ガワ」の反り板片／安房博物館蔵



荒川の「ガラ」／埼玉県立博物館特別展「荒川の漁具」・昭和五九年

東京湾の漁撈に使われた「ガワ」／千葉県立安房博物館蔵・昭和五九年

河川漁撈の中で古い歴史のある鵜飼が、魚族の捕採だけでなく、鵜の行動が魚追い寄せにすぐれた効果があることを古の人たちは知っていた。鵜の羽根をつけた縄を水面で引いて集魚効率を高める技法を編み出し、それが他の水系に伝えられた。「鵜縄漁」や「追羽根棹網漁」、「鵜縄もじとり」など、これらの漁法は、はるか昔にそれぞれの河川の伝統漁として定着している。

鵜飼より派生した魚追い寄せ具は、鵜羽根から烏の羽根、さらに黒い裂き布などが使われるようになり、そうした技法が河川から湖沼や内湾に伝えられた。そこでは魚族に対するおどし具がさまざまなものに分化し、さらなる進化をとげた。そうした中で、東京湾におけるガワのような止水域での水切りにすぐれ、浮力のある木の薄板片が使われた。この技法が逆に河川にもたらされ、流れにより適した形状へと進化し、多摩川のペラや荒川のガラ、江の川のヘラ、岡山県下諸河川に見られるガワなどとして、それぞれの水系に定着し、魚族の捕採に威力を発揮した。

この様な事例はペラ網漁法にとどまらず、他の網漁法や釣漁法の分野でも見られ、河川相互間の交流のみならず、内湾漁業からの影響を消化しながら、多摩川独自の漁撈文化を開花させて行った。

第七章　多摩川の鵜飼

一、歌に詠まれた多摩川の鵜飼

多摩川で漁撈の記録が見えるのは、十一世紀の中頃に詠まれた鵜飼に関する和歌、

かがり火の　影にぞしるき　玉川の
　鮎ふす瀬には　ひかりそひつつ　　武蔵

と『夫木和歌抄』の和歌一首が、わずかな手がかりを与えてくれるにすぎない。この歌集は延慶三年（一三一〇）、撰者藤原長清により万葉集以後の歌集、私撰集、私家集、歌合、物語歌などから、それまでの勅撰歌集にとられなかったものが集められている。この詠歌には「禖子内親王家歌合鵜川」の詞書があり、この歌合は平安中期の治暦三年（一〇六七）と翌年の二度行われている。

歌人の武蔵というのは女房の身分にある女性で、女房とは当時、宮中に仕えた高位の女官の呼称であり、上臈、中臈、下臈の総称につかわれ、時には院や貴族の家に仕えた婦人も含まれる。通常、中臈、下臈の場合は本名を呼ばずに、呼名といって国名で呼んだ。恐らく歌人の武蔵も、武蔵の国守として赴任した人物の血縁につながる女性であり、武蔵国で生活した折、多摩川の夜川鵜飼を見物したのであろう。やがて国守の交替とともに京に戻り、天皇の皇女である内親王家に出仕した。その時の歌合に、武蔵国多摩川での夜川鵜飼の感動を詠んだのである。

十一世紀、武蔵国の国府といえば現在の府中市にあたり、少女時代に国府地先の多摩川で見た、水面に篝火をかざして鮎を追い、鵜にとらえさせる幽玄な漁の情景は、恰好の歌題であったに相違ない。

禖子内親王家歌合から十数年後の承暦四年（一〇八〇）に、「堀川院中宮歌合鵜河」があり、

玉川の　瀬々かいのほる　かかり火に
　さはくたづなの　かすををりぬる　　藤原仲実

の歌が『夫木和歌抄』に収められている。

先の武蔵の歌については、府中地先での多摩川鵜飼を詠んだものであることに異存はないが、仲実の方は歌中の玉川が必ずしも武蔵国の多摩川であるかどうか、いささか疑念の余地がある。

わが国で玉川と名のつく河川は、邦楽の「六玉川」にもあるように数が多い。因みに六玉川とは井手の玉川（京都府）、高野の玉川（和歌山県）、野路の玉川（滋賀県）、三島の玉川（大阪府）、野田の玉川（宮城県）、それに武蔵国の調布玉川（多摩川）で、鵜飼を題材にしながらも、玉川に関しては先の武蔵のように多摩川で詠んだとする確証がえられない。

当時のわが国で、徒による鵜飼は各地で行われており、限られたこの歌の文言から、玉川が京都地方でも、近江や陸奥の国であっても不思議はない。先の禖子内親王家歌合では歌人の武蔵という名が決め手となり、武蔵国の多摩川鵜飼を詠んだものであることに異存はないが、

藤原仲実の場合、玉川の場所が宙に浮いている。心情としては多摩川としたい所だが、見逃がさざるをえない。ともあれ、十一世紀の中頃に、多摩川で鵜飼が行われていた事実を武蔵の歌が証している。

その当時、鵜飼はさして珍しいものではなかった。鵜を使っての漁は全国的であり、それよりはるか昔の『記・紀』の時代にも紀伊半島の吉野川や盧城（いおき）川での鵜飼の記述が見られ、史実としては七世紀に記された中国の『隋書・東夷伝』の中で、倭の国では「小環を以て鸕鷀の項に挂け、水に入りて魚を捕えしめ、日に百余頭を得…」とあり、鸕鷀とは鵜の中国名で、小さな環を鵜の首につけ一日に百匹以上の鮎をとっていた事が記されており、当時の九州地方の鵜飼を述べたものと思われ、わが国の鵜飼の歴史は大変に古いものである。

十世紀には宮中で鵜飼の専門職があり、大膳職に属していて、桂川や高野川、宇治川などで鵜飼を行っていた。時には貴人たちの前で鵜飼漁を演じることもあり、『源氏物語・三十三帖藤裏葉』にも昼川鵜飼の模様が述べられている。同時代の女流日記『蜻蛉日記』（九七一）には宇治川での夜川鵜飼のことが記され、

「…ようやく木暗くなりぬれば、鵜船どもさしともしつつ、ひとかはさしいきたり、おかしくみゆることかぎりなし。頭のいたさのまぎれぬれば、端の簾まきあげて、夜中過ぐるまでながむる。…」

と宮廷鵜飼の幽邃な情景をしたためている。

夜の帳がおりた川面で篝火をたき、鵜を操る華麗な鵜飼絵巻は、後世、芭蕉をして「おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉」と嘆じさせたほどで、ひとときの華やぎとその後の深い暗黒への移行は、蛍狩なども一脈通じる光と闇が奏でる妖しい世界であり、われわれ日本人の美意識に触れる何かがある。

鵜匠が風折烏帽子に黒の鵜飼衣装で腰蓑をつけ、七、八羽の鵜を巧みにさばいて、船縁に鮎おどしの篝火がはじける。川面にくりひろげられる漁撈絵巻に人は息をひそめ、美の境地に酔う。現在でも長良川で行われる鵜飼は伝統的な宮廷鵜飼の流れをくむ見せ鵜飼であり、「ハレ」の漁撈である。

平安時代以降、宮廷鵜飼の伝統は、戦国時代にあっても織田信長などの有力な庇護者をえて、江戸時代には尾州徳川家の長良川鵜飼、佐竹氏の角館鵜飼、浅野氏の三次鵜飼など、大名家の下で伝統漁法が継承されていく。明治になり、長良川の鵜飼は宮内省（現宮内庁）の式部職として現在に及んでいる。

二、「ケ」の鵜飼

歌人武蔵が府中の国府に滞在した折に見た夜川鵜飼は、宮廷鵜飼のように船で行うものではなく、徒姿の漁人が、篝火をたきながら流れに鵜を放って漁する技法である。

川面に篝火を振りかざして鮎を追い寄せる者と、鵜を巧みにさばきながら鮎をとる漁人が川瀬を下る。突然ゆらめく篝火の出現に、鮎は恐れをなして逃げまどう。鮎は夜間の光を極度に恐れる魚で、こうした鮎の習性を知る漁人は、夜間の鮎追いに有効な篝火を使う。あらかじめ張った刺網に鮎を追いこむ鮎刺網漁や、今でも四万十川で行われ

る火振り漁などに篝火が使われている。

鮎ふす瀬に篝の火がゆらめいて、漁人と鵜の姿が闇夜の川面に浮いて出る。この幻想的な夜川鵜飼の光景は、武蔵の心に深く焼きついたことであろう。船によらず徒で数羽の鵜を使って魚をとる技法は「ケ」の鵜飼であり、当時は各地の河川で行われていた。宮廷鵜飼に見られる「ハレ」の鵜飼は、京都を中心に一部の河川で行われていた。『隋書、東夷伝』の鵜飼も、当時のわが国で行われていた「ケ」の鵜飼の記述である。

「ケ」の鵜飼は、漁人が数羽の鵜を飼育しながら折にふれて漁を営むもので、宮廷鵜飼のように制度化されたものではなく、漁人の自由意志による遊び漁的な漁撈であった。鵜をいつくしみながら養育し、川での漁の期待と興奮は、他の漁法には見られない趣があるのであろう。そのために、通年では採算のとれる筈がない鵜飼に血道をあげる漁人たちが、各地の河川にいたのである。四国、仁淀川の鵜飼人の言葉だが、「身上を早く潰したくば博打をうて、ボチボチ潰すなら鵜を飼え」という通り、鵜の飼育と管理には可成りの手間と費用がかかるもので、漁期だけの収益で鵜を通年維持することはできない。これは昔も同様で、徒鵜飼を行っていた人たちは、普段は農業などの生業を営んでいて、遊び漁として鵜飼を行っていた。

多摩川の鵜飼については、先の武蔵の歌以降、江戸時代以前の間の記録が見られないが、十一世紀の多摩川鵜飼から一四〇年ほど後に、隣国の相模川で源頼家（一一八二～一二〇四）が、正治二年（一二〇〇）七月一日、畠山重忠、葛西清重らの鎌倉武将とともに鵜飼見物を楽しんだと『吾妻鑑』にある。平安時代以来の史料としての記録に欠けるが、その間に多摩川での「ケ」の鵜飼は連綿としてつづいていたものと思われる。

三、江戸時代の多摩川鵜飼

徳川家康の江戸開府にともない、多摩川が鮎上納の御採場になると、鵜飼に関する記録が見られるようになる。平安以来の徒鵜飼は、秋川や羽村から調布あたりの水域で行われていたが、この漁法は水域の鮎をとりつくしてしまうほど乱獲的な漁法のため、在地の漁人としばしば争いをおこしている。鮎上納の時期には「しら」などの漁場を荒らすため、鵜飼を一時禁止させたほどで、鮎の漁場をめぐる訴訟が増えている。だが見ようによっては、多摩川鵜飼の健在ぶりを示した証ともいえ、記録にも当時の鵜飼の盛んな様子が見える。

宝暦三年（一七五三）九月五日、多摩川瀬田村（現在の二子多摩川付近）で、九代将軍徳川家重御成りの大規模な鵜飼が行われた。この時は五月頃より動員できる鵜使いや鵜の数を調査し、期日前に上流一帯の漁を禁止し、「しら杭」なども撤去させている。こうした大規模な川狩りは、宝暦三年以降、文化四年（一八〇七・家斎）、天保二年（一八三一・家斎）、天保三年（一八三二・家慶）、天保十二年（一八四一・家慶）の御成り鵜飼があり、文化四年の例では、鵜二十羽、鵜先網十反、下留網十反、もじ四百、鵜使い三十人、この他に網引漁師及び人足多数とあり、かなり大規模な川狩りであったことがうかが

える。

こうした漁法は、数羽の鵜を使って鮎とりをする従来の「ケ」の鵜飼と異なり、大量の人と鵜を川に投入してスペクタクル・シーンを演出する、文字通りの川狩であった。川の上下に、流れを横切って下留網を張り、網の根元に沢山のもじを仕掛けておく。鵜先網で鮎を追い集めた所に鵜を放ち、逃げまどう鮎がもじに入る。かくして大量の鮎がとれ、将軍以下川狩に満足して鮎料理を食し、御帰館と相なる。

本来は「ケ」であるはずの多摩川の鵜飼は徒使いであっても、この時ばかりは特別に仕立てられた「ハレ」の見せ鵜飼となり、川面では賑やいだ川狩絵巻がくりひろげられた。だが川狩が終れば多摩川は元の静かな流れに戻り、水域の各地では昔からの「ケ」の鵜飼がひっそりと行われていた。当時の鵜飼を伝えた記録がある。

「…左者渺々武蔵野而秣刈敷易貯右者玉川惣門之渕鵜飼河狩之輩降網垂釣取上鮎鮭鱒等売買之仕事候。…」（宮崎主膳『柴崎往来』寛政元年・一七八九）とあり、立川地先の多摩川で、鵜飼をはじめ網や釣りで魚とりをしていたことが記されている。

『武蔵名勝図会』（文政六年・一八二二）では、「…この辺の秋留川の年魚は玉川より登り来たり、拝島より長大なり。秋に至りて大なるは尺余なり。鸕鷀を以て之を漁す。その業は拝島辺にて鵜を使うとは異り、夜陰に火を焚きて鵜を使う。ここより奥は怪巌深淵多く、漁するに便ならず。この辺はその漁に宜し。…」と、秋留川（秋川）の夜川鵜飼について記し、多摩川中流で行われている昼川との違いを述べている。また『玉川沂源日記』（天保十三年・一八四一）にも、羽村地先の夜川鵜飼について記している。「…このあたりに思ふままに漁れるには、浮かれつつ闇の夜も厭はずなん。又、鵜飼男が手縄をさばけるわざも、目もあやなり。…」と、夜川での鵜使いの見事な鵜さばきをほめたたえている。

こうして見ると、多摩川の本、支流では、昼川と夜川の鵜飼が行われていたことが判るが、こうした鵜飼に用いる鵜は、多摩川河口付近の羽田穴森神社から浜離宮にかけて、沢山の鵜が生息していた。そこで捕えた鵜を飼いならして鵜飼に使っていた。多摩川の下流に今でも「鵜の木」の地名があ

浮世絵に描かれた多摩川の夜川鵜飼／広重筆『玉川秋月』部分

鵜飼の絵／『玉川遊漁の図』部分

り、当時の鵜の生息地であったことがうかがえる。

この頃の多摩川の鵜飼を描いた絵画に、安藤広重の『江戸近郊之内・玉川秋月』（天保五年・一八三四）がある。広重の作品の中でも名作といわれ、川辺で鵜飼をする漁人が描かれている。

月の光に映える多摩川の岸辺で、遠くで網打ちをする人の手前に、鵜を使って漁をする人物の姿があり、川面を渡る風に柳がゆれて、静かな光景にかすかな動きを与えている。はるか彼方には武相の山波がかすみ、広大な空間がひらける多摩川一帯の描写である。これが今から一六〇年ほど前の多摩川沿いの景観であり、「ケ」の鵜飼を流域の人たちが静かに行っていた。ここには将軍御成りの上覧鵜飼や明治中期以降に見られるようなにぎにぎしい華やぎもなく、ひっそりとした「ケ」の鵜飼が、平安時代から連綿としてつづいていたのである。

『江戸名所図会』（天保五年・一八三四）の「多摩川」の絵の中で、富士山を望む眺望が開らけた所から、広い河原を蛇行して流れる多摩川で鵜飼をする人の姿が描かれている。また水源から羽田浦までを描いた多摩川の河川絵図、『調布玉川絵図』（弘化二年・一八四五）は巻物仕立だが、中流の各所で流れに立ちこんで鵜を使う漁人の姿が見られ、江戸時代後期の鵜飼の盛んな様子がうかがえる。

五日市町の延喜式内社阿伎留神社に残る『年中祭絵巻』の八月に、同社の鵜飼神事が描かれており、神事は「八月上旬　鵜飼神事　秋川ヨリ鮎ヲ取リテ供ヘ奉ル此日櫛八玉命祭ナリ中興以来洪水有ルヲ畏レ六七月中鮎ヲ取リ之レヲ神馬坂ノ池ニ飼ヒ置キ八月ノ祭ニ供フルコトヽナセリ」とあるが、この鵜飼神事がいつの頃から行われたかは明らかでない。絵巻は狩野久信が描いたもので天保（一八三〇～）から幕末頃の作品である。絵には神官らしき人物が松明をかざし、徒で二羽の鵜を使う夜川の様子が描かれ、平安時代に歌人の武蔵が府中地先の多摩川で詠んだ、夜川鵜飼を彷彿させるものがある。

四、明治以降の多摩川鵜飼

徳川幕府が崩壊し、時代が明治（一八六八）になると、鮎上納の役務は廃止され、また維新の混乱の中で、多摩川の漁撈は明治初期には沈滞の傾向を見せ、鵜飼もこの間、一部の水域で細々とつづけられていた。

その頃の多摩川といえば、流れに網する人や釣人たちと共に鵜を使う漁人の姿が見られ、川面を時折筏が通り過ぎる静穏なたたずまいは、江戸時代後期の『調布玉川絵図』に描かれているようなのどかな世界であった。多摩川とその流域は、長い間にわたる鮎上納の桎梏から解放されて、近隣の相模川や荒川と同じような自然河川本来の姿を取り戻した流れで、伝統漁法が営まれていた。だが多摩川の平和な訪れはあまり長くはつづかなかった。

明治二十二年（一八八九）、八王子、新宿間に甲武鉄道が開通し、以後、玉川線、京王線が多摩川に通じるようになると、東京方面から大勢の人たちが多摩川の清遊に訪れるようになった。それまで沈滞していた多摩川の鵜飼は、観光客向けの漁として復活し、先の江戸時代にも増して盛んになり、昭和十年頃までつづくことになる。それまでは「ケ」の鵜飼として長い間にわたって営まれてきた伝統技法は、変転する時の流れの下で、大勢の人々が見物する中で演じる見せ鵜飼となった。

鵜飼の技法は、今や見せ鵜飼となったものの昔からの徒使いであり、漁人が流れに立ちこんで二羽の鵜を使うことに変りはない。鵜飼見物

大正初期の徒鵜飼／『むかしの府中』より

日野地先での観光鵜飼／大正末期・写真 世田谷区広報課提供

昭和初期頃、秋川での鵜飼／『多摩川は語る』より

の観光客は、屋形船や川岸から、流れで次々と鮎をとらえる鵜の動きとそれを巧みにさばく漁人の技を心ゆくまで楽しんだ。

鵜飼は一組三人で二羽の鵜を使って漁をした。鵜を扱うのは親方格の「鵜使い」であり、多摩川では長良川のように鵜匠とは呼ばず、こうした呼称にも「ケ」の鵜飼の系譜がうかがわれる。鵜使いの下に二名「鵜先」がおり、所によって「綱引き」とも「勢子」とも呼んだ。鵜先は鵜使いの両側で錘をつけた「しらた」と呼ぶ鮎追い寄せ網を引き、流れの鮎を追いこんで鵜が魚をとりやすいようにする。鵜使いが流れに立ちこんで下流に向うと、それに合せて鵜先がしらたを引いたまま移動し、鮎を追い寄せる。そこに鵜使いが鵜を放って鮎をとらせる。徒鵜飼は鵜使いと鵜先と鵜の連携プレーであり、三者の呼吸が合ってはじめて満足する漁果がえられる。

昔から行われた漁の技法が、都会から訪れた観光客の眼には物珍しく、鳥に漁させる原始的で素朴な鵜飼ショーに、船から川辺からやんやの喝采があがる。かくして多摩川の鵜飼は大いに喧伝され、鉄道で訪れる都会人士で多摩川の川辺はかつてないほど賑わい、大正期には最盛期をむかえる。今まで閑静であった川筋の各地に、清遊に訪れる観光客用の茶店や料亭が出現した。

当時、鵜飼漁を行う人は、多摩川沿いの料亭に雇われている半農半漁を生業にした人たちが多かった。多摩川の鵜飼は鮎の季節だけの漁であり、終漁期間中の鵜の飼育は手間と費用がかかるため、相模川や荒川流域に里子に出して養育を託すことも行われていた。大正期までは羽田方面で鵜を専門に供給する人がいて、多摩川で鵜飼をする人たちはそこから鵜を買っていた。

昭和になると、今まで清冽で豊かな流れが徐々にかげりを見せはじめ、多摩川でとれる鮎が次第に少なくなった。流れを遮断する堰の出現が、河口から遡る稚鮎の障害となり、川の水量も以前より少なく、鮎は年毎にその数を減じていった。多摩川はかつてのような生命力にあふれた流水ではなく、見せ鵜飼として一時の華やぎを見せた多摩川の鵜飼は、昭和十年頃を境にその長い歴史を閉じることになる。立川、日野地先の水域では、昭和十二年まで鵜飼が行われたが、鵜飼の終焉とともに川沿いの料亭もさびれて行く。やがて第二次世界大戦、そして終戦、戦後のめまぐるしい時代を経て、平安歌人の武蔵以来、八七〇年余りに及ぶ多摩川の鵜飼は、流域からその姿を消したのである。

鵜飼用の魚籠。鵜使いの腰につける。／府中市立郷土館蔵

是政の老鵜使い、川辺万衛門／大正八年頃『むかしの府中』より

第三編　多摩川の鮎

第一章　香魚・鮎

鮎は日本列島を中心に、朝鮮半島および中国大陸の一部の河川に生息する一年生の淡水魚で、中には琵琶湖の小鮎のように生涯を湖沼で終えるものもある。鮎は香味にすぐれ、われわれ日本人が昔から好んで食した川魚で、その歴史は大変に古い。

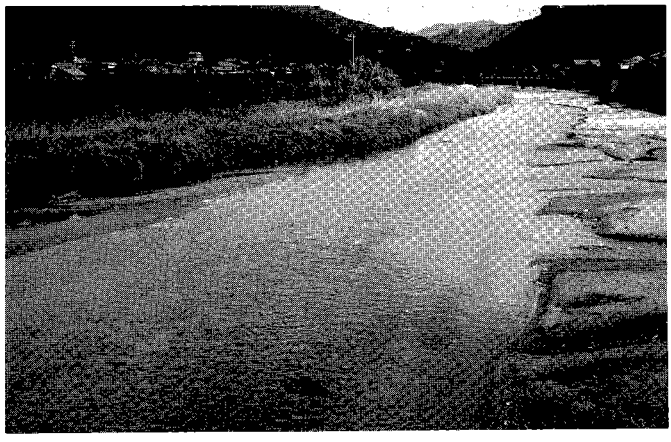
わが国で最も古い記録とされる『古事記』に、神功皇后が新羅征討の折、九州松浦郡の玉島川で自ら鮎釣りをしたとあり、

「…筑紫の末羅縣の玉島の里到り坐して、其の河の邊に御食したまひし時、四月の上旬に當りき、爾に其の河中の磯に坐して、御裳の糸を抜きとり、飯粒を餌に為て、其の河の年魚を釣りたまひき。…」

飯粒で鮎が釣れたかどうかは別にして、これがわが国最古の鮎釣りの記録である。同様の記述が『日本書紀』にも見られる。書紀には玉島川の他に吉野川で年魚を産すること（応神天皇十九年）や、吉野の

神功皇后鮎釣りの絵／芳年画『釣魚秘伝集』より

神功皇后がこの石の上で糸を垂れ、鮎を釣ったと伝えられる玉島川河畔の垂綸石／佐賀県浜玉町



神功皇后が鮎を釣った玉島川の流れ／昭和五五年・佐賀県浜玉町

鮎に託した童謡があり（天智天皇十年）、『風土記』にも地方産物に鮎の記録が見られ、

- 常陸国風土記久慈郡　久慈川の年魚
- 出雲国風土記意宇郡　伯太川の年魚
- 豊後国風土記日田郡　日田川の年魚
- 豊後国風土記速見郡　大分川の年魚

『風土記』に記されたこれらの河川は、いずれも鮎を多く産するとあり、当時、鮎とりが盛んであったことがうかがえる。

『記紀』に先だつ七世紀初めに記された中国の『隋書』巻八十一、倭国の条では、「…鸕鷀の首に小環を掛けて水に放ち、魚を捕えさせるが一日に百余頭をとる…」と、わが国の鵜飼の様子を記している。鸕鷀とは鵜の中国名で、わが国ではその頃すでに鵜飼が行われていたことを示す貴重な記録である。日に百余頭とある魚は鮎で、六世紀の後半から七世紀初頭にかけて、わが国の河川で鮎漁が行われていた。記録はそこまでであるが、わが国ではそれより以前からさまざまな鮎漁が行われていたのであろう。

鮎は別名「年魚」或いは「香魚」とも云われる。秋の終りに産卵を終えた親鮎は死に、孵化した稚魚が流れを下って海に入り、プランクトンを餌に冬を過す。やがて春になると、河口から稚魚の群れが流れを遡上し、川石の多い中流水域に居ついて、俗に石垢といわれる付着藻類を餌に急成長して成魚となる。秋になると抱卵した鮎は川を降り、流れのゆるやかな礫底の浅場に群集して産卵し、その生涯を終える。鮎の出生から死までのサイクルが一年で、このため鮎が年魚といわれる。

海から遡上し、清流の石に付いた藻類を餌に生長する鮎は、初夏から真夏にかけて鮎特有の香気を放つようになる。鮎の多い河川では岸辺に鮎の香気が漂い、老練な川漁師になると、香りの強弱でその川の鮎の数が判り、文字通り鮎を嗅ぎわける。昔からわれわれ日本人は、季節感とともに鮎の淡白で上品な風味を愛し、食してきた。香味にすぐれたこの魚の特徴から、鮎の別名を「香魚」と呼んだ。わが国の鮎は、香味の点で朝鮮や中国の鮎に優り、清流が育んだ川魚の女王はわが国の特産物になっている。

古代から香味を貴ばれた鮎は、いつの時代にも重要な貢納品であった。『延喜式』に見る鮎御贄貢納国は、伊賀、伊勢、近江、美濃、丹波、但馬、播磨、美作、備中、紀伊、土佐、太宰府など広汎な地域に及んでおり、鮎鮨や塩鮎、干鮎、煮鮎、押鮎で貢納された。だがこれは当時の鮎河川の一部であり、他の河川にも鮎が生息し、昔からさまざまな鮎漁が行われていた。

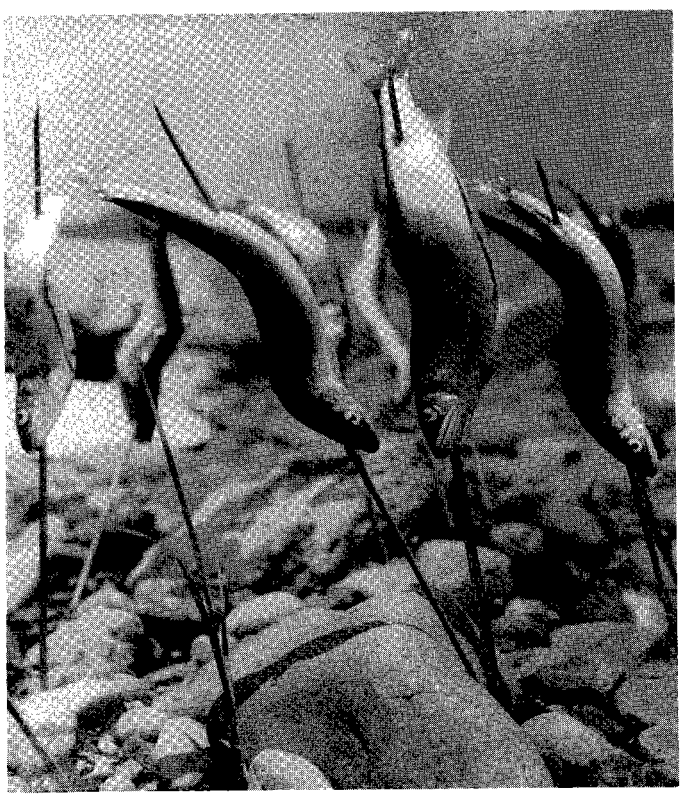
江戸時代以降、鮎の川として知られるようになった多摩川は、明治、大正の頃までは人工の手が加わらない自然河川であった。流れには魚族の往還をさまたげる堰もなく、季節ごとに鮎も自由に行き来していた。初夏から秋にかけて、流れにはたくさんの鮎が遊泳し、下流の丸子より上流は氷川、さらに丹波村まで鮎が遡上した。支流では秋川の五日市、浅川の八王子に到る広汎な水域に鮎が生息した。多摩川の河川形態は、普通の河川に比べて中流水域の占める割合が多く、淵と瀬

がつづく清冽な流れの川底石は、鮎の餌になる藻類を豊かに育んだ。この頃の多摩川は、近隣河川の中で鮎の生息密度の最も濃い河川であり、豊潤な流れではさまざまな鮎漁法が行われていた。

多摩川の鮎が記録に見られるのは、平安期の夜川鵜飼を詠んだ和歌以後空白がつづき、江戸時代になると地誌や諸国産物などで紹介されるようになる。

『新編武蔵風土記稿』（文政五年・一八二二・多摩郡の部）には、江戸時代後期の多摩川流域で、鮎を産する村々の様子が記され、当時、鮎漁が盛んであったことを伝える貴重な資料になっている。『魚鑑』（天保二年・一八三一）にも、「あゆ」の条に「…味ひ最甘美。頂骨に凝脂あり、亦美し。諸州多くあり、武州玉川を上とす。…」と、多摩川の鮎を全国に先がけて第一の美味と紹介している。明治八年の諸国物産を述べた『日本地誌略物産弁』でも「武蔵国物産」の項で「○玉川鮎　多摩郡玉川ヨリ産スル名産ニシテ、味最モ好シ、三四月頃ヲ若鮎ト称ス、其佳ナルハ、六七月ヨリ八九月ヲ限ル、…」と多摩川鮎を武蔵国の名産として紹介している。こうした物産紹介の他に、紀行文などで多摩川の鮎についての記事も多く、また流域に残る江戸時代の御用鮎関係の古文書資料については、現在研究が進められている。

江戸、東京に近い鮎河川として、漁撈文化を開花させた多摩川は、鮎関係の文献は元より、江戸時代以降の漁撈資料に恵まれた水系である。かつて豊潤な流れの辺で営まれた漁撈の全貌が、逐次解明されることにより、この偉大な流れに対する正しい認識と評価が定まることになる。



とれたての鮎を川原で焼く／写真・立川市提供

第二章　上納鮎

徳川氏の幕府開設により、それまで内湾沿いの一漁村にすぎなかった江戸は膨張を重ね、幕末期には世界有数の百万都市に発展した。その間、増大する消費人口を支える食料は、当初江戸近郊の農村や江戸前の産物で賄われたが、時代が降るとともに、全国的な供給に依存することになる。

天正十八年（一五九〇）、家康が関東入国に際し、本芝浦と金杉浦の漁師に、従来通り「何方ニ而モ猟業免許被二仰付一」と自由操業を許可し、両浦はその御礼に「上品之魚類取揚候節者、魚初穂として御城に持参」したと『浦元旧記取調書上』（「平林家文書」元治元年・一八六四）にあり、これが幕府への御菜魚上納のはじまりといわれる。その後、御菜浦は本芝、金杉の両浦に品川浦が加わり、万治元年（一六五八）に大井御林浦、その後に羽田浦、生麦浦、神奈川浦、新宿浦が加わり、御菜八カ浦が成立した。八カ浦は江戸湾における漁業特権をあたえられ、内湾の元締として御菜御用を務めながら、江戸への海産物を供給してきた。

一方、多摩川特産の鮎が御菜御用を務めるのは、江戸前御菜八カ浦の成立より後で、『桑都日記』は、「玉川、秋川の鰷（はや）を官に献貢するや、享保年時に始まる…」と記しているが、文中の鰷は鮎の誤りである。享保年間は西暦で一七一六～三五年であり、これより以前から鮎上納が行われたとする記録もあるが確証に欠け、多摩川での御菜鮎成立の正確な年代は明らかではない。

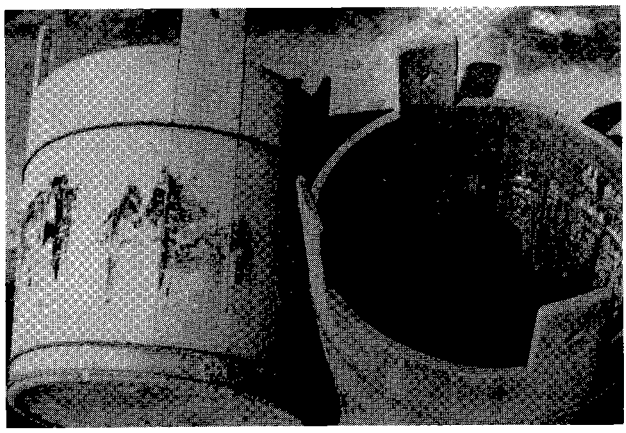
幕府への鮎運上の呼称については「御用鮎」、「御菜鮎」、「献上鮎」、「上納鮎」、「上ヶ鮎」などがあり、当初、多摩川沿いの数ヶ村が行っていた鮎上納は、時代が降るとともに増えて、川沿いの村々がベタ打ちに鮎上納を行うようになる。『桑都日記』には、鮎上納の四十四ヶ村が記されている。

幕府の鮎需要に応えるべく、流域の各村が競って御用鮎の任に当たろうとしたかに見えるが、これはあくまでも表向きのことである。その実、鮎漁場の利権にからむ一村の利害をかけた経済競争であり、膨張しつづける消費都市、江戸における鮎需要の増大がその背景にあった。鮎上納の村には、割り当て数を満せば、その見返りとして地先水域の漁場特権が認められていたのである。一定の制約があるものの、上納鮎以外の鮎漁で得た収益は、上納の苦役を差し引いても余りある。鮎上納の役務とそれに付随した漁撈特権との差し引き勘定が、多摩川流域四十四ヵ村にも及ぶ鮎上納村の出現となったのである。

江戸時代は、組織化された封建制度の下で、村落共同体機構が整備された時代であり、鮎上納もまた、田畑からの農産物と同様の収奪体制が組織化され、専業の川漁師たちも、さまざまな規制の下で、御用鮎制度の下に組みこまれていった。『桑都日記』（続編・巻之七）に、川辺で上納鮎の様子を描いた絵がある。鮎検分の役方と村人、それに流れの生簀から鮎をとり上げ、形揃えをして鮎籠に収める者、重ねた鮎籠を荷づくりし、待機する荷かつぎなどが描かれ、川辺で行われた

上納鮎の作業がよくわかる。荷には「御菜御用」と書いた御用札をつけ、これから夜を徹して江戸表に搬送する。

上納鮎は抱卵期の子持鮎が最上とされ、降り鮎の季節に行われた。降り鮎に有効な漁法は「しら」で、この頃になると、上納鮎の村々の地先水域では、しら杭を打ちこみ青竹を組みこんで鮎をおどし、部屋と呼ぶ捕採部に鮎を誘い、そこに仕掛けた「もじ」でとった。だが、不漁つづきの秋出水や鵜飼漁との争い、それに隣村との漁場をめぐる確執など、村人たちにとって、鮎上納は日頃の農耕とは別な気苦労があった。江戸城内において、将軍以下、御一統の食膳に供せられる鮎一品の陰には、多摩川流域の農民たちの労苦が深くかかわっていたのである。



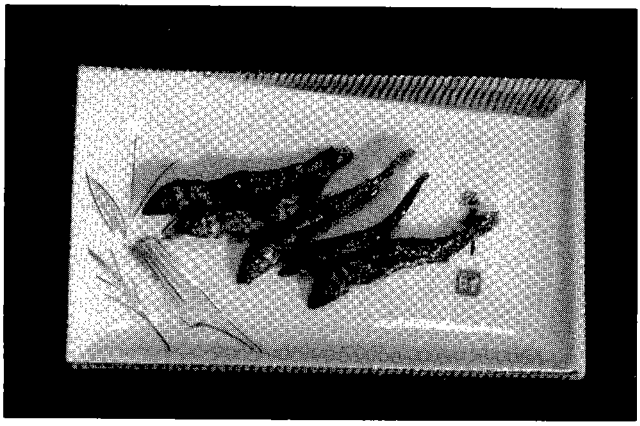
鮎御用桶／写真・三田鶴吉氏提供

鮎は、昔から為政者が好んだ香味にすぐれた川魚であり、御用鮎は多摩川に限らず、江戸時代の幕藩体制下では、各地の河川で行われていた。『延喜式』にも土佐の貢租品として煮塩年魚五罐」、「押年魚一千隻」と記され、鮎河川の多い四国土佐藩でも、江戸時代に領内の物部川や鏡川、仁淀川、四万十川の鮎漁に厳格な規制を設け、御用鮎制度の徹底した苛斂誅求に、村民たちが苦労したとある。

多摩川流域が封建制度の桎梏から解放されるのは、幕府が崩壊した明治維新後である。江戸から東京に変っても、大消費都市の鮎需要は絶えることなく、多摩川の川辺からは、人の背に託した鮎かつぎが、明治二十二年の甲武鉄道の開通までつづけられる。

第三章　石川千代松博士の偉業

初夏の風物詩として知られる鮎解禁当日は、どこの川辺も前夜からつめかけた太公望で賑わい、その日の釣果や鮎の生育状況が話題になる。現在では、天然遡上鮎の数が激減もしくは途絶えたかつての鮎河川でも、琵琶湖産や海産稚鮎の放流で鮎漁が行われている。全国的な稚鮎放流事業と鮎釣りの隆昌は、多摩川とも深くかかわりのあった生物学者、石川千代松（一八六一～一九三五）博士の功績によるところが大きい。



琵琶湖産小鮎の飴煮

石川博士は、明治、大正期に東京帝国大学教授として在職したが、琵琶湖産の小鮎に関心を寄せ、それまで琵琶湖に生息する小鮎が、他の河川の鮎とは別種と考えられていることに疑問をもった。明治二十六年（一八九四）に琵琶湖で調査を行い、確証にはいたらなかったが、『動物学雑誌』に「…小鮎は大鮎と同一物の様に見える…」と英文の小論文を発表した。その後、小鮎の池中養殖実験を行い、また琵琶湖より遡上した小鮎が、河川では一尺近い立派な鮎になることを確認した。

当時、大学の水産学者はもとより、農林省水産局関係者や琵琶湖の職漁者たちは、琵琶湖の小鮎が他の河川の鮎と同じ種であるとは誰一人考えてはおらず、あくまでも「小鮎は小鮎、鮎は鮎」との通念が支配していた。だが博士の慧眼とある学説に対する信頼、それに度重なる実験と調査により、明治二十六年以来持ちつづけた、琵琶湖の小鮎が他の河川の鮎と同一種であるとの確信を深めて行った。

石川博士は大学在学中、大森貝塚の発見者でありわが国考古学の父といわれるモース *Edward Sylwester Morse*（一八三八～一九二五）博士によるダーウィンの進化論の講義に強い影響をうけた。明治十六年（一八八三）に筆記ノー

石川千代松博士胸像。彦根市の滋賀県鮎苗漁業組合連合会事務所前にある。

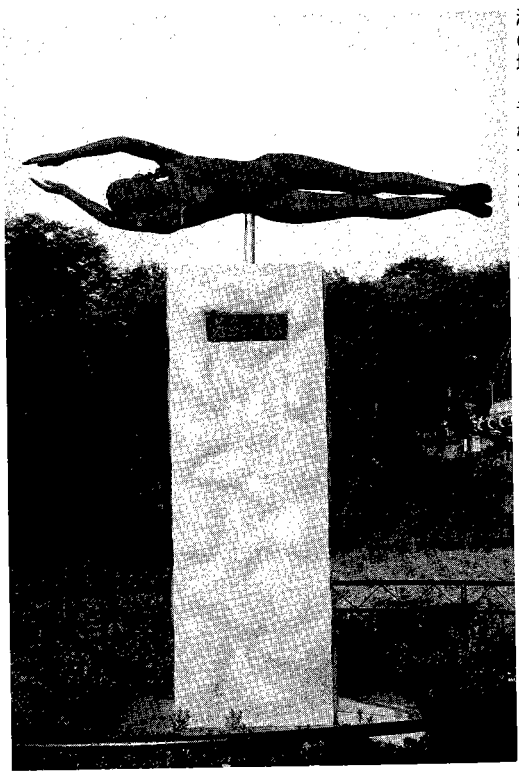
トをもとにモースの許可をえて『動物進化論』と題して出版した。これはわが国で本格的に進化論を紹介した初めての本であった。

その後、明治十九年から二十二年まで石川博士はドイツに留学し、当時、世界的な著名な動物学者として知られるヴァイスマン *August Weisman*（一八三四～一九一四）博士の下で研究を行った。ヴァイスマン博士は一八七〇年頃、ダーウィンの進化論の一部に疑問をもち、生物の進化と環境との関係について実験を行い、生物の生存中に環境から受けた影響はその個体にとどまり、次の世代に遺伝するものではないとする「生殖質連続説」を発表した。この説の名は別に「生殖質連継説」ともいい、石川博士も琵琶湖の小鮎は河川の鮎とは違う体形だが、それは湖の栄養不足に起因すると考えた。この説を立証するため実験と調査をくり返したが、博士に対する周囲の壁は厚く、冷笑はやがて嘲笑に変って行った。

大正二年（一八一三）、石川博士は蔵書を売却して購入したドイツ製の活魚輸送器に三百匹の琵琶湖産小鮎を入れ、多摩川での放流実験を行うため、米原から貨車に同乗して青梅に向った。二十六時間の輸送中に百匹が死亡した。後日、博士は自著『鮎の話』の中で、この目的が稚魚の遠距離運搬と小鮎による生殖質連続説の実証のためである、と述べている。長距離輸送にたえた残りの二百匹の小鮎は、青梅地先の多摩川、万年橋下流の釜ヶ淵に放たれた。

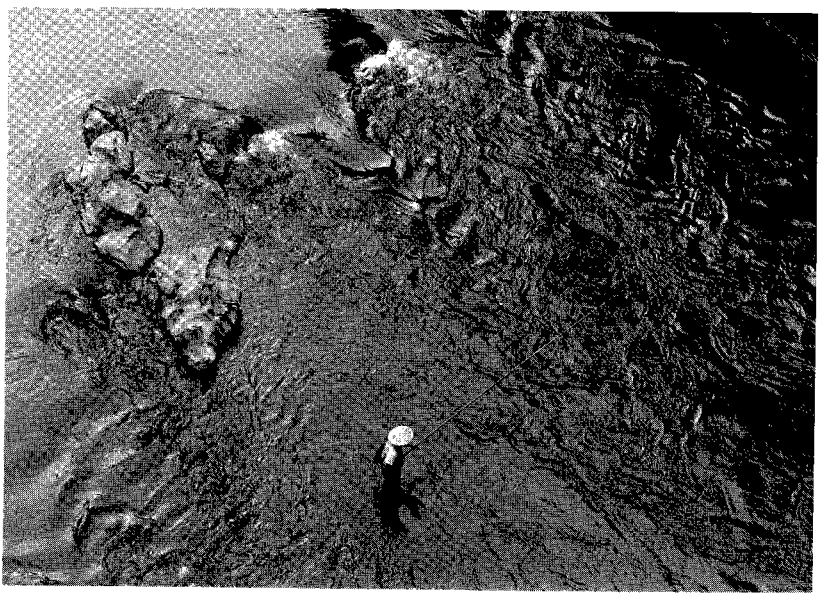
大正四年に、博士は再度酸素注入で湖産小鮎を運搬し、同じ場所に放流したが、暗い所から急に明るい所に出したため、驚いた小鮎がたくさん死亡した。隔年にわたり二度の放流を行ったが、現地からの情報はなかった。博士が小鮎の放流にこの水域を選んだのは、羽村堰の完成以後、堰より上流は東京湾からの天然鮎の遡上がないので、青梅地先の多摩川を実験フィールドにした。大正二年の夏、青梅より上で大きな鮎がとれたとの風評もあったが、標本のない博士に確証はなく、青梅の郡役所の記録には放流不結果として処理された。

その後、石川博士は雑誌『文芸春秋』に、大正二年の小鮎放流は失敗に終ったと書いた。ところがある日、青梅市の藤田敏雄という人からの手紙で、文芸春秋に大正二年の多摩川小鮎放流が失敗に終ったとの記事を読んだが、自分は父とともにその年の秋、二子渡しの付近で羽村堰ができて以来、決してとれたことのない九寸から尺二寸の大鮎



石川千代松博士の偉業をたたえる「若鮎の像」。稚鮎放流の地、青梅市大柳の多摩川左岸にある。

姉川の湖産稚鮎漁／昭和四三年四月



鮎釣り／御岳地先・昭和五七年

を釣ったとあり、博士の放流小鮎に相違なく、また地元の川漁師も確信しているとの便りが寄せられた。博士の学説と信念は、ようやくにして報いられたのである。

当時、世界的な学者として知られ、国籍を異にするE・モース（アメリカ）とA・ヴァイスマン（ドイツ）両博士の薫陶をうけた石川博士の研究は、多摩川を実験水域として見事に立証された。それまで湖の栄養不足から「小鮎」の汚名に甘んじた琵琶湖の矮化魚は、堰にはばまれて天然鮎が遡上しない全国各地の流れに放流されて尺にも及ぶ大形鮎となり、太公望たちの熱い思いを叶えてくれる。一人の学究による純粋な真理追求の情熱とすぐれた識見が、現代の鮎漁河川に貢献した功績は計り知れない。

鮎の味

鮎は、わが国では古来より香味にすぐれた川魚として、ことの外珍重された。日本を含む極東の限られた水域に生息する鮎が、国際的にはどの様に評価されていたのだろう。明治の後期、多摩川に遊んだ外国人が食した鮎にまつわるエピソードがある。

後に琵琶湖産の小鮎で「生殖質連続説」を実証し、全国河川への鮎

放流事業に貢献した石川千代松博士の著述によると、明治三十年頃、米国の世界的な魚類学者であり、親日家として知られるジョルダン *D.S.Jordan* 博士が初来日した。六月初旬に東京帝国大学の動物学者たちが、ジョルダン博士を多摩川日野に招いて鮎漁を催した。

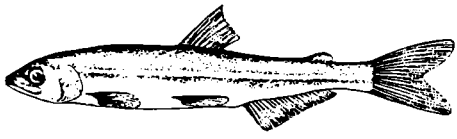
その折、ジョルダン博士は流れの徒鵜飼漁を見物し、当時の多摩川の清冽な流れに感嘆して、「…多摩川は宝石の流れを意味し、これほど清らかな水はない」とほめたたえている。また、とれたての鮎を食し、淡白で上品な風味を激賞した。

一九〇五年に出版されたジョルダン博士の『魚類学入門』（*"Guide to the study of fishes"*）には、日本の鮎と多摩川の鮎漁について述べ、日野の鵜飼のスケッチとともに世界に紹介された。同書では鮎の味は世界第二であると述べ、一位は北米産のユーレコンというキュウリウオ科の淡水魚で、鮎はそれに次ぐとしている。ジョルダン博士が再度来日した折、石川博士は鮎の味について、ジョルダン先生はユーレコンを一番にされ、わが方の鮎を二番にされたが、私が魚の本の中で味について書くならば、鮎が第一でユーレコンはその次にします、と冗談を云った。

この石川博士の冗談にはそれなりの理由がある。初来日のジョルダン博士が、多摩川日野で鮎を味わったのは六月初旬のことで、東京湾から遡上した稚鮎が多摩川中流に居ついて一ヶ月余りで、その間水も温まず餌になる石垢も少ない。石川博士によれば、その日とれた鮎は五、六寸の小さなもので、脂ものらず香りの少ない、あまりにも若すぎた鮎であった。これが七月末頃になれば見違えるほど大きくなり、香味にすぐれた川魚の女王になるのだが、如何にせん時季が早すぎた。それでもジョルダン博士は多摩川の流れを賞讃し、鮎に舌つづみを打ちながら世界第二の味覚魚にランクした。

石川博士は後日、著書の中で「…ジョルダン先生はその實本當のアユの味を知られないのである…」と述べ、鮎の最盛期にジョルダン博士が再度来日した際、石川博士は京都府か岐阜県下の塩焼鮎をと手配したが、ジョルダン博士の日程の都合で、それが叶えられなかった。石川博士にしてみれば、思い入れの深かった日本の鮎の本当の味を、世界的な魚類学者、ジョルダン博士をしてユーレコンにまさる魚（*The one fish of all its fishes*－ジョルダン『魚類学入門』）として、正当な評価を得たかったのであろう。

ジョルダン博士が自著『魚類学入門』で世界一美味とたたえた北米産の魚ユーレコン／『アユの博物誌』より



第四章　多摩川の鮎稼ぎ

多摩川流域という自給自足経済圏の中で漁撈の伝統を継承してきた。半漁民の構成も流域が農村地帯であった江戸から明治にかけては、農民が農閑期や鮎の季節に漁してとれた魚を自家の菜料に、また売却して生計の支えにしていた。

一、流域の半漁民と川漁師

多摩川で漁撈をする人たちは、専業職漁者の他に農業や他の職業の合い間に漁する半漁民、それに遊漁者があり、とりわけ多摩川流域においては川沿い村落に在住する半漁民の層が厚く、伝統漁法の継承基盤になっていた。江戸時代における幕府御用鮎の供給も彼等によって支えられ、半漁民は多摩川の水域で単独もしくは共同により、さまざまな漁法で魚をとっていた。

古くから流域農民による集落単位の「跳網」や「寄せ網」、村組による「しら」、「瀬張」、「簗」などの共同漁撈から、少人数での「瀬千し」、「鵜縄」、「堰漁」、単独では「投網」、「掬い網」やさまざまな筌漁法、それに刺突漁法などを行っていた。漁に使われる漁具も流域で入手可能な素材を用いて自製し、

マルタ投網を持つ砧の川漁師、川辺七郎／昭和四〇年頃
写真・川辺昭吉郎氏提供

多摩川の川原に憩う　熊川の漁師たち／
大正末期から昭和初期頃／写真・福生市提供

農民の他に半漁民といわれる人たちは、鮎の季節になると「投網」や「さくり」などの鮎漁を行い、本業より良い稼ぎをした。彼等は比較的時間が自由な職人や商人、それに季節労働者などで、生来からの川漁好きであり、本業そっちのけで鮎漁に熱中した。

川漁では季節ごとにとる魚も変わり、また自然を相手にする生業のため、専業川漁師の収入は常に不安定である。多摩川中流では春の「瀬付き」に始まるウグイ漁から秋の降り鮎の時期までは稼ぎ時だが、冬の間は職漁者も漁を休んだ。休漁期間中は止むなく臨時雇いの仕事や季節労働などで冬を過し、次の春を待つ。だが中には冬期も休まずに通年漁をする職漁者もいた。

流れに刺網を仕掛けてウグイやオイカワをとり、厳冬期にも「ペラ網漁」を行ったが、漁撈者にとって冬の漁は大変にきついものであった。また秋出水などで多摩川本流が増水し、平水状態に戻るまで一週間や十日も待たなければならないことがある。漁果で生計をたてる職漁者にとって、その間を無為に過すことはできず、本流より早く水が澄む浅川や砂利穴跡地の止水域などで漁をした。川漁専業の生業ははた眼でみるほど楽なものではなく、よほどの川漁好きでなければ務まらない稼業である。

昭和二十年代の頃、毎年師走になると川漁師は忙しくなる。とくに暮れはお使い物や寒露煮用の魚の需要が激増し、得意先や川魚仲買人からの注文に応じるため、一日中川での漁がつづく。あまりに魚をとりまくるので多摩川の漁場が荒れてしまい、相模川中流や中津川、道志川、入間川、荒川中流にまで出かけて魚とりをすることが度々あった。当時はどこの河川でも比較的自由に漁ができたが、それでも在地の職漁者からは警戒の眼で見られた。

多摩川にまだ魚がたくさんいた頃でも、川漁だけで生計を維持して行くのは並大抵の苦労ではない。少しでも漁果を上げるために常に研究と工夫を重ね、懸命に川漁に打ちこんで、時には氷の張るのもいとわずに流れに立ちこんで漁をした。当時の多摩川流域には川魚嗜好の人たちがおり、そうした需要に応えるための生業が成り立ったが、昭和三十年代以降になると多摩川の魚が減り、また川魚愛好者も少なくなり、川漁を専業とする生業は成り立たなくなる。

二、川魚販売

多摩川の中流域では、川魚仲買人を別名「仲買い」、「仲師」と呼び、職漁者や半漁民がとった魚の買い上げを生業とし、戦後、立川では二軒、昭島と拝島にそれぞれ一軒あった。鮎やウグイ、オイカワ、鰻、鯉などの川魚を料亭に卸したり、消費者が食べ易いように処理して店頭で販売した。

仲師はいずれも、仕入れ商品の川魚についてはプロの目利きであった。川漁師にとって彼等は漁獲物の大切な販売先であり、有り難い存在だが、商品である魚の鮮度が少しでも落ちると引き取ってはくれず、朝の漁でとれた活きのよいものを歓迎した。日中、藻類を飽食したオイカワはワタ抜き後の目減りが大きく、鮮度も落ちるため、夕方に持

漁師から買いとった魚のワタを抜く川魚商／昭和三六年・立川錦町の青木川魚店、写真・三田鶴吉氏提供

ちこんだオイカワは絶対に買わず、また川魚の匂いについても徹底して厳しかった。

鮎は良い値で取り引きされるので、仲師が最も歓迎したが、その頃の鰻は今日のような高値ではなく、二束三文の価値しかなかった。ウグイやオイカワは量がとれるため、日当の稼ぎ程度にはなり、時には仲師からの注文で鶏の飼料用にモツゴやモロコをとったこともあった。

拝島の鮎卸商人。自転車で得意先を回っていた／昭和二〇年代

戦後間もなくの頃、拝島の仲師で川魚の仲買いをやりながら、自転車で鮎売りの行商をしている人がいた。生鮎を入れた木箱を自転車の荷台につけ、木箱の脇に「多摩川の鮎」と大書して流域の得意先を回り、遠く御岳方面まで鮎を販売していた。また、生鮎を鮎籠に並べて幾重にも積み重ね、背負い籠で運ぶ行商人もおり、流域の得意先を売り歩いた。竹で編んだ鮎籠や背負い籠は通風がよく、生鮎の鮮度を保つことができた。当時の多摩川流域では、鮎をめぐるのどかで牧歌的なくらしが営まれていた。

川魚には川魚特有の臭いがあり、これを嫌う人が多いが、昔の多摩川流域では鮮魚といえば川魚しかなく、現在のような冷蔵技術や輸送手段が発達していない時代では、海産魚といえば干物か塩物であった。その当時、多摩川の川魚は日常生活に利用され、川魚の臭味を好む人たちもおり、戦前はもちろん戦後の食料不足の時代には、川魚は貴重な蛋白源として歓迎され、川漁師も仲師も繁盛した。だが昭和三十年

代になると多摩川の漁撈は衰微し、仲師も多摩川産の川魚の仕入れができなくなって転廃業する者もあり、また他県産の川魚を仕入れて川魚店の看板を守りつづけている所もある。

三、鮎担ぎ

江戸後期の『江戸名所図会』・「代太橋」には、目黒村に分流する玉川上水の土橋の上で、鮎籠の振り分け荷を天秤で担ぐ「鮎担ぎ人」の様子が描かれている。上納鮎であることを示す「御用札」を付けず、屈託のない五人の鮎担ぎ人の絵からして、内藤新宿辺りの川魚屋に鮎を搬送する途中を描いたものと思われる。多摩川の生鮎は、当時、幕府御用の生鮎の他に大名屋敷や一部の富商、それに高級料亭からの需要があり、それに応えるために生鮎を運ぶ担ぎ人が街道を往来した。

明治になり御用鮎の制度は廃止されたが、多摩川産生鮎の需要は根強く、江戸時代から明治中期頃まで、多摩川と江戸・東京間を人力による鮎担ぎがつづけられた。鮎担ぎは大変な労力でその分運送費も高くなり、生鮎が江戸・東京に着いた時の値段は、到底庶民が口にできるものではなかったが、その昔、街道を通り過ぎて行った鮎担ぎのいなせな風俗は、後々までの語り草になっている。

鮎担ぎは多摩川沿いの鮎出荷場から始まる。川辺の生簀場で、生鮎の型揃えをして鮎籠に並べ、積み重ねて一荷にして振り分け天秤で担ぐ。屈強な若者が夜を徹して甲州街道をひた走り、明け方に四谷の川魚問屋までおよそ十里の道のりを搬送する。紺の法被に素草鞋、向う鉢巻のいなせないでたちの若者も、次第に荷の重みがこたえてくる。貫目幾らの搬送請負い仕事にはそれに見合う可成りの報酬があるが、今さらながら生鮎の重みが肩に喰いこんでくる。こうした鮎担ぎ人たちの労働の苦しさと、夜道の無聊をまぎらわせるために歌った「鮎か

江戸時代の鮎かつぎ／『江戸名所図会・代太橋』部分

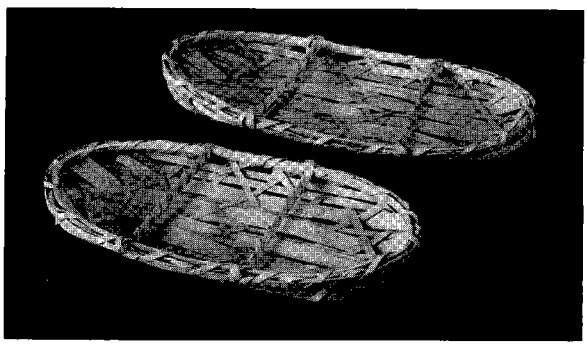
つぎ唄」が多摩川の流域に残っている。

〈鮎はョー瀬に住む　鳥は木の枝に
　わたしゃ　お前のはだに住む
　多摩川とんで出て　　新宿へ入りゃ
　　四谷のつたやが一と息だ

ようやく新宿四谷の鮎問屋「蔦屋」か「小田原屋」に荷を下し、前夜来の苦労に見合う担ぎ賃を懐にするが、帰路、茶屋遊びで散財し、空手で帰る若者もいた。多摩川辺りと大都会を往還した鮎担ぎという特殊な生業は、明治二十二年、甲武鉄道が多摩川沿いまで開通すると姿を消した。

四、鮎　籠

鮎籠は多摩川流域で使われた生鮎を入れる竹製の籠で、江戸城納入の御用鮎にも使われている。『桑都日記』にも、川辺で生鮎を検分して鮎籠に並べ、搬送の荷づくりをする光景が描かれている。また『江戸名所図会』・「代太橋」でも、鮎籠を重ねた振り分け天秤の鮎担ぎの姿が描かれ、同じ『図会』の「登戸渡し」では、鮎籠を入れた土産の多摩川鮎を担ぐ人物があり、鮎籠は生鮎専用の容れ物として古くから使われていた。


鮎籠

鮎籠は長方形の皿状の竹製籠で、補強を兼ねた二本の竹撚りを渡した構造は、通風にすぐれ積み重ねてもつぶれない。傷みやすい貴重な生鮎を運ぶには大変便利な容れ物であった。鮎籠は流域の籠職人の手になるもので、とれたての鮎を、熊笹の葉を敷いた鮎籠に十二、三匹から二十匹ほど並べると、見た目にも美しく生鮎が引き立つ。だが鮎

鮎籠に並べた鮎／写真・立川市提供

籠も籠屋の巧拙により鮎の鮮度が違って見えるため、川漁師や仲師たちは腕の良い籠屋に注文してつくらせた。

多摩川の中流域では鮎籠を「あゆかご」とはいわずに「あいかご」と呼んだ。この地方では昔から鮎を「あい」と呼んでいたためである。鮎籠は江戸時代から昭和二十年代頃まで、生鮎用の容れ物として大量につくられ、使われてきた。売買は生鮎を並べた鮎籠一枚が取引単位で、鮮度と香味を損なうことなく、多摩川の生鮎は流域をはじめ江戸、東京方面にまで及び、多くの人たちに賞味された。

多摩川の西を流れる相模川でも昔から同じ型の鮎籠が使われており、江戸時代、多摩川の御用鮎の納入数が不足すると、山越えして運ばれた相模川産の鮎でまかなうことがあった。江戸から明治にかけて、相模川の鮎も遠路をいとわぬ鮎担ぎによって江戸・東京に搬送されていた。

鮎籠に入れた鮎／明治四五年『風俗画報四三四号』より

鮎籠づくり／写真・三田鶴吉氏提供

第五章　多摩川鮎異聞

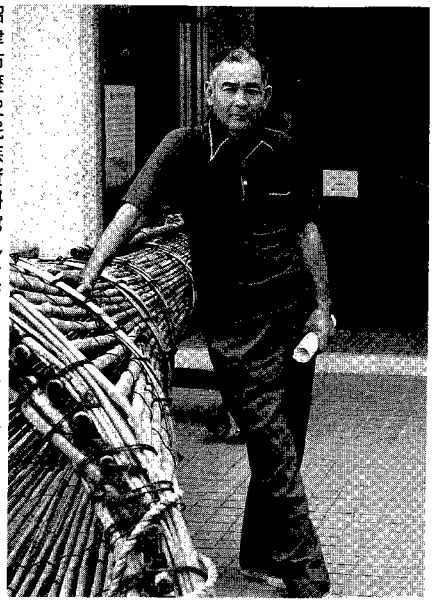
――ある川漁師の話――

かつて多摩川流域には、川漁を生業にする人たちがいた。早春の白魚漁にはじまり、ウグイの「瀬付き」、夏から秋にかけてはさまざまな鮎漁を行い、冬でも流れに「刺網」を仕掛けて雑魚をとっていた。また「ペラ網漁」のように周年行う漁法もあり、こうしてとれた魚を在地の川魚仲買人（多摩川中流では仲師と呼んだ）に売って生計をたてていた。

徐々に多摩川の生命力にかげりが見えはじめ、流れにあれほど生息していた魚は年々少なくなっていった。多摩川が衰えると、川漁に依存する職漁者は次々と転、廃業し、昭和二十年代末期になると、漁で生活する川漁師の数はごくわずかになり、三十年代になると、川漁師は多摩川流域から姿を消した。

多摩川の川漁が盛んであった頃、下流は調布辺りから上流では羽村付近までの中流一帯では、鮎の漁場として職漁者が盛んに漁を行った。大正とその前後の時代に、二子、調布、府中、立川、日野の川辺では、清遊客に川漁を見せたり、鮎料理を供する川魚料亭が店を構え、都会人たちで賑わった。そうした河畔の華やぎをよそに、川漁師たちは静かに流れで漁をつづけていた。

当時の多摩川にはたくさんの魚が生息しており、鮎をはじめ川魚への需要も多く、専業の川漁師たちはその日にとれた魚を仲買人や川魚料亭、又は注文を受けた得意先に売り、漁の稼ぎで生計を営んでいた。腕の良い川漁師にとり鮎の季節は笑いが止まらない。とっても鮎は清流から湧いて出る。「瀬張」、「ひっかき」、「鮎刺網」、「ペラ網」などで他の川漁師の数倍の水揚げがあり、鮎の時期にはすこぶる金回りが良い。



沼津市歴史民族資料館〝モジリ・ウケの世界展〟見学の際の鈴木由太郎さん・昭和五六年

多摩川右岸、日野橋近くに住み、父の代から川漁を生業とした鈴木由太郎（一九二七～九二）さんから、多摩川の漁について聞く機会があった。

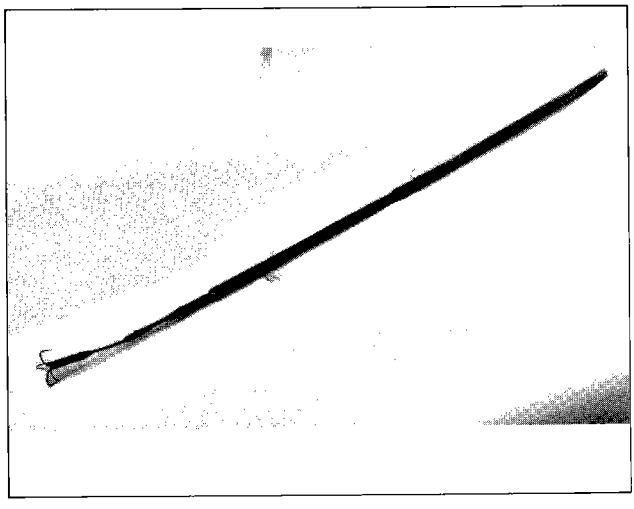
彼は昭和八年頃から父親について川漁を学び、やがて職漁者として自立し、昭和四十二、三年まで川漁を行った多摩川最後の職漁者である。それまでに多摩川の盛衰をつぶさに体験した。昭和初期の清冽な流れと豊富な魚族たち、昭和二十年代後半から清澄にかげりを見せる水質汚濁、その後の高度成長期における流域の変貌と川漁の終焉を見

てきた。

その間、鮎の季節には鮎漁を行い、冬期でもウグイやオイカワなどをとり、漁場は多摩川の丸子から羽村、秋川一帯の水域で、時には相模川中流や鶴見川、入間川、荒川など、神奈川、埼玉の他県にまで行って漁をした。彼が主に行ったのは、鮎の「ひっかき」と「ペラ網漁」、それに「定置刺網漁」で、いずれも技術と経験の要る川漁の専業者が行う漁法である。

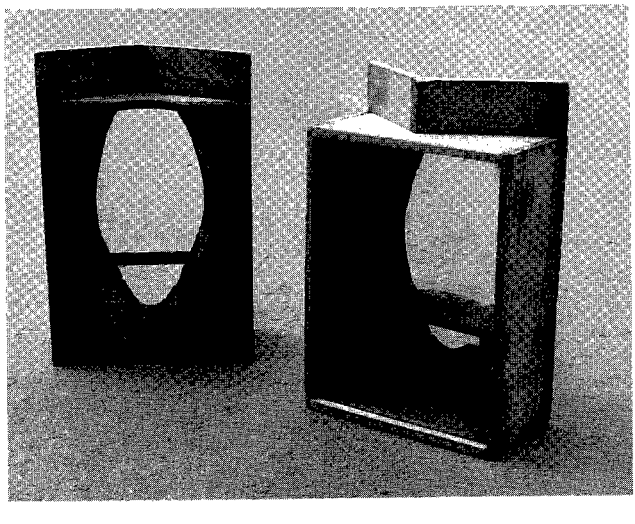
ひっかきは多摩川流域では別名「眼鏡釣り」とも「ひっかけ」、「かき出し」、「かぎばり」とも呼ばれる釣漁法で、「箱眼鏡」を使って流れを泳ぐ鮎を探し、手にした「ひっかき竿」で掛けとる熟練を要する技法である。

ひっかきの漁人は、六尺褌一つの裸で顔面に箱眼鏡をつけ、鮎の通路で待っていると、滔々と流れる青い視界の下手から鮎が上る。箱眼鏡の板ガラスを通して鮎の動静をうかがい、ひっかき竿を静かにくり



ひっかき漁の竿／鈴木由太郎蔵

箱眼鏡をつけ、竿を手にしたひっかき漁のいでたち（漁人は鈴木さんとは別人）



眼鏡／鈴木由太郎蔵

出して、眼前を鮎が通りすぎるのを息をひそめて待つ。鮎は漁人が差し出す竿先を恐れもせず、流れを遡ろうとする。その瞬間、竿の手元を引くと竿先の鋭い鉤が鮎の魚体に刺さる。固定の止め金が外れ道糸が伸びる。突然の事態に掛かり鮎がもがくが、竿先の弾力が動きを吸収して釣り上げられる。こうして瀬や淵で鮎を掛け、多い時には一日二百匹以上の鮎をとる。

真夏の多摩川でひっかきをしていると、時折変な鮎に出会うことがある。

鮎は年魚と云われるように一年でその生涯を終えるが、中には秋の産卵後も生き長らえて越冬し、翌年の夏になり、淵などで若鮎の群れに混って泳いでいる。尺に近い大鮎だが箱眼鏡ごしに見るとその顔は、いかにも老けこんだ表情で越年鮎であることがすぐ判る。

越年鮎は、秋の終りに産卵で疲れた体を、流れのゆるやかな川床の湧水のある寄り場で越冬する。ここは冷たい川水に比べて温かく、越年鮎がたくさん集って冬を越している。昔の多摩川にはこうした湧水のある場所が流れの各地にあった。

年が明けて二月頃になると、産卵で消耗した越年鮎も次第にサビがとれ、重さも前より増えて体力が回復する。食味も産卵後よりは良くなるため、この頃の越年鮎を川魚仲買人は良い値で引き取ってくれる。そうした市況の流れを見て、川漁師は冬期に鮎とりをする。越年鮎が寄る場所に刺網を仕掛け、棒で水面を叩いておどすと、逃げた鮎が刺網にかかる。

多摩川の川漁師は越年鮎を「オジイ」といい、雌鮎でもそのように呼んだ。早春の頃はまだしも、鮎の季節になると、魚体が大きいだけで香味に欠けるオジイの価値は下がり、仲買人や料亭の板前からは全く相手にされない。秋の終りに、他の仲間が産卵に疲れはて、次々と死んで行く中でどうにか生きのび、厳しい冬の間を湧水のある所で過ごす。ふたたび夏が来て、次世代の若鮎に混り清流を泳ぎ回る。だが今では貪欲な人間からも見向きもされず、落魄した姿で生き永らえるオジイは何ともあわれだという。

昔から多摩川の鮎といえば香味にすぐれ、近隣河川に並びないものとされ、多摩川の専売のように云われてきた。だが、長年にわたり多摩川で鮎漁を行い、また近隣河川の相模川や荒川水系の入間川などで鮎とりをしてきた鈴木さんの体験によると、少しく違うようである。

多摩川水系でも場所によって鮎の形状が違い、また他の水系とでは鮎の形から香味まで異なる。多摩川本流の鮎と支流の浅川の鮎とでは、水質、水温が違うためであろうか微妙な差があり、これは鮎ばかりではなく、ウグイやオイカワなどの魚にも違いが見られた。また入間川の鮎と多摩川の鮎は、河川の条件が似ているためか、魚体や香味に違いがない。これに引きかえ相模川の鮎は多摩川のとは相違があり、はっきりと区別がついた。

多摩川は鮎の生息数では相模川を上回ったが、魚体は総じて相模川の方が大きく、香味も多摩川の鮎よりすぐれている。夜間、相模川で鮎の刺網漁をしていて、暗闇で鮎の体に触れただけで、多摩川の鮎とは違う手応えが感じられた。相模川の鮎は肥えており、多摩川のよう

に細っそりとしておらず、香りの強い相模川の鮎は、食味の点でも多摩川産に優っていると云う。鮎は多摩川という固定観念にとらわれた者にとって、多摩川の辺に住み生涯を川漁に生き、しかも他水系での漁場体験を積んだ人の意外とも思える言葉に驚く。全国の鮎河川で、地元の人が「おらの川の鮎が一番」とする所以も、鮮度を貴ぶ生鮎の最上の味はその川の地元でしか味わえないもので、それぞれの流域で、そこを流れる川が育む鮎を第一とすることは、理由なしとしない。

戦後間もなく、鈴木さんは相模川の中流に度々出向いて鮎漁を行った。現在の城山ダム一帯の水域で「ひっかき」と「鮎刺網漁」で鮎をとり、相模川の職漁者との交流もあった。その頃、川漁にかけては多摩川の技術が進んでおり、相模川の職漁者たちに招かれて、城山で「ひっかき」や「張り網」の鮎漁法を指導した。だが水系間の交流も友好的な面だけではなく、入間川での「ペラ網漁」では、地元の職漁者の反目を買い、獲物を投げ捨てて辛うじて漁具を自転車に積んで逃げたこともあり、多摩川の職漁者が他の河川に行くと警戒された。効率的な技法を駆使した操業が、結果として他水系の漁場を荒らすことになり、在地の川漁師から好意的に迎えられることは少なかった。

第四編　清遊の流れ

第一章　紀行記録の清遊と漁

―江戸時代―

江戸時代になると、多摩川を訪れた人たちがこの地での見聞を書き記し、時代が降るにつれてさまざまな記録が増えていった。そうしたものの中から、紀行記録に残された多摩川の漁撈関係について見てみたい。

江戸中期の国学者、賀茂真淵（元禄十年・一六九七～明和六年・一七六九）が明和初年頃多摩川に旅した時のことを『ふぶくろ抄』に記している。

「…おのれ此七日に玉川へいきて、八日の夜ふけて帰り侍り。道のほど珍らしう、かしこの川はよに清き水の浅う早う流れて、河原も清き石のみなれば、京の嵯峨の大井桂などおぼゆめり。むかうに、限りなく長き山の、高からず続きたる。かの玉の横山てふは是なりけり、鮎も多くて。されど、其日はおほやけの召ありとて、あたりへ鵜などは放たさせず、さでなどして、少しのみとり侍り。…」

と記し、真淵が多摩川を訪れた日は、丁度上納鮎をとる日であったと思われ、文中に「鵜飼」と「叉手網漁」の漁法が記されている。

天保五年（一八三四）の『江戸名所図会』にも、

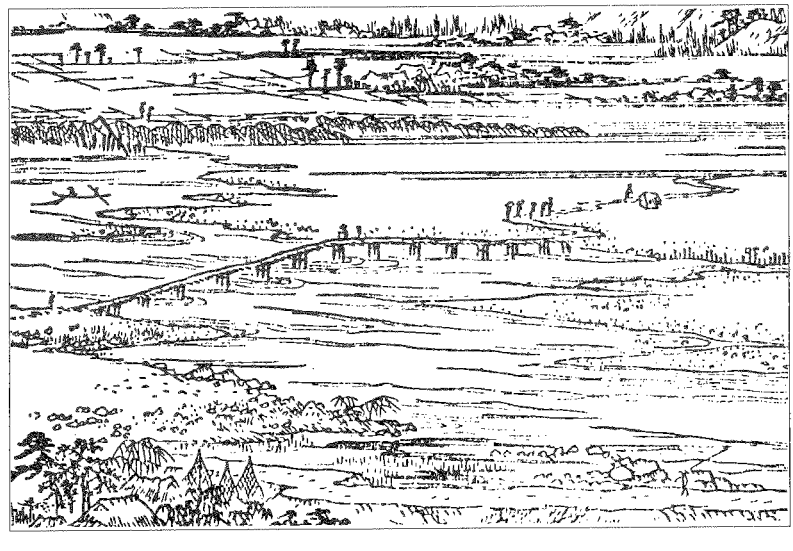
「…多摩川…この河は武蔵の勝槩（しょうがい）にして、日野津より以西は水石の美、奇絶最も多し。以東は平地といえども長流の経る所往々観を改め、亦勝景なきにあらず。鮎を以てこの川の名産とす。故に初夏の頃より晩秋の頃まで、都下の人遠きを厭（いと）はずしてここに来り遊猟せり。…」

と記し、多摩川の清流とそこに産する鮎は、江戸から訪れる人たちにとって、都塵を離れた安らぎの場であったことを伝えている。

徳川将軍も多摩川に度々訪れ、現在の二子玉川付近の瀬田村地先で、大規模な川狩を催している。記録によると宝暦三年（一七五三）の家重より家斉、家慶にいたる八十八年間に六度の御成りがあり、将軍や諸侯の前で「鵜飼」をはじめ、さまざまな鮎漁法を行っている。

天保三年（一八三二）八月、徳川家斉の世子、家慶が瀬田村地先に遊漁し、随従した幕府奥儒者の成島司直が『玉川紀行』で、その模様

田圃地帯を流れる昔の多摩川／『江戸名所図会・多摩川』部分



を述べている。

早朝、物々しい行列で江戸城を出発した家慶の一行は、瀬田地先の多摩川に着いた。

「…河原ハいと広くして色々の石しき並へたることくきようらなる事たとへん方なし、水ハそこのさゝれもかそへ見るへくすミわたり、こゝをハ二子といふ、…」

と、川辺の光景と水の澄んだ美しさを述べ、河原の流れで家慶と近習が叉手網で鮎を掬い、桶に入れようとして逃げられ、

「…それをひろハんとてあたりまよふさまも興あり、…」と、鮎漁に打ち興じる様を記している。

多摩川の青い流れと群れ泳ぐ鮎、そして豊かな自然景観の中で、次期将軍といえどもこの時は日頃の重圧から解放されて、無垢な喜びにひたることができたのであろう。当日、乗船した家慶の前で行われた鮎漁法は、「鵜飼」をはじめ「鵜縄もじとり」、「袋網（跳網か）」、「簗」、「瀬干」、「川倉」それに「叉手掬い」など多彩である。

同じく天保三年の『松の柴折』には、砧から渡しで対岸に渡り、川沿いの茶店で、

「…青き竹の手すりに倚てすゝミとりつつ…漁夫の鮎とる業なと珍らかなれば…」

とくつろぎ、とれたての煮鮎を食し、

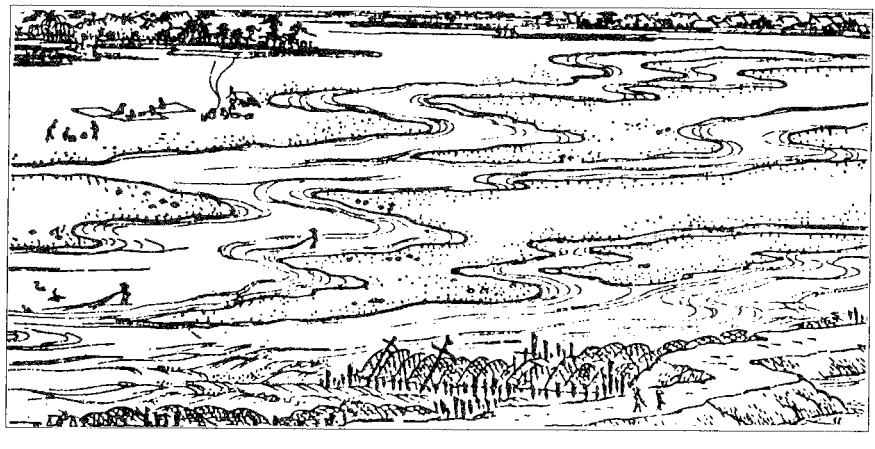
「…味もいとよく名物の聞へ高きもしられぬ…」

と記している。著者は不詳だが、『新編武蔵風土記稿』の編纂にかかわった人物といわれている。

瀬田村は江戸から最も近い多摩川中流の鮎漁の里で、多摩川を訪れる人たちは、渋谷、三軒茶屋を経由する厚木街道をよく利用した。江口忠房の『瀬田之記』（嘉永三年九月・一八五〇）は、瀬田村に旅し、多摩川で清遊した経緯を記している。

清冽な流れに走る鮎を見ながら、「…遠き漁舟はこのはのうかへるかともうたかはれ、近くは二子のわたりまてあゆとる舟もあさやかなり、…」と漁の光景を述べている。さらに舟で「鵜縄漁」を見物し、とれた鮎を「…塩やきにてくふに、其味たとへんかたなし、いよいよ盃とりめくらして酔のすゝみにおのおのたはれことといいつつ楽しけり。…」と、鮎漁を見物した後、鮎の塩焼を肴に友人たちと酒盃を交している。

流れで鵜飼する人、川辺で憩う人、江戸時代ののどかな多摩川／『江戸名所図会・多摩川』部分



滔々と流れる多摩川に船を浮べ、鮎を味わいながら酒を飲み、友と語る。これほどくつろぎに満ちた楽しい遊びが他にあるだろうか。かくして将軍から武士、町人まで、多摩川の里はすがすがしい魅力にあふれた曽遊の地となり、多くの人が訪れた。

天保十三年（一八四二）、山田早苗が著した『玉川泝源日記』は、多摩川の水源まで実地踏査した記録で、当時の流行であった戯作者的、衒学趣味があるにせよ、地誌を織りこんだ紀行記録は、当時を伝える貴重な資料である。著者は多摩川水源の一の瀬まで足を伸し、秋川も訪れている。各地で俳諧の友人と接しながら、川辺ではとれた魚を肴に酒をくみ交し、一時の風流の中で漁のことも述べている。

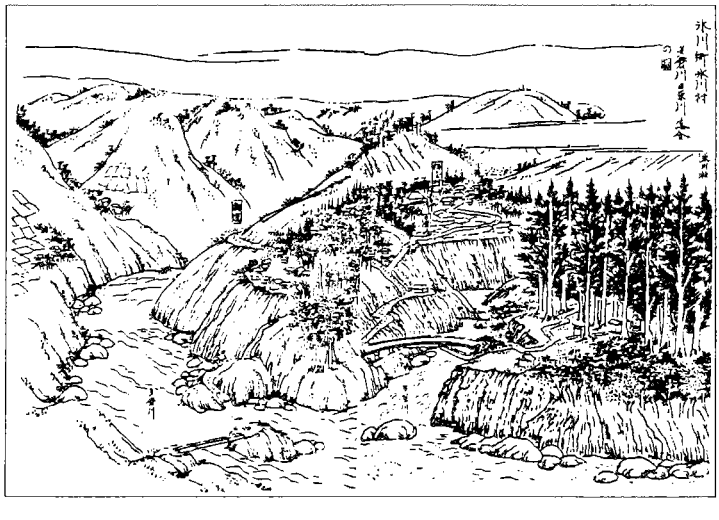
多摩川の水源を踏査した折、丹波川で、「…あるじが網打ちを倶して打出でけるに、山陰なれど頗る打開けて河原の石は玉を敷けりと見渡さるる美景の水滸（みずのほとり）に莚まうく。家より酒肴おこせつ。…漁れる魚をとみに調ぜさせて食ひたる味はひ、言はん方なし。…」と、投網でとった山女魚の味と丹波川の景観について記している。

棚沢では躍鱒淵、別名あらの瀬という場所があり、「玉川のあらの瀬というは、巌石そばだち、たたみたるに、激流せかれて白波打返し逆巻きたてるは…是迄のぼり来つる鮎ものぼりがたしとぞしけるに、この巌洞の淵に鮎の躍れるを漁らせたるは絶品にて、肴に愛でぬはいふもおろかなり。…」と記し、当時はこの様な渓谷まで鮎が遡上し、また鱒もこの急流を上れず、村人が鮎、鱒の「躍り網漁」を行っていた。このあらの瀬は『武蔵名勝図会』に記された棚沢村鳩の巣地先の魚留（なる）瀧と思われ、同書には「鱒跳網漁」の絵が載っている。

羽村では夜川鵜飼を「…闇の夜をも厭はずなん。又、鵜飼男が手縄をさばけるわざも、目もあやなり。…」と鵜飼巧者に感嘆し、府中押立では、「…玉川にて魚簗（やな）打渡して夜すがら漁れるが、桶のうちに鮎あまたあり。…」と夜間漁の盛んな様子を述べている。支流の秋川について、「…ここに秋川といふ大河あり、鮎、ヤマメなどを漁れり。又、海の魚は相模、又江戸より来ると云。…」と五日市界隈の様子を伝えている。

二子玉川では「…漁夫ともなひて玉川に打出でて見渡しけるに、川原は曠豁に沓として、遠山は青うして簇々たり、清流は白うして茫々たり。漁夫は網打てり。やどより酒肴に添えて娘追い来て、さしなべ（燗鍋）とるに羽觴（盃）をとばせ、あやどれば早や網

多摩川と日原川が合流する氷川（現奥多摩町）の景観／『武蔵名勝図会』



に跳ぬる鮎をくみに洗はせて、みさかなにしたる…」と、とれたばかりの鮎を肴に盃を重ねる、まことに悠長な光景を記している。多摩川を旅行中、著者は各地で歌を詠み、鮎と酒を楽しんでいる。青梅に滞在した時も、「…鮎の子持なるを調じて出だしけるに、げに藍より出でて藍より青しとか。玉川の清流にうまれたる鮎とて、味はひ殊に美なり。…」と、鮎の香味をほめたたえている。

山田早苗の記述を幾つか拾い上げたが、当時の多摩川ののどかさがしのばれ、鮎を肴にくつろいだ風情は、時の流れを感じさせる。流れで漁する人たちの素朴でたくましいくらしがあり、その昔、多摩川が秘めた生命力の偉大さを改めて知らされる。

こうした紀行記録の他に、地誌や図絵、絵画などが世に出されて、大都市西郊の清流と名物の鮎は広く世に知られるようになる。

第二章　曽遊の川辺
―明治以後―

多摩川の漁は維新の変革期に一時沈滞するが、鉄道が多摩川の近くまで開通すると、都会から大勢の清遊客が訪れるようになった。それまで静かだった川辺はにわかに華やいで、その後半世紀近くにおよぶ漁撈文化が花開くことになる。

明治二十二年（一八八九）四月に現在の中央線の前身である甲武鉄道の新宿・立川間が開通し、さらに同年八月に立川・八王子間が通じると、多摩川を訪れる人が多くなった。その後、明治四十年（一九〇七）に厚木街道を走る玉川電気鉄道が渋谷・二子玉川間に通じ、さらに大正二年から五年にかけて甲州街道沿いの新宿・府中間に京王電気軌道が敷設され、多摩川への鉄道網が完成した。これらの鉄道の開通で、首都の西端を流れる多摩川は、明治中期頃から昭和の初期にかけて市民の格好の清遊地となり、そうした客を受け入れる茶店や料亭が川沿いの各地に出現した。

鮎漁見物の遊客をのせた屋形舟／『風俗画報』・明治四五年

時の天皇をはじめ、皇族や政府高官、軍の将星や実業家など身分、地位のある人や文人墨客の知名士たちも再三にわたり多摩川での清遊を楽しんだ。豊かな流れと自然に恵まれた田園での憩いは多くの人を引きつけ、多摩川は当代随一の行楽の場として知られるようになった。多摩川は江戸時代より文人曽遊の地であり、多くの人士が訪れ、また当時の新聞や旅行案内にも鵜飼や網漁を見物しながら鮎料理を味わう紹介記事が見え、清遊の楽しさを喧伝している。

明治二十五年（一八九二）、俳人正岡子規（一八六七～一九〇二）が多摩川に遊び、『高尾紀行』に、

「…小山を廻りて寺の門に至る。石壇を上れば堂宇あり。後の岡には處々亭を設く。玉川は眼の下に流れ武蔵野は雲の際に廣がる。

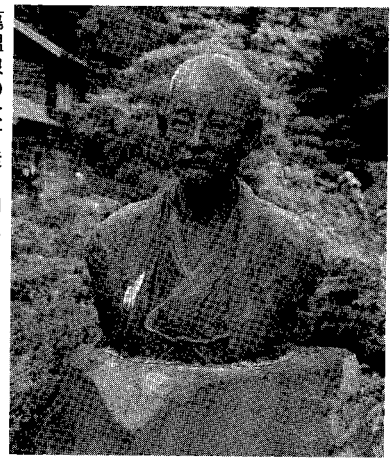
玉川の一筋ひかる冬野かな　　鳴雪

寺を下りて玉川のほとりに出て一の宮の渡を渡る。

鮎死で瀬のほそりけり冬の川…」

と冬の多摩川の光景を記している。

明治、大正期の紀行作家として名をはせた大町桂月（一八六九～一九二五）が、大正五年に日野の鮎料亭、玉川亭に止宿し鮎漁を楽しんでいる。『秩父の山水』の中の「日野の鮎漁」と題する文で、「日

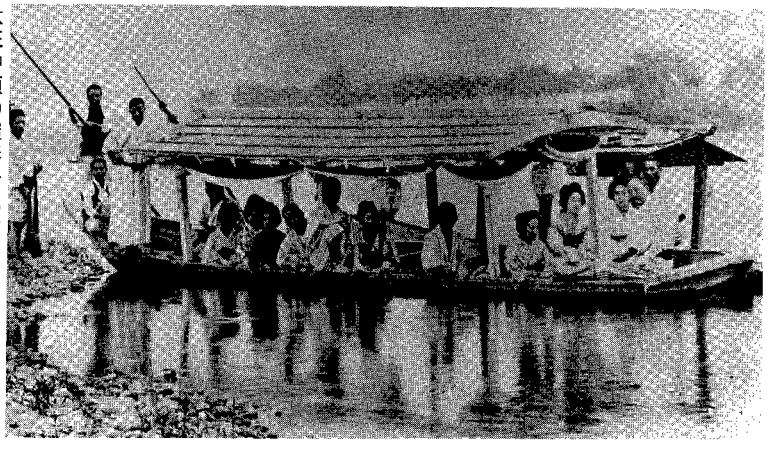

蔦温泉の大町桂月胸像

野の渡を渡り、多摩川畔の玉川亭に投じ、酒を命じて共に飲む。…」として翌日、

「…用意とゝのへりと云うに、出でて船に上る。一行の外、幾組の客あり。我舟のみにあらず、他の舟も然り。舟凡そ十艘、いづれもみな舟夫押して上るかとすれば、流れに任せて下し、三四町の間幾度となく上下す。鵜を使ふ男あり。二羽の鵜を使ひながら上り又下る。鮎は調理せられて膳に上る。酒も出づ。飲食しながら、見物し、兼ねて涼を取る。なほ水に泳ぐ。身を没するまでの深さなければ、水泳を知らぬものとても、危険なることなし。深き處は乳に及ぶ。泳ぎては飲み、飲みては泳ぐ。盃は一行の中に飛ぶのみならず、他の客に向かって飛び、さらに舟と舟との間にも飛ぶ。…」

と、鵜飼と鮎料理と酒の多摩川清遊の模様を記している。桂月は名にしおう酒豪、生来の酒好きで、十和田湖近くの蔦温泉で生涯を終えるまで、酒にひたりつづけた当代随一の紀行作家であった。

時代は降り、滝井孝作や佐藤惣之助の作品にも、多摩川の魚とりを題材にした作品が見られる。また、わが国近代登山の黎明期に活躍した小島烏水、田部重治の紀行文の中に、明治時代の奥多摩の渓谷で、山女魚釣りをしている土地の人のことが書かれている。


大正中頃の屋形舟風景／『調布今昔写真集』より

一方、多摩川の清遊に訪れた貴顕も多く、明治天皇をはじめ皇后、皇太子、皇族方の曽遊地であった。

明治天皇は、多摩丘陵の連行寺村で度々兎狩に行幸されたが、明治十四年（一八七七）六月二日に、連行寺地先の多摩川で鮎漁の天覧があり、『明治天皇記』には当時の模様を次のように記している。

「二日武蔵国北多摩郡府中附近に遠乗を行はせられんとし、午前八時、嘉彰親王…及び宮内卿…侍従長…御練兵御用掛…並びに近衛参謀長…以下近衛将校十三人を随へて発したまふ、巡査長二人並行前駆し、次に近衛騎兵・御旗・近衛騎兵・近衛士官序列し、宸儀（しんぎ）〔天皇の玉体〕、次に侍従・親王・宮内卿補・宮内書記官等順次扈（こ）従し、次に近衛士官、同下士、次に馭者、而して騎兵・巡査長殿（しんがり）す…上高井戸村に於て神奈川県令代理少書記官

磯貝静蔵奉迎す、布田を経て正午前府中に著御、行在所（田中三四郎の家）に入りたまふ其道程約七里、午後一時、鮎を多摩川に捕ふるの状を覧たまはんがため、騎馬にて連光寺河原に幸し、天幕内なる玉座に著きたまふ、…二時前岸の丘上に鼓声轟くや、漁夫各々其業に就く、先づ撥網三組（一組五人）に続ぎ鵜飼二組（一組二羽・三人）御覧所の前を漁して過ぎ、次に漁舟二隻網を投じて天覧に供す、又其の上流下流に於て撥網・投網を用ゐ、或は鵜を使ひて鮎を捕ふ、又府中駅民の河原に於て烟火を放揚するあり、三時行厨・葡萄酒及び捕獲の鮎を供進せしめたまひ、親王及び供奉の臣並びに出張の県官・郡吏・戸長等に酒饌・焼鮎を賜ふ、馬丁、漁夫等亦酒を賜はる、尋いで再び猟せしめ、六時三十分行在所に還御…、是の日奉仕の漁夫百余人、獲る所の鮎約百五十籠、直に皇太后・皇后に各々十籠を贈進したまひ…其他御用奉仕の村民等に酒肴料を賜ふ、…」

と、当日の天覧の川狩の様子を記している。

この時陛下は、

玉川のはやせの水の清ければ
さばしる鮎の数もみえけり

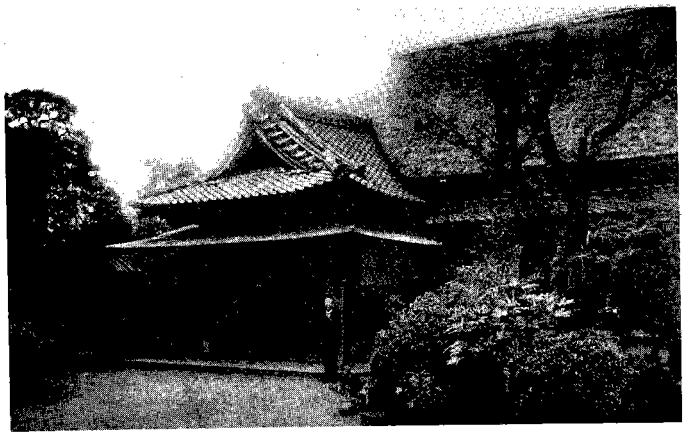
と、清冽な流れに泳ぐ鮎を詠まれた。

さらに同月の十三日に、侍従を連光寺村に遣わして鮎をとらえさせ、七月九日、十日、十月二十八日には再度日野や府中に侍従を遣わし、多摩川の鮎狩を行わせたとある。

明治天皇は京都におられる頃、琵琶湖産のヒガイを好まれたので、魚偏に皇の字をあてて鰉（ひがい）と読むようになり、鮎も好んでお召し上りになった。

明治十八年九月二十二日には、昭憲皇后が鮎漁御覧のため府中に行啓され、『武蔵野叢誌』二十五号に、「…府中桑田佑賢の家に御少憩の

連光寺の丘から多摩川の眺望／写真・府中市提供



明治天皇行在所・英照皇太后御休泊所／連光寺宮澤邸・「多摩聖跡記念館絵葉書」

後、板輿にて多摩川河畔に抵らせたまふ、香魚を獲ること約三千…河水を堰貯して池を作り、生魚を放ちて御覧に供ふ、午後小艇に賀して河中を逍遙し、山水の景を賞せらる…天晴気朗にして初秋の気持に清爽…午後六時過府中に還御、…」

とあり、また明治二十年十月三日には、英照皇太后が鮎漁を御覧に連行寺村に行啓されている。

大正時代にも多摩川の清遊が行われ、大正三年（一九一四）に皇太子時代の昭和天皇と秩父宮が羽村堰下に川遊びに訪れ、伏見宮、閑院宮らの皇族方も、多摩川中流での清遊を度々楽しまれている。皇族の他に西園寺公望や西郷従道、板垣退助などの政府高官、また東郷平八郎を含む海軍省関係者たちも好んで多摩川を訪れた。一方、当時の新興資本家や富裕な商人の来訪も絶え間なく、この頃珍しかった自動車で来る人もおり、多摩川は天皇、皇族をはじめ、貴顕紳士、文人墨客の曽遊の地であった。

鉄道の開通以来、夏になると都会から大勢の人が多摩川を訪れた。大町桂月が『日野の鵜飼』の冒頭で、「花の都も夏は釜の中…」と評したように、東京の暑さを避ける最も近い所は、多摩川の川辺であった。山下重民の『多摩川の鮎漁』で、明治三十年頃の多摩川の記述がある。

「…向が岡は横に遠く連り、所々の木の間に茅屋の見え隠れするなど、所謂活パノラマなるべし。朗晴の日には富士山を望むを得るは、更に奇なり。且つ河原濶ければ、水を渡りて吹き来る風は、絶えず人の袂をなぶる。「オヽ涼しいこと」といふ言は、先づ誰の口より漏るゝも愛嬌あり。川は清くして浅ければ、少年は飛入りて、帽子の影を浸しながら、見物するが常なり。…」

清遊客を乗せた屋形舟が流れを降る／『風俗画報』・明治四五年

とあり、首都近郊で避暑に格好の多摩川が流れ、こうした清涼の気に満ちた光景が、流れの随所に見られた。緑に囲まれた田園地帯に清冽な流れがあり、都会人士の涼みや川遊びによく、川は豊かに魚を育みつづけた。清遊の流れは、多摩川の生命力が旺盛であった昭和初期までつづくのである。

第三章　多摩川の鮎料亭

一、林泉の鮎

多摩川本流からは少し外れるが、羽村堰より導水した玉川上水の分流に烏山用水（烏山川）があり、江戸時代に甲州街道と交わる辺に「豊倉」という料亭があった。文化十年（一八一三）頃、豊倉に立ち寄った津田大浄の紀行文『遊歴雑記』の中で「烏山村の酒樓豊倉の林泉の鮎」と題する紀行文があり、当時の料亭のたたずまいと泉水に泳ぐ鮎について述べた記録がある。

「…此処に豊倉平吉といえる酒樓あり、間口の大きさ数十間、奥行深き事四拾余間に過たり、家作広く、好み風流に面白く、殊に林泉甚広く、彼坂下へ迸り落る清流を引て泉水とし、泉水亦溶（うね）りて尤（もっとも）広し、中に数千の鮎生じ、ちら〳〵と逆流を登りてあそぶ、眼下に見る事めづらしとやいはん、一品といふべし、…」と、豊倉の風趣ある構えと泉水に群れ泳ぐ鮎について記し、「…鮎の用意ありやといえば、いかにも貯置たりとて、六七寸もあるべき年魚の甘煮にせしを拾五六出せり、…」と鮎料理を食し、「…此豊倉が亭に憩ひて飲宴せざるはなし、依て賓客の絶間なく繁昌す、…」と、甲州街道で人気のある料亭について述べている。

豊倉があった場所は現在の世田谷区烏山町内で、当時とは全く景観が変ってしまい、今では住宅が立ち並ぶ市街地になったが、一八〇年ほど前は、玉川上水の分流である烏山用水が農村を貫いて流れ、水路の各地に水車がめぐる、甲州街道沿いの静かな田園地帯であった。この用水に鮎が生息し、その水を引いた料亭の林泉にも鮎が群れ泳ぐという、今日では想像もつかないようなのどかな光景であり、その頃の烏山村は、水と緑の豊かな自然に恵まれた江戸の郊外であった。そうした農村地帯を通じる甲州街道を往還する旅人たちが、名物料亭の水辺で鮎料理を味わいながら、一時の安らぎを楽しんでいたのである。

二、鉄道の開通と鮎料亭

甲武鉄道が通じると、明治二十年代の中頃には多摩川の清遊に訪れる人も多くなり、川沿いの各地に川魚料亭が開業するようになる。江戸末期には二子の「亀屋」、府中の「魚重」など、旅宿を兼ねた料亭はわずか数軒にすぎなかったが、明治三十年代になると、川魚料亭の数も増えて都会からの客で繁昌した。

料亭では客が鮎漁を見物し、とれた鮎の料理を楽しんだ。こうしたくつろぎの宿が多摩川沿いにあり、記録に残るだけでも、

浅川―鮫陵源、藤田屋
立川・日野―丸芝館、玉川亭、立川亭
府中―魚重、魚元
調布―井上亭、塚善、富士見亭、玉華樓
二子―亀屋、柳屋、喜久屋、玉泉亭、日の家、中島や、富玉軒、見

晴や、喜月樓
菅　—玉善

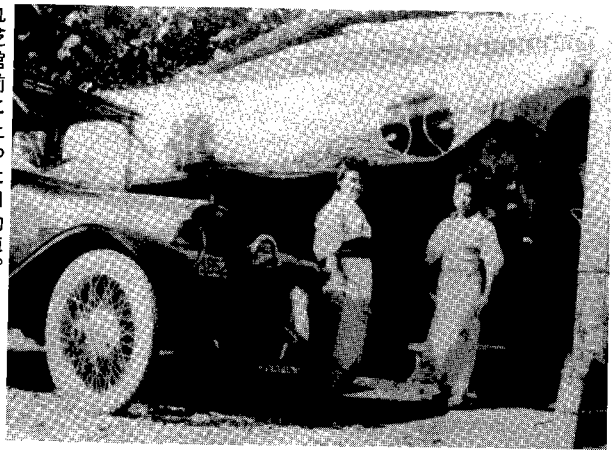
などであるが、記録に残されない料亭も多い。

これらの鮎料亭では屋形船や伝馬船を揃え、専用の鵜使いをかかえて鵜飼を見せる料亭もあった。料亭に客が到着すると観迎の花火を打ち上げる。これが川で鮎漁をしている川漁師への合図となり、宿にとれたての鮎がとどき、鵜使いは鵜飼の準備にとりかかる。多摩の川沿いに花火がさかんに上る日は鮎漁も活況を呈し、多摩川は華やいだ雰囲気がもり上る。その頃の鮎料亭の幾つかを述べて見る。

三、丸芝館

立川で最も早く開業した鮎料亭で、本館と仮小屋があり、本館は現在の立川市錦町五丁目に、仮小屋は段丘下の多摩川河畔に設けられていた。仮小屋の方は増水時に度々流出するので、簡単な造りになっていた。

客が着くと上の本館で浴衣に着がえ、下の仮小屋まで下り、用意の屋形船にのりこむ。客は船から鵜飼見物をしながら、鮎料理を味わった。



丸芝館前に止った自動車。当時は大変珍しかった／大正一二年

四、玉川亭

丸芝館の繁昌ぶりに刺激されて、この辺りを仕切っていた貸元の天野要三親分がはじめた店で、日野橋上流五百米ほどの多摩川右岸沿いにあった。屋号や出入り商人の文字を染めぬいた大幔幕を張りめぐらした当時の店の写真が残っているが、明治後期から大正にかけて客入りも良く繁昌していた。

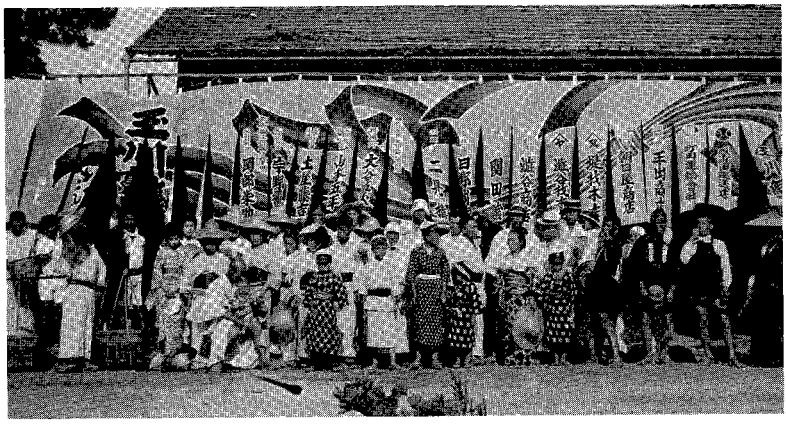
丸芝館と同様に、玉川亭でも専任の鵜使いや川漁師をかかえていて、客の到来を花火で知らせていた。鵜飼には日よけのついた屋形船をくり出し、客は鮎料理を味わいながら鵜飼見物をするが、こうした遊興は当時でも有産階級の人たちであった。立川、日野を度々訪れた知名な人に東伏見宮、西園寺公望、東郷平八郎などの名が知られ、政界、財界、官界のそうそうたる人たちが多摩川の鮎漁に訪れた。玉川亭では海軍省関係者が多かったといわれる。文人大町桂

立川地先の多摩川で鵜飼見物の屋形舟／丸芝館

月も玉川亭に止宿し、『日野の鮎漁』という紀行文に、鵜飼と船中の酒宴について記している。

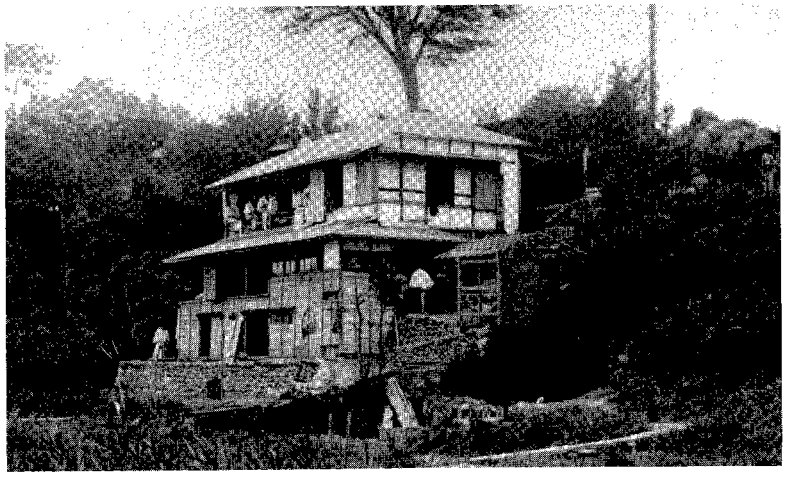
船での鵜飼見物のほかに、玉川亭では川原で客に鮎料理を食べさせた。川原に建てた葭簀張りの小屋で、客は川風に当りながら鮎料理を味わうのである。玉川亭の元女将、天野タツさんの話によると、その頃の鮎料理は、鮎の塩焼、魚田（田楽）、酢の物、洗い、天婦羅かフライ、それにウルカの石焼などであった。中でもウルカの石焼は玉川亭の特別メニューであった。ウルカを入れた丼に、炭火でよく焼いた小石を入れると、ジュッっという音とともに香ばしい匂いが漂い、客はそれを味わうが、大変に好評であった。

玉川亭で大正十年頃の川遊び料が、船代と鮎料理で一人二円五〇銭から三円位で、当時の物価水準としてはかなりの高額で、庶民が安易に利用できるものではなかった。こうした都会から客がもたらす現金収入が、地域を潤したのも事実で、やがて鮎もとれなくなり、玉川亭も昭和十二年で廃業する。



当時の玉川亭

玉川亭に傭われている鵜使い（中央）と鵜先と鵜の一行／大正初年


立川亭外観／当時の写真絵葉書より

五、立川亭

丸芝館、玉川亭より後発の鮎料亭で、開店は明治三十八年頃といわれる。立川の貝殻坂付近にあり、客は富士山の眺望を楽しみながら鮎料理を味わえる景勝地にあったが、明治末期に廃業している。

六、府中・調布の鮎料亭

府中あたりでは、当初江戸時代からの川魚料亭「魚重」一軒だけであったが、京王電車の開通によって大勢の人が訪れるようになり、多摩川沿いの府中や調布でも鮎料亭が増えた。ここでも客が鵜飼見物をしながら鮎を食すが、鵜飼の他に投網や跳網などの鮎漁を客に見せている。

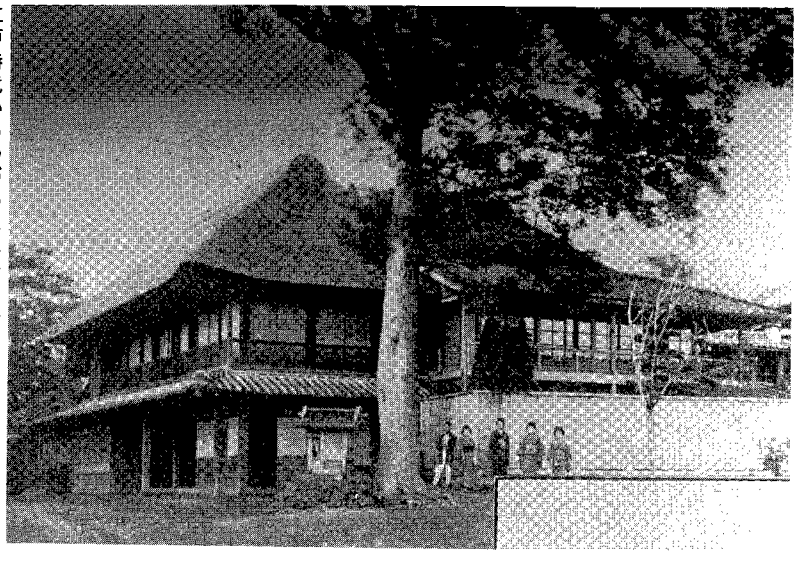
当時の写真を見ると、屋形船に土地の芸者をはべらせた旦那衆の姿があり、府中、調布にかぎらず、時にはこうしたお大尽遊びが多摩川各地の料亭で行われていた。

七、亀屋

大山街道の二子渡し近くにあった江戸時代からの旅宿を兼ねた由緒ある鮎料亭で、多摩川の鮎漁に訪れた当時の貴顕、文人たちに利用された。漢学者、三島中州の『遊玉川記』（明治九年・一八七六）に「…一茅樓岸に臨みて欹つ。…亀亭と言ふ。主人酒食を具え、遊客を待つ。」と記され、明治四十五年七月の『風俗画報』にも、

「…多摩川の香魚狩りと云えば、二子渡の亀屋を連想せぬものはあらざるなり。そも亀屋は多摩川香魚狩りの草分けにして。往時徳川時代より近くば恐れ多くも今上陛下並に東宮殿下御初年に渡らせらるる時。香魚狩の御案内申上げてこよなき光栄を辱ふしたる舊家なり。瀟洒たる樓下を流るゝ多摩の清流は白布を晒したるより白く又清冽なり。…」

と、明治天皇と皇太子時代の大正天皇が多摩川の鮎狩りに亀屋を利用され、後に皇后陛下、伏見宮が滞在されている。



江戸時代からつづいた二子の料亭旅館「亀屋」。将軍や大名、皇族、文人墨客が訪れた老舗／『風俗画報』明治四五年

江戸時代に十一代将軍徳川家斉も、多摩川川狩りの際にたびたび亀屋を訪れている。また、島津、毛利、上杉の諸侯も、鮎の季節になると亀屋に滞在して鮎漁を楽しんだ。明治四十五年頃の亀屋の写真を見ると、中門造りの二階屋ながら重厚なたたずまいの楼閣は、丸子で由緒ある宿所として、当時の貴人が川遊びの都度訪れた所であった。

明治二十九年、国木田独歩は『忘れえぬ人々』を発表し、旅籠宿「亀屋」の主人と宿のたたずまいを記しているが、この作品の亀屋は同じ厚木街道沿いの溝ノ口にあった同名の宿屋で、二子渡しの亀屋とは別である。だが作品にこそ書かなかったが、独歩は二子の亀屋にも行っている。田山花袋が『二子の半日』という作品の中で、「亀屋は一番初めは国木田と一緒に行ったと覚えている…」と述べ、『東京の近郊』の中で花袋は、

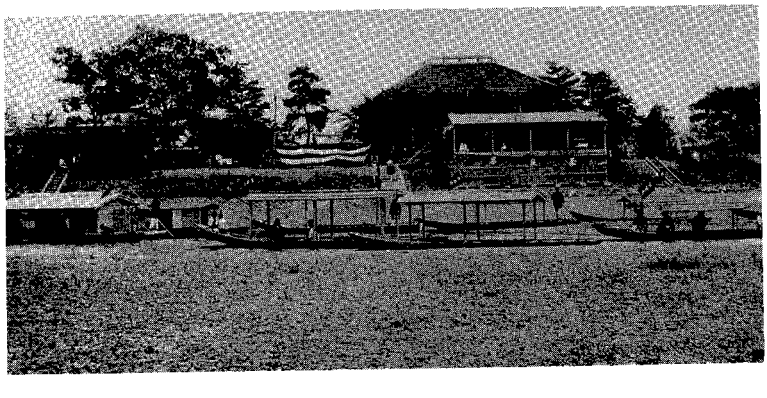
「…二子の亀屋は私は好きだ。私は其処に少なくとも四、五度は行った。…川の眺めはそう大してすぐれたというほどでもないけれど、何処か家のつくりや、古風なところや、高い二階や、取り廻した欄干や、門のようになった入口や、家の周囲を取り巻いた欅(けやき)や、欅の緑葉を透してさし込んで来る日影や、そういうものが私の心に静かに沁み込んで来るように思われた。」と記している。

大正時代には花袋の他に里見弴、岡本一平、久米正雄、佐佐木茂索、宇野浩二、中村武羅夫、吉井勇、葛西善蔵、久保田万太郎など、そうそうたる文士が亀屋を訪れている。

八、喜月楼、柳屋、玉泉亭

明治四十五年頃の二子の鮎料亭について、『風俗画報』が伝えている。

多摩川河畔にあり、眺望のよい喜月楼／『風俗画報』明治四五年



玉泉亭全景／『風俗画報』明治四五年

「…双子渡に対し兵庫島の渡を控へたる瀬田河原の上に構へたる高楼は、昨年頃より開業したる喜月楼なり。庭園広くして常磐の松の緑ゆかしく、茲は瀬に砕けて白沫を飛ばす多摩の急流椽先を流れて、香魚水底に遊ぶも見え透くほど清らかなり。川辺に釣糸を垂るる人、網を投ずる漁夫、軽舟に棹さして流れを追ふて下るもあり、或は遡り行くもあり。……其他柳屋といひ、玉泉亭といひ何れも眺望に富み、一日に清遊を試むるには又なき所なり。」と述べ、

「…二子渡は年々賑ふ様になりしは、果して何に因るや。他なし水の清らかなると玉川電車の便利あり、且は遠近の眺望に富るが為なり。…」と鉄道の便利さと二子界隈の景観を喧伝している。都心から最も近く、交通の便に恵まれた二子、溝の口は、昭和十年頃までは多摩川沿いで最も賑やいだ遊楽地となった。やがて鮎漁の衰微とともに、川面に映る紅灯の火も次第に消えて行ったが、第二次大戦前頃までは、この辺り一帯にまだ華やかな雰囲気が残っていた。

明治二十年代以降、鉄道の開通で多摩川沿いの各地に鮎料亭が出現した。川辺はそれまでにない華やぎを見せたが、昭和に入ると川の鮎が徐々に少なくなり、多摩川を訪れる客足が遠のいていった。最盛期にはあれほど多くの客が都会から押し寄せた鮎料亭も次々と店を閉じ、やがて戦時下のきびしい時代をむかえる。鮎漁を客に見せながら鮎料理を供し、川辺で笑いさざめいた多摩川の清遊の時代は終り、以後、多摩川から永遠にその姿を消してしまう。

第四章　遊漁の流れ

その昔、豊富な魚族を育んだ多摩川は、職漁の流れであるとともに遊漁の川でもあった。江戸時代後期の『江戸名所図会』や『調布玉川絵図』などの絵の中に、遊漁者と思われる人物が流れで釣りや網漁をしている光景が描かれており、流域の住民たちが余暇に漁を楽しんでいた。

明治の中頃、多摩川まで鉄道が通じると、東京から清遊客が訪れるようになった。流れで鵜飼や網漁などの鮎とりの様を見物し、とれた鮎を味わう観光旅行で、自ら流れで漁を楽しむ人たちの出現は、大正以降になる。

大正時代になって、都心から多摩川沿いまで鉄道網が整備されると、社会的、経済的にもゆとりのある釣り愛好者たちが、首都西郊の流れを訪れ、鮎の季節になると、多摩川は釣り人で賑わうようになった。毎年六月一日の鮎解禁には、河原に待機した太公望が、竿を林立させる鮎つり光景が新聞で報道され、都会人士たちの話題を集めた。

鮎解禁当初は毛鉤での「ドブ釣り」が盛んで、やがて縄張り鮎をねらう「友釣り」から鮎を掛けとる「さくり」、「ころがし」など、遊漁者は鮎の季節中、清流の漁を楽しんだ。

釣り好きの文人、滝井孝作（一八九四～一九八四）の作品、『魚釣り』の中でさくりについて記している。

「…奥多摩は九月はじめの落鮎をサクリという掛けづりでとるのが、大鮎だから面白い。ぼくも五、六十匁の鮎を初めて釣った。ぼくの伴れは百匁余の尺鮎を御嶽橋の下で釣った。

鮎つりは玄人になると大物をねらうようになる。…」

と、多摩川での釣り体験を述べている。さくりは江戸時代の記録にも見られる古典的な鮎掛けの技法であるが、昭和十年頃からさくりに似た「ころがし」が普及したため廃絶した。

昭和初期の多摩川／『グラフせたがや・No.4』より

丸子橋下の釣り風景／昭和十一年

鮎の川として名をはせた多摩川も、今では昔日の面影をとどめないが、かつては大量の稚鮎が遡上した。流れを遮断する幾つもの堰が設けられた昭和二十年代でも、東京湾からの稚鮎の遡上は眼を見張るものがあり、昭和二十七年四月上旬、調布防潮堰の魚道で、筆者は稚鮎の大量遡上を見た。

河口から遡上する稚鮎の大群が堰にはばまれ、上り口を求めて左岸脇の魚道の下で黒い塊になっている。小さな魚体の一匹一匹が懸命に魚道の階段を上ろうとするが、流勢に抗しきれず落下する。中には上の階にたどりつき、果敢にも次の跳躍をこころみるのもいる。幾段にも仕切られた水勢の中から跳ねる小魚がキラキラと光る。水面下では小さな無数のドラマがくりひろげられている。

その頃の多摩川の生命力は、まだ健在であった。同じ堰の下には産卵で遡上するマルタの群れが遊戯し、それを掛け釣りする遊漁者たちで賑わっていたが、白魚漁は前年で姿を消していた。

かつて鮎の川として知られた多摩川も、川砂利の大量採取や河道の整備、堰の多設、加えて取水による流水量の減少と水質汚濁の進行で荒廃した。流れに生きる魚も激減し、鮎も河口から遡上しなくなった。現在の多摩川は放流によって辛うじて鮎漁が行われ、昔日の生気は川面から消えた。

多摩川が今より自然な姿で流れていた頃、鮎に限らず他の魚もたくさん生息し、流域の人たちや東京方面からの遊漁者が漁を楽しんだ。老いも若きも遊漁具を携えて、清流に遊ぶ心のときめきと漁果への期待に胸をはずませながら、多摩川を訪れた。とくに少年にとって、川は恰好の遊び場であり、開放感あふれる別世界であった。

その頃の少年たちは、水温む春から秋までの間、淵や瀬がつづく流れで泳ぎ、箱眼鏡で鰍を探して箒で突きとり、また篠竹を竿に按摩釣りでハヤ（ウグイ）を釣った。『魚釣り』の中で、滝井孝作は多摩川の按摩釣りの模様をユーモラスに記している。

「…ようやく按摩釣りをはじめた。浮きも錘りもない一本糸の釣針にかげろうの幼虫を餌さにつけて、川の瀬に流してやり竿の先端は水に入れて手元で差し出し引き戻し大きく釣針をうごかしながら按摩の歩く恰好で膝位瀬に浸りつつ川しもに向って行くやり方だ。ぼくは按摩というからはじめ正直に竿の先を川底へ突いたのですぐウラ竿をへし折った。先端は水に浸けたまま手元で突き出し引き戻したりするのだといわれてやり直した。…」

年令を問わず誰もが楽しめる按摩釣り風景は、昭和三十年代頃まで

小物釣りの少年／二子・兵庫島・昭和四三年

は多摩川中流の瀬でよく見かけたが、水質汚濁で川底が荒廃し、釣り餌の川虫もいなくなって、流域の少年たちが行った素朴な釣漁法も、今では滅多に見られない。

流域の漁

時がゆるやかに流れ、娯楽も限られていた当時の単調なくらしの中で、いつでも川遊びができる多摩川は魅力ある存在で、流域の住人たちは川に通い、さまざまな漁法で魚とりをした。楽しむための漁や菜料の魚をとる人など、流れで漁る人の姿は絶えることがなく、多摩川の伝統漁法はこれらの人たちによって受け継がれてきた。

多摩川の本、支流で「筌」・「網」・「釣」・「刺突」・「雑」など、さまざまな漁法の多くは職漁者以外の流域住民によって行われた。そうした遊漁的な漁法の幾つかを列記して見る。

筌漁法

○雑魚筌＝汎用性に富む筌（雑魚筌）を用い、多摩川本、支流や水路などの広い水域で、魚とりに行われた漁法。また筌をさまざまな漁法の魚捕採用に使う。

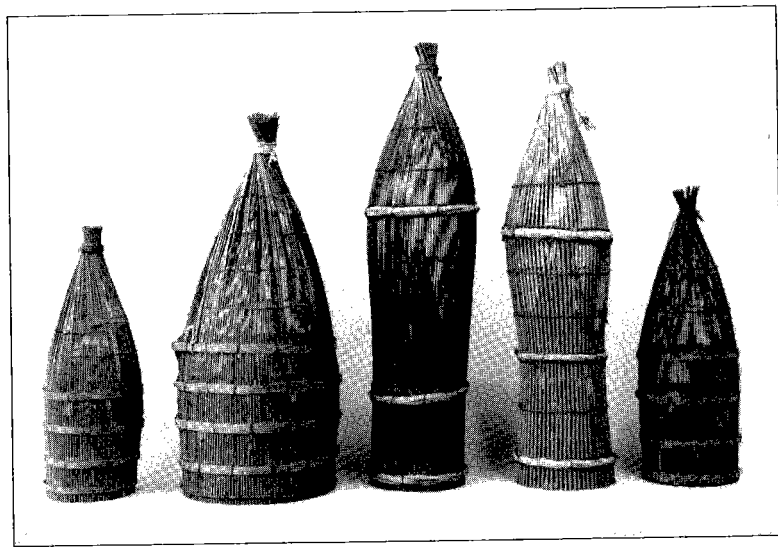
○天王筌・桶筌＝主にウグイとりの漁法で、多摩川中流域の住民が行った。

○山女魚筌＝多摩川上流で秋の降りヤマメをとる筌漁法。

○鰻　筌＝上流から下流、支流や水路など広い水域で行われた鰻とりの漁法。

○泥鰌筌＝水田地帯の水路でドジョウをとる筌漁法。自家の菜料に少年から老人まで行った。

○ビン筌＝ガラス製の筌で小魚（小ブナ、タナゴ、モツゴなど）とりに流域の少年が行った遊び漁。



多摩川中流域の雑魚筌／立川市教育委員会蔵

網漁法

○投　網＝鮎をはじめコイ、ヤマメ、ウグイ、オイカワなどを対象に、多摩川では最も盛んに行われた網漁法。

○寄せ網・跳網＝十数名で行う共同漁で、流域の農民たちが祭事を兼ねて行うことが多い。

○掬　い＝網や「ぶったい」を用いた漁法で、さまざまな掬い具によ

り、多摩川の本、支流や細流などの広い水域で行われた。

○四つ手網＝大型の四つ手網を用いる漁は、主に職漁者が行ったが、小型四つ手網は、流域の少年たちが小魚とりに行った遊び漁。

大正初期の投網漁／『調布今昔写真集』より

釣漁法

○鮎釣り＝「ドブ釣り」、「友釣り」、「さくり」、「ころがし」など、鮎の季節に流域住民が行った。遊漁で最も盛んな釣漁法。

○渓流釣り＝多摩川上流、源流でヤマメ、イワナを餌、毛鉤で釣る。

○置鉤・流し鉤＝夕方、流れに仕掛けておいて、翌朝鉤にかかった魚をとり上げる釣漁法で、少年から老人までが行っていた。

○毛鉤釣り＝疑似鉤を用いた釣漁法で、流域の人たちに人気があった遊び漁。「打ち釣り」、「瀬釣り」などがある。

○按摩釣り＝瀬に立ちこんでウグイ、オイカワを釣る簡単な釣漁法、主に流域の少年たちが行った。

○ハヤ釣り＝ウグイを対象にした釣漁法で、「浮子釣り」、「脈釣り」、「籠釣り」、「ふっとばし」など、さまざまな技法がある。

○鯰釣り＝水田地帯の用水路や砂利穴などで、主に少年たちが行ったナマズ釣り、「ポカン釣り」、「ぶっこみ釣り」がある。

○小物釣り＝オイカワ、タナゴ、小ブナ、モツゴ、モロコなどの小魚釣りで、少年から老人まで、巾広い年令層が行った。

ひっかき漁／昭和十年代・写真・立川市教育委員会提供

刺突漁法

○火振り＝カンテラや松明、カーバイドランプなどの照明具を使う夜間の刺突漁。

○鰍突き＝箱眼鏡で川底のカジカを探し籍で突く。流域の少年たちが盛んに行った。

○鉄砲銛＝水中眼鏡をつけ、自製の鉄砲銛でコイやフナ、ナマズ、ウグイなどを突く。流域の少年が夏に行った。

雑漁法

○手摑み＝素手で水中の魚を摑みとる原始的な漁法。少年を含む多摩川流域の人たちは、ヤマメやウグイ、ウナギ、アユ、コイ、フナ、ナマズ、ギバチなど、さまざまな魚をとっていた。

○瀬干し、かい掘り＝流れを堰止めて水を干し、そこの魚を総どりする。多摩川の本、支流や水田地帯の用水路で行われた。

○石倉＝川岸近くの流れに石を積み上げて放置し、中に入った魚をとる。

○ぶったい＝竹簀で作った掬い具で、細流や用水路などの小魚をとった。

○泥鰌掘り＝晩秋から冬にかけて、水田や用水路の泥底に冬眠中のドジョウを掘り上げる。

その昔、多摩川の本、支流や水田地帯の用水路には、さまざまな魚たちがたくさん生息し、流域の人たちは昔ながらの漁法で魚とりをしていた。こうした漁は遊びのために、或いは貴重な蛋白源を得るためであったが、いずれにせよ、豊かな流れは流域の日常生活を潤してきた。だが流域のくらしと川との濃密な関係は、多摩川の生命力が衰えはじめると徐々に薄れ、昭和三十年後半以降になると、昔のように流れで漁する流域の人たちの姿は、次第に見られなくなった。

稚魚筌を作る

第五編　多摩川の漁撈画

絵画、図絵に描かれた
多摩川の漁撈

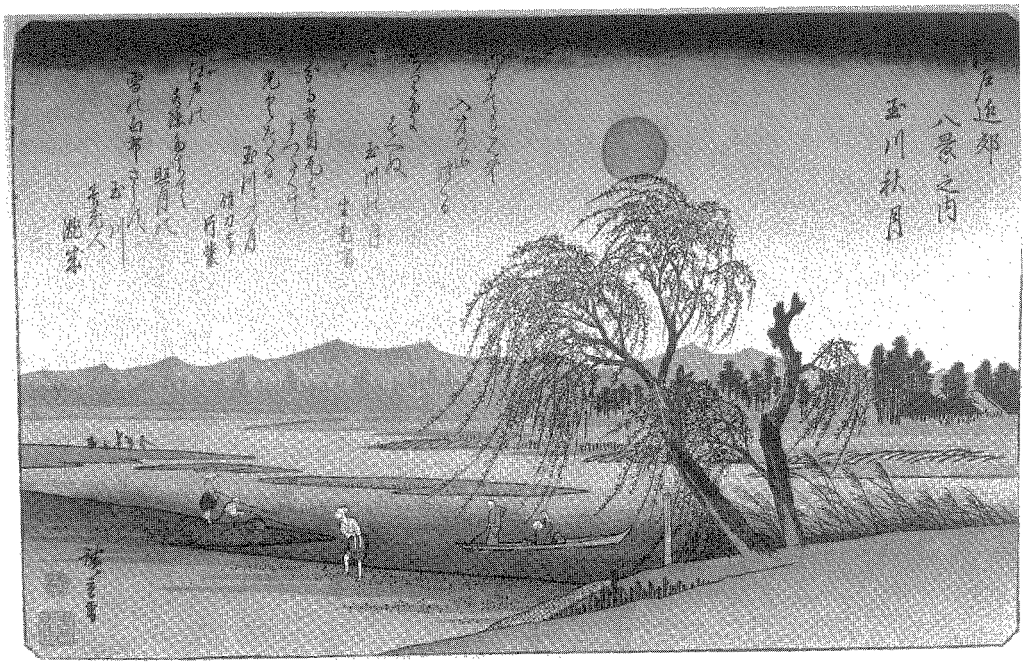
江戸時代になると清遊に多摩川を訪れる人が増え、文人墨客もこの地に遊んだ。多摩川や川沿いの風景を描いた絵画や紀行文の挿画などに当時の様子がしのばれ、また地誌や旅行案内が刊行されて、その中の図絵は資料的価値の高い貴重な記録になっている。そうした中から、多摩川の漁撈に関するものをとり上げて見る。

1・『江戸近郊八景之内　玉川秋月』　広重画

天保五年（一八三四）　大判錦絵　重要文化財

広重（寛政九年・一七九七～安政五年・一八五八）が描いた中でも、名作の評判の高い作品である。

中空の満月が、遠く武相の山波から川沿いの森を淡く照らしている。多摩川は月光に映え、漁する人が三々五々、巧みな遠近法の中に浮び上がる。手前の川岸で腰蓑をつけた二人の漁夫が「鵜飼」をしている。傍には大きな籠があり、とれた鮎を入れる魚籠か鵜を運ぶ入れ物のいずれかであろう。その漁人の手前には魚籠らしきものをかかえた一人の漁夫が歩き、遠くの川辺にも鵜飼をする人が描かれている。月を愛でる風流人二人、舟を漕ぎ出して流れに逍遙し、風に柳の小枝がゆれている。



1・広重画『江戸近郊八景之内　玉川秋月』

広い空間の動と静を巧みに表現したこの作品は、今から百六十年前、多摩川中流での月夜の光景を表情豊かに描いている。その当時多摩川の鵜飼は昼川も夜川も行われていた。月光が冴える夜の鮎漁は、鮎が散るので行われなかったといわれるが、ともあれ、多摩川の流れと、その周辺の木立や森や山波の中に漁人を配し、静かで奥の深い漁の情景を見事に描いている。

2・『江戸名所　多摩河乃里』　広重画

多摩川で布を晒す二人の女性の先に、流れに「もじ」を伏せる漁人と釣竿を手にした人物、その先右手の投網漁と舟漕ぐ人を遠近的に配し、山波遙か富士山が見える。「瀬張」、「釣り」、「投網」に加えて「鵜飼」が描かれていれば、当時の多摩川で行われた代表的な川漁が出揃う。先の『玉川秋月』同様、川面に風が渡り、柳が揺れている。

多摩川の漁を描いた広重の作品では、他に『名所雪月花　多満川秋の月　あゆ猟の図』があるが、流れに「もじ」を伏せる漁人と鮎を手にした少年の構図は、『江戸名所図会』の「多摩川鮎猟」に描かれた構図ときわめて良く似ており、相互の関係を示唆する興味ある作品になっている。

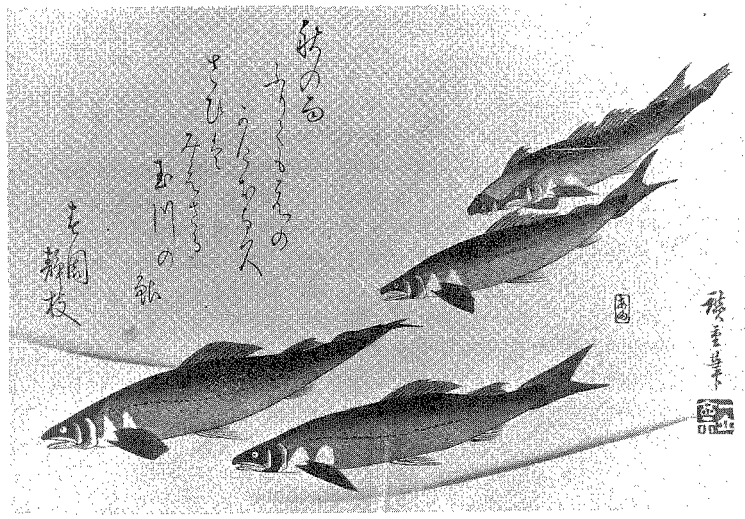
3・『鮎』　広重画　大橋青湖編『釣魚秘伝集』より

「玉川の鮎」を描いた広重の作品で、五匹の鮎が流れに向って泳い

2・広重画『江戸名所　多摩河之里』

でいる。だがここに描かれた鮎は鰭が誇大で写実性に欠け、頭部の表情も固く、けわしい。とくに背鰭と尾鰭の間の脂鰭（あぶらびれ）は鮎とも思えない。

浮世絵風景画の泰斗として『玉川秋月』など数々の名作を残し、すぐれた表現手法を身につけた人の作品としては意外な感がするが、広重も多摩川鮎の評判を聞き及んで、気軽に筆を走らせたのかも知れない。



3・広重画『鮎』

4・『東京名所　玉川の鮎と里』　二代広重画

遠くに富士山を望む多摩川の清流で、「筌・釣・網」の漁法三態を描いた二代広重（明治二年・一八六九没）の作品で、流れに「もじ」を伏せる漁人と、その近くの竿を手にした釣人の構成は、広重の『江戸名所　多摩河乃里』を思わせるものがある。両作品を見比べると、師弟の筆致の差がよく判り、二代広重の描線は師の広重に比べると大分固い。

4・二代広重画『玉川の鮎と里』

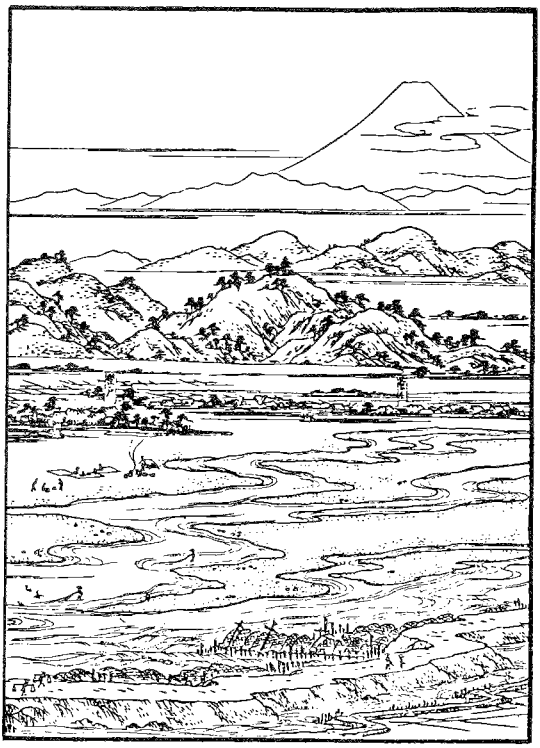
5・『大日本名所之内、武蔵多満川之里』

若狭藏之助篇『明治・大正・昭和　埼玉県写真集』上巻より構図的に広重の『江戸名所　多満川乃里』とよく似ており、作者はそれを真似て描いているが、画才にひらきがある。多摩川の布晒しと

鮎漁、それに富士山の遠景を配したこの名所絵は、輸出用の茶箱に張られたものである。師広重の死後、安藤家を離縁された二代広重が、慶応二年（一八六六）、横浜で茶箱絵を描いたといわれるが、この作品にはそれを証す手がかりに欠ける。

安政六年（一八五九）に横浜が開港し、茶が輸出品になった。明治元年（一八六八）、茶は輸出総額の四分の一を占め生糸に次ぐ重要産品となり、埼玉産の狭山茶も八王子経由で横浜に出荷された。この絵は茶商、志村善次郎が取扱った茶箱に貼り、海外に送られた。絵の左下の図柄にそぐわぬ横文字はそのためで、*MASUYA TEA BOX. MAKER YOK*

5・『大日本名所之内武蔵多満川之里』



OHAMA と記されている。

『江戸名所図会』に描かれた多摩川の漁撈　長谷川雪旦画

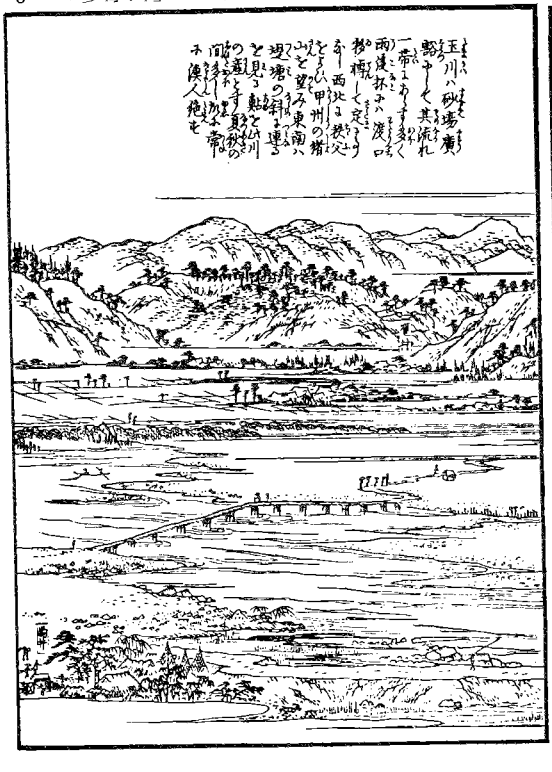
安永九年（一七八〇）に出版された京都の『都名所図会』の影響を受け、江戸の地誌『江戸名所図会』が斉藤幸雄、幸孝、幸成（月岑）三代により、およそ四十年の歳月を費やして七巻二十冊が完成した。前半十冊を天保五年（一八三四）、後半十冊は同七年に出版し、大きな反響を呼んだ。豊富に挿入された長谷川雪旦の記録絵は、幕末期の江戸界隈の姿を正確に伝え、簡潔な描線は対象物を時に精緻、或いは伸びやかに記録し、貴重な資料になっている。その頃の多摩川で行われた漁の挿画もあり、かつてこの流れが果した漁撈文化を知る上で大変参考になる。

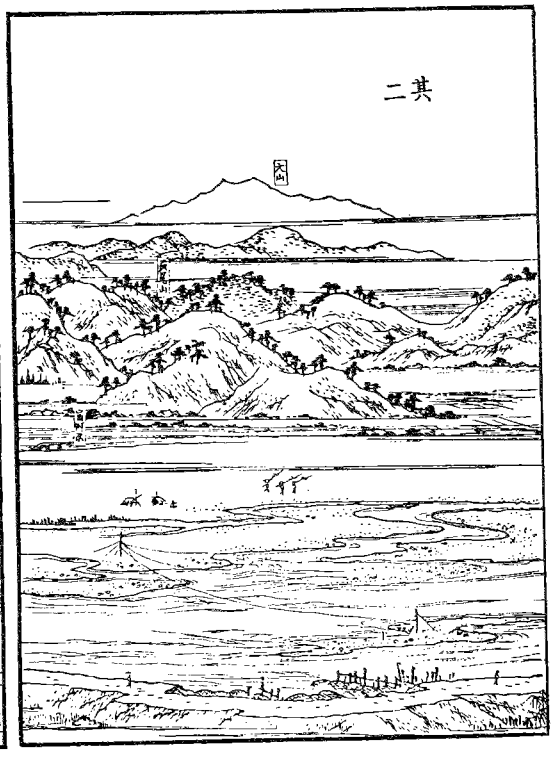
6・「多摩川　其一・其二」　四枚続き

多摩川中流の左岸より登戸を中心に、上、下流の風景を描いた四枚つづきの大パノラマ画である。はるかに富士、丹沢の山々を望み、広大な空間と多摩川を背景に、人の営みが伸び伸びと描かれている。

広い河原を幾筋にも分かれ、悠々と蛇行する多摩川が横たわり、流れには木橋、渡し場があり、川岸の各所には蛇籠や菱牛、木杭などの護岸水制がある。川沿いには草葺民家が点在し、幕末期の多摩川沿いの景観は、今日では想像もできないほどのどかで、豊かな自然にあふれている。

6・「多摩川」・『江戸名所図会』　四枚続き





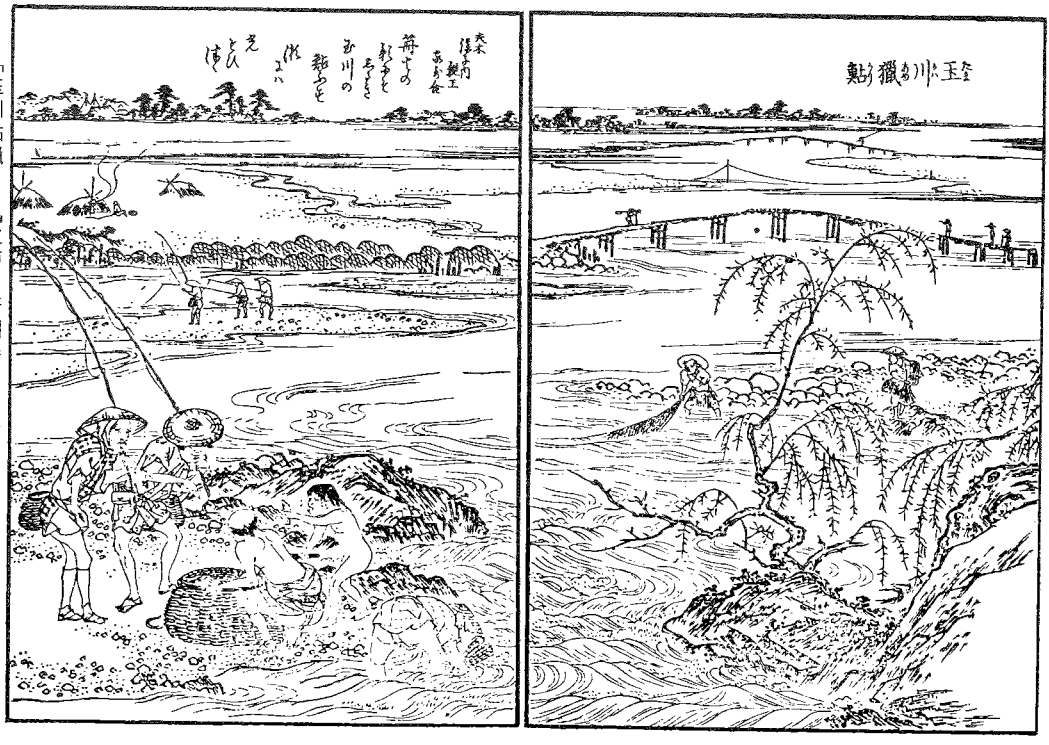
清冽な水の青さが滔々と、そこに漁する人の姿がある。「徒投網」、「舟投網」、「鵜飼」、「釣り」の人、漁を終え叉手網を肩に家路をたどる漁人など、恵み豊かな流れでの漁の様子を描いている。また流れの傍の河原で、莚ござを敷いて川遊びの風流を楽しむ人たちの姿がある。青い流れは生命力に満ちあふれ、人の営みをやさしく包みこんで、悠揚とした時が流れる。

7・「玉川猟鮎」　二枚続き

漁場は特定できないが、多摩川中流での漁法三態を描いた代表的な漁撈絵で、広重の『玉川秋月』とともに最も知られ、これまでに各書でとり上げられている。

画面手前の流れに立ちこむ前かがみの漁人は、「瀬張」漁で「もじ」を伏せており、左の裸の少年が、とれたばかりの鮎を二人の釣人に見せている。饅頭型をした大きな生簀魚籠には鮎がたくさんいるのであろう。上裸ぬぎの漁人に、釣人が話しかけている。描かれた釣人と漁人の構成と動作、それに表情が実にいい。

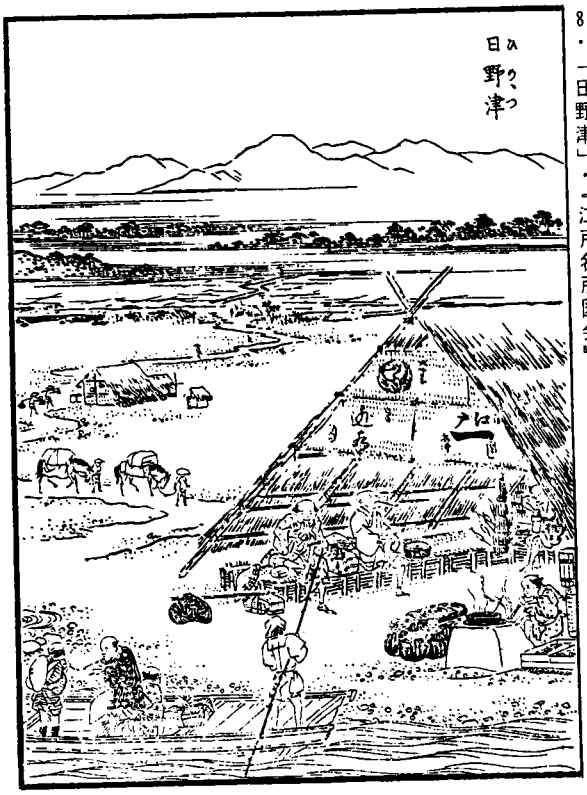
広重も『名所雪月花　多満川秋の月　あゆ猟の図』の作品に、この「瀬張」漁三人の人物構成を引用したと思われる節がある。それほど抜群の画面構成であり、改めて雪旦の筆力に感心させられる。流水で投網を打ち、網を構え、釣りする人、それぞれの人物を広大な空間に配し、巧みな遠近法を駆使して、滔々と流れる多摩川と、そこで営まれる漁を生き生きと描いている。



7・「玉川鮎猟」・『江戸名所図会』　二枚続き

8・「日野津」

日野の渡し場風景を描いたもので、雨露をしのぐ川辺の苫屋で休息する人物があり、その前に串に刺した魚を吊した「べんけい」が下っている。恐らく、旅人に供する菜料用のものかと思われるが、この絵からでは鮎かウグイかは判らない。いずれにせよ、当時生魚以外は白焼きにしてべんけいに刺し、炉の上など乾燥する所に吊して保存した。それを必要な時に再び焼いたり、煮こんだりして食した。

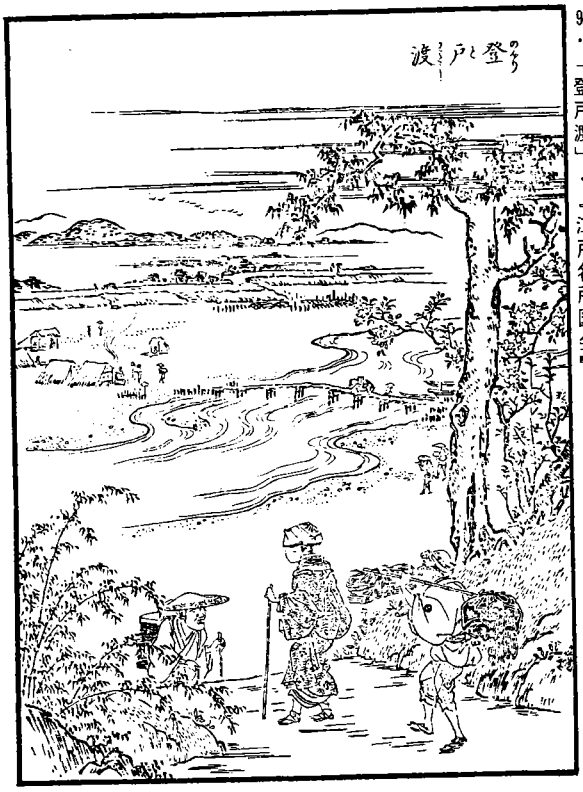


8・「日野津」・『江戸名所図会』

9・「登戸渡」

手前の坂道を行く三人の旅人が描かれ、婦人に従う老人の振り分け荷物の一方に、鮎籠が数枚束ねてある。これから行く先への、或いは自宅への土産であろうか、鮎籠一枚に生鮎が十数匹並べられるので、荷姿からして四、五十匹はあるだろう。

遠くの山波と多摩川の流れ、土橋を渡る人の姿、それに対する手前三人の旅人、遠近法で画面が大きく見える。



9・「登戸渡」・『江戸名所図会』

10・「代太橋」

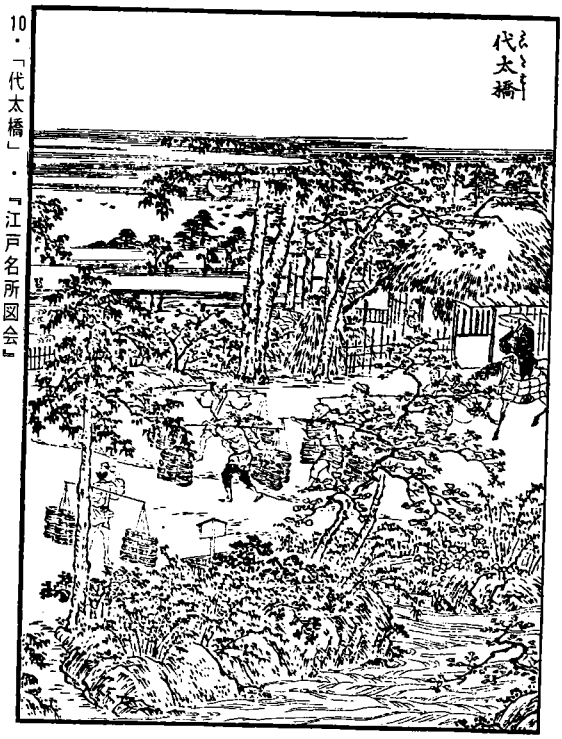
羽村から取水した玉川上水が、代太（今の世田谷区代田）橋を抜けて分流する場所で、五人の鮎担ぎが声をかけ合い、一息入れようとしている。鮎籠の荷姿や担ぎ人たちの風体からして、四谷の鮎屋に運ぶのであろう、担ぎ人たちそれぞれの動作に表情がある。

多摩川を夕方出発して、夜通し甲州街道をかけ抜けた。ここまでくると日は高く昇り、目指す鮎屋はもう一息である。江戸から東京に変って、多摩川に鉄道が通じるまでつづけられ、鮎担ぎは街道の名物になっていた。漁撈にまつわる貴重な風俗画である。

11・「四谷　内藤新宿」

江戸時代後期、甲州街道のターミナル宿駅として発展した新宿の四谷に鮎問屋があり、鮎担ぎは夜を徹して重荷を担いでひた走った。この絵からも判るように、ここは多摩川沿いののどかな田園地帯とはまるで違った、浮世の賑わいにあふれている。

鮎担ぎは昼前に鮎屋に着くと荷を下し、仮眠する。苦労の金子を懐に家路をたどるが、野育ちの若者にとって、内藤新宿界隈の気配はあまりにも刺激的である。「内藤にしようか、府中に寄ろか。」思案のしどころである。その楽しみ故に長途の苦業に耐えてきた。鮎担ぎの若者たちのほゝ笑ましくもうら悲しい心情は、その時代に生きた民衆のうめきと歓びとを象徴しているかのようである。

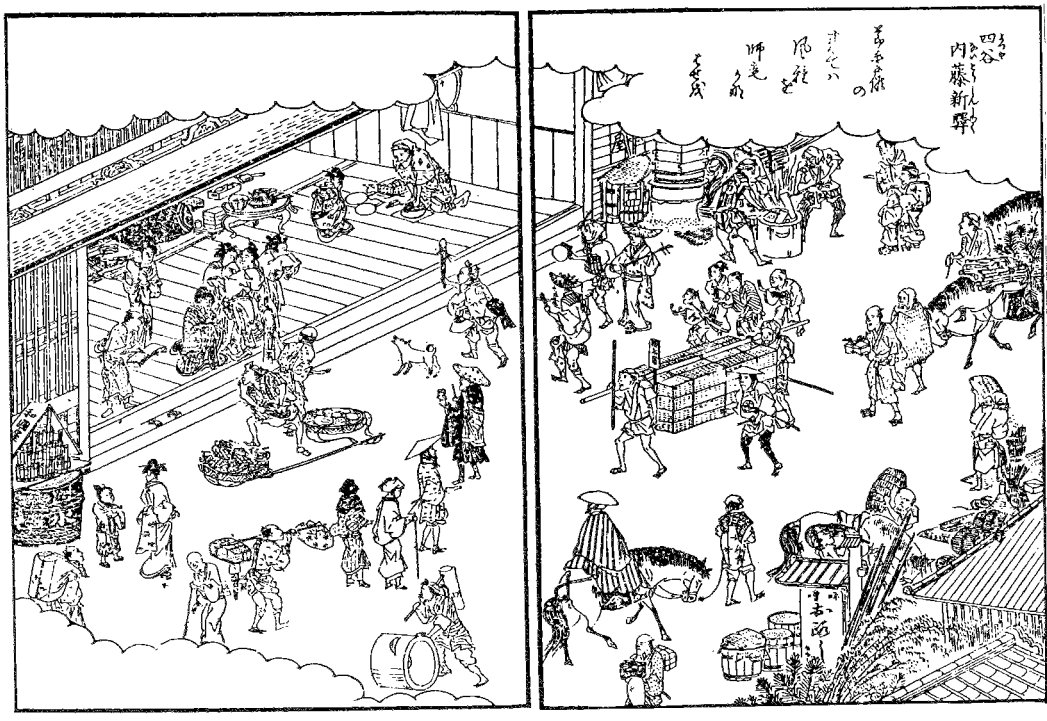


10・「代太橋」・『江戸名所図会』

12・『多摩川漁業図』　司馬江漢画

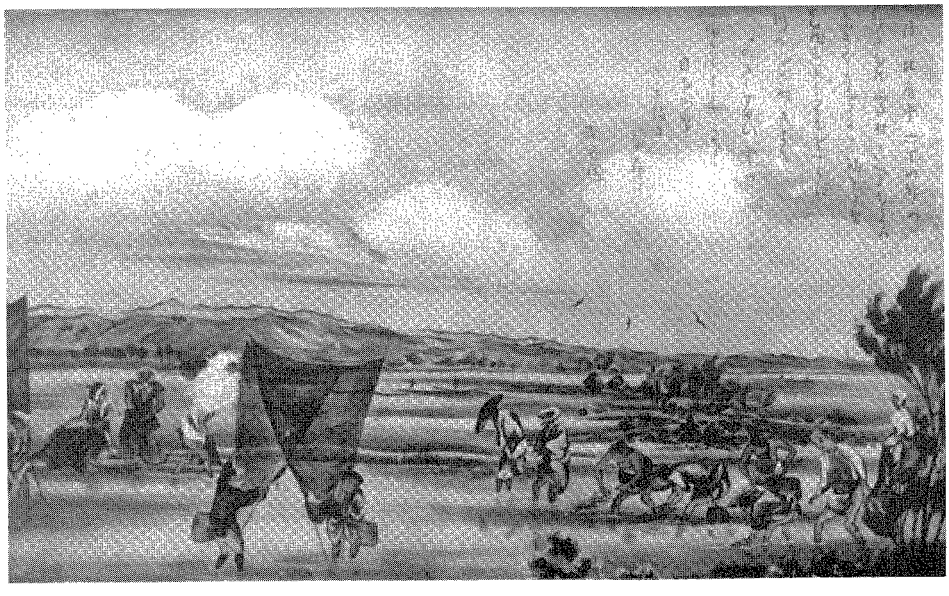
昭和五年『風俗画報』掲載・『多摩川は語る』より転載

司馬江漢（延享四年・一七四七～文政元年・一八一八）は江戸時代後期の画家、思想家で、本名は安藤吉次郎、後に姓を司馬、名を峻と改名、字（あざな）は江漢の外に君嶽、不言、西洋道人などいくつかある。絵画、オランダ語をよくし、天明三年（一七八三）、腐食銅版画の制作に成功し江戸名所風景の連作を出した。また寛成年間（一七八九～一八〇一）以前より西洋絵画の影響を受けて油彩画風の作品を描いているが、この作品もその頃のものと思われる。



11・「四谷内藤新宿」・『江戸名所図会』

多摩川中流の府中地先で共同で漁する人物を描いているが、この絵を見る限り、画面左半分の漁人が持つ長い又手網からして、「跳網」漁前後の姿とも思え、また左の岸寄りで筌の様なものを仕掛けているのは「寄せ網」漁法によく見られる作業で、この絵柄から漁法を特定することはできないが、流れでの共同漁の熱気は感じられる。



12・司馬江漢画『多摩川漁業図』

13・『魚留瀧の鱒跳網漁』　植田孟縉著

『武蔵名勝図会』　文政六年（一八二三）

魚留瀧は棚沢村（現西多摩郡奥多摩町）鳩の巣地先の多摩川本流にかかり、その字の如く、滝に阻まれて鱒や鮎が遡上できない。図会には「魚留瀧　多磨川本瀬の瀬なり。高さ二間半、幅三間余、深さ不知。広さ五間四方。鱒、鮎はここを限りとして留るゆえに名とす。ここに鱒の跳網という漁あり。四月のころ小麦の花盛んなる時分、南岸の岩上に居て、日中この滝を踰え登らんと跳ねあがるを待ち居て網を出し漁するなり。八、九寸より二尺程なる鱒を漁す。望みて一興あり。」と記し、右岸滝下で叉手網を持つ二人の漁人を描いた挿画がある。

山女魚の稚魚が多摩川を降り、三、四年後には二尺に近い巨魚に成長し、産卵のため母川に回帰するが、行く手に滝があり遡上できない。それを知る村人が滝下で叉手網を構え、急瀑を上りきれず空を舞う鱒を受ける。

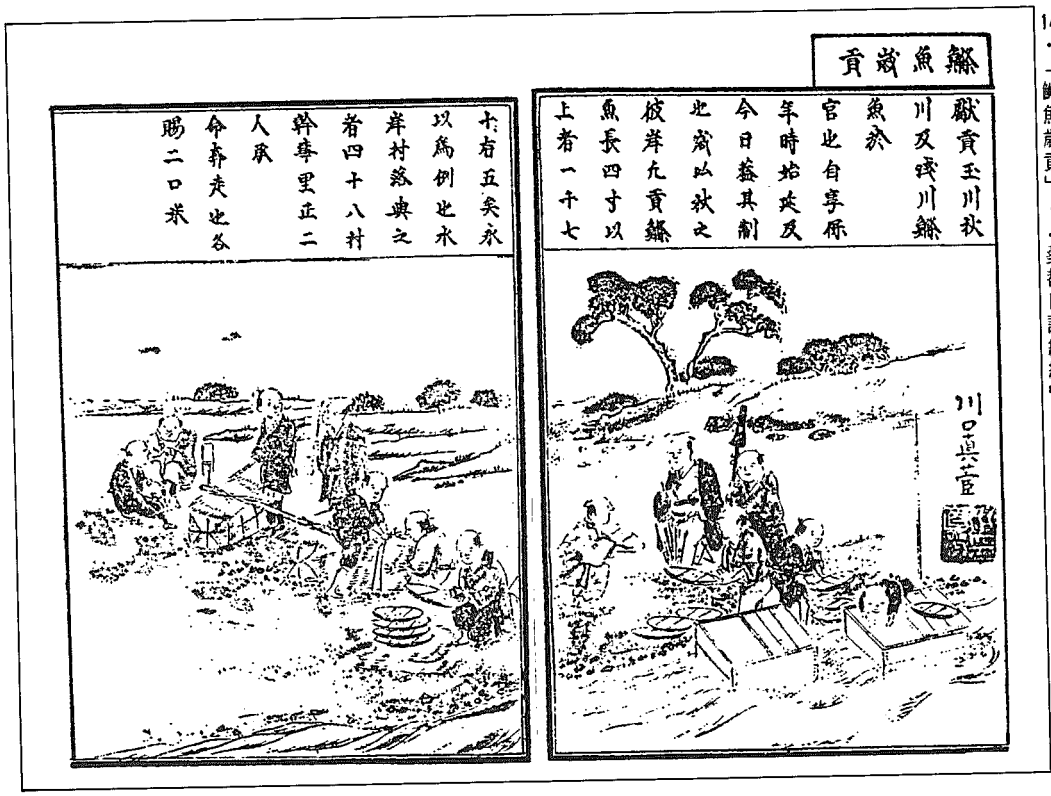
多摩川に堰がなく、豊かな流れをたくさんの魚が行き来していた頃、海で立派に成長した桜鱒の大群が、上流目指して押し寄せた。今ではこの滝も埋没して往時の姿をとどめない。

14・「鰷魚歳貢」・『桑都日記続編』

巻之二十五図解　塩野適斎著　天保四年（一八三三）

川辺で御用鮎の検分、出荷の様子が描かれ、絵には川口真菅の落款がある。絵の表題、文中に「鰷」とあるが「鮎」の誤りで、鰷は鮎と

13・「魚留瀧の鱒跳網漁」・『武蔵名勝図会』



同じ水域に棲息するウグイである。ともあれ、この絵から幕末期の御用鮎出荷の物々しい様子を知ることができる。

画面には鮎御用の出役が検分する中で、世話役や漁師、それに鮎運びの人足などが描かれている。川岸の箱生簀から活きた鮎をとり上げ、鮎籠に並べて検分の後荷造りする。傍らには鮎運びの人足が待機しており、荷ができ次第江戸表に急ぐ。

川辺ののどかな光景をよそに、為政者の食膳を飾る一品のため、封建の苦汁にあえぐ流域民の声なき声が伝わってくる。

15・『年中祭絵巻　八月　鵜飼神事』　絵巻　阿伎留神社蔵

五日市町の延喜式内社、阿伎留神社に現存する十二ヶ月の祭事を描いた絵巻物の中に、同社が八月に行う鵜飼神事がある。流れに立ちこむ四人の人物が描かれ、その中で、神官装束の男が松明をかざして二羽の鵜を使い、鮎とりをしている。同社の記録によると、

「八月上旬　鵜飼神事　秋川ヨリ鮎ヲ取リテ供ヘ奉ル比日櫛八玉命祭ナリ中興以来洪水有ルヲ畏レ六七月中鮎ヲ取リ之レヲ神馬坂ノ池ニ飼ヒ置キ八月ノ祭ニ供フルコトヽナセリ」

とその由来を記している。鵜飼神事の起源は古く、絵は狩野久信が描いたもので、天保から幕末頃の作品といわれる。

16・『調布玉川絵図』

長谷川雪提画　弘化二年（一八四五）

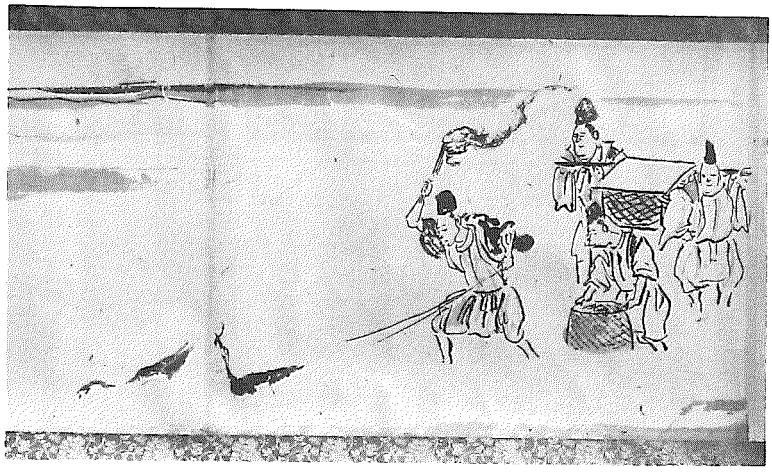
多摩川の上流から下流までを巻物仕立てにした絵図で、流れでの「鵜飼」や「投網」、「釣り」が描かれている。江戸時代末期の多摩川での漁とともに、筏が流れを下り、舟遊びや河原で川遊びを楽しむ光景が描かれ、その頃の流域ののどかさがうかがえる。

17・『玉川遊漁の圖』　作者・年代不詳

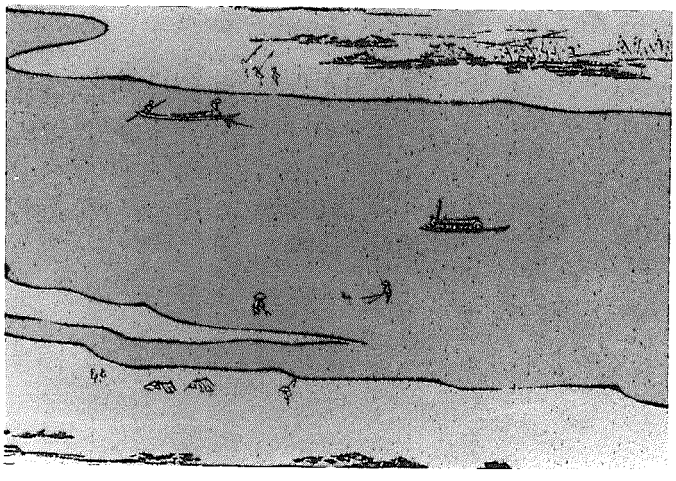
大橋青湖編『釣魚秘伝集』より

江戸時代後期の福生から羽村辺りの風景を思わせる絵であるが、手前の川辺では筵ござを敷き、風流を楽しむ人物が描かれている。蛇籠が連なる先に釣人が流れに立ちこみ、鵜飼の漁人もいる。右手前の流れでは叉手網をたたんで川岸に向う漁人と投網打ちがあり、その先五人の漁人は共同で網漁をしているように思える。

漁人たちの間を縫って、屋形船と荷を積んだ筏が流れを降る。画面には四、五種類の漁法が行われているが、漁の営みは周りの景観に溶けこみ、風景の一部と化している。多摩川の漁が、当時これほど賑わったとは思えぬが、清流に展開した心象風景が生き生きと描かれている。



15・『年中祭絵巻　八月　鵜飼神事』



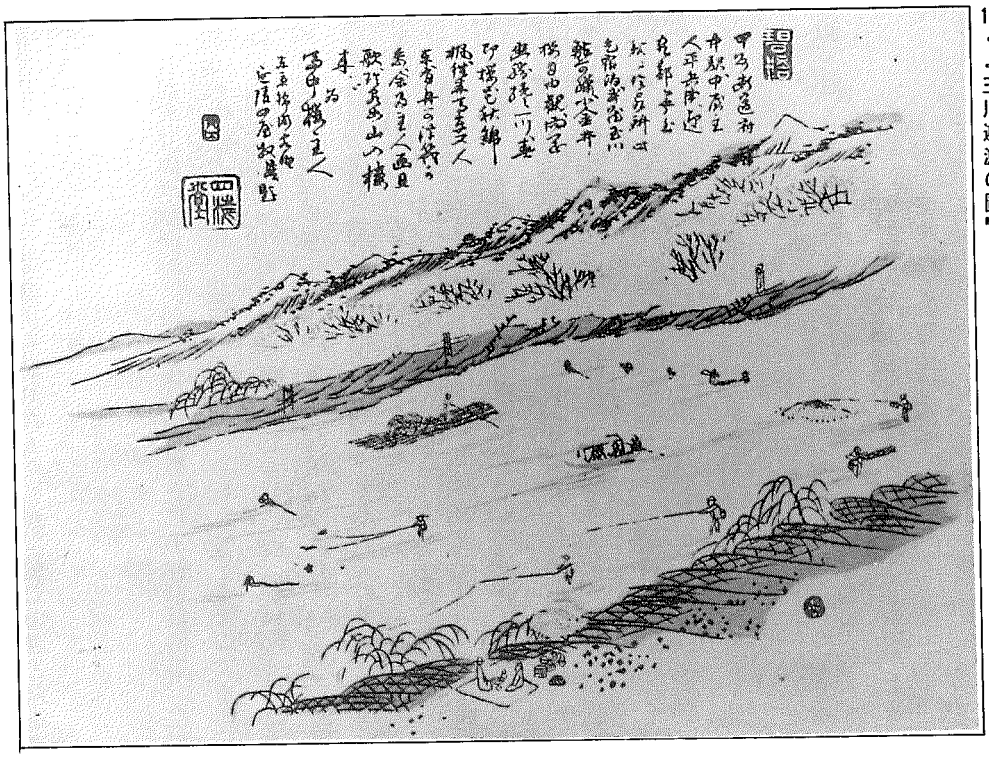
16・『調布玉川絵図』部分
手前の流れで鵜飼の漁人が描かれている

18・『貝殻坂立川亭鮎漁場』　明治三十年頃

19・『多摩川河畔丸芝鮎漁場』　明治三十六年頃

馬場吉蔵画　「立川村十二景」より

立川市曙町に住んだ馬場吉蔵村が、明治三十年代の立川界隈十二ヶ所を昭和初期に描いた水彩画で、この「立川村十二景」には多摩川の



17・『玉川遊漁の圖』

18・馬場吉蔵画『貝殻坂立川亭鮎漁場』

19・馬場吉蔵画『多摩川河畔丸芝鮎漁場』

漁撈に関する絵が二点ある。明治三十年代に清遊客で賑わった立川亭と丸芝館をテーマに、多摩川を訪れた人たちが、流れの漁と鮎を楽しんだのどかな時代を描いている。

「貝殻坂立川亭鮎漁場」は、市内の貝殻坂にあった鮎料亭、立川亭が描かれており、当時、崖の斜面に建てられた様子をそのままに伝えている。立川駅からの客は三階の入り口から入り、部屋からは富士の眺めがよく、料亭の前には水のきれいな根川が流れていた。清遊客は辺りの景色を眺めながら鮎料理を味わい、多摩川での船遊びや川漁見物を楽しんだ。

「多摩川河畔丸芝鮎漁場」は、当時、市内錦町五丁目にあった鮎料亭、丸芝館では本館とは別に多摩川段丘下に出店があり、ここでの川遊びを描いたものである。客は川辺の出店から屋形船に乗って鵜飼見物をし、鮎を味わった。川沿いの出店は出水時には流されることがあり、またシーズンオフには取り払われるため、簡素な仮小屋づくりになっていた。

20・21・「多摩川の鵜飼スケッチ」

明治三十年頃　ジョルダン著『魚類学入門』所収／平凡社『川釣り歳時記・夏』より

石川千代松博士の『鮎の話』によると、明治三十年頃の六月に世界的に著名な米国の魚類学者、ジョルダン*D. S. Jordan*博士が初来日し、その折、日野地先の多摩川で清遊し、とれたての鮎を味わった、と述べている。ジョルダン博士は多摩川の水の美しさに感嘆し、鵜飼を見物した。その時の鵜飼のスケッチ二点が、一九〇五年（明治三十八年）に出版された博士の著書『魚類学入門』"*Guide to the study of fishes*"に掲載され、多摩川の美しさと美味な鮎とともに、鵜飼が世界に紹介された。

二羽の鵜と三人の漁人が流れで行う鵜飼のスケッチは、その当時の技法を正確に伝えている。鵜使い一人と両側のシラタ網を引く鵜先、鮎をとる二羽の鵜、これはその頃の多摩川中流で行われていた徒鵜飼の技法であり、原図作者名は同書に*Sekko Shimada*とある。

20・多摩川の鵜飼スケッチ／ジョルダン著『魚類学入門』所収

21・鵜使いと鵜・多摩川日野／ジョルダン著『魚類学入門』所収

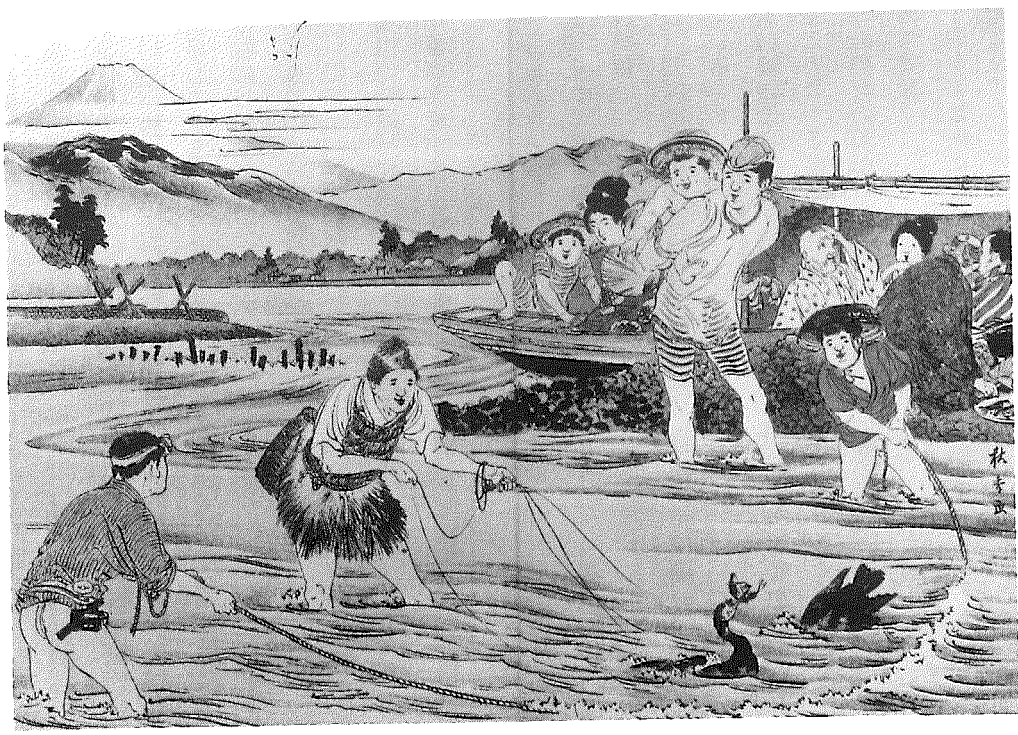
22・「多摩川鮎漁之図」・『風俗画報第175号』明治三十一年八月

23・「玉川の鮎漁」・『風俗画報第434号』明治四十五年七月

東陽堂刊・国書刊行会復刻版より

明治二十二年、多摩川に鉄道が開通すると、東京から大勢の清遊客が訪れ、川辺は賑わった。そうした川遊びを描いたのがこの二点で、当時の風俗をよく伝えている。

「多摩川鮎漁之図」は、明治二十年代中期以後の多摩川中流で行われた観光徒鵜飼を描いたもので、手前には流れで二羽の鵜を操る鵜使いと、その両側で二名の鵜先が鵜縄を引いている。二羽の鵜と三人の漁人の構成は、この頃の鵜飼漁法の基本型であるが、鵜使いと鵜先に



22・「多摩川鮎漁之図」・『風俗画報175号』

23・「玉川の鮎漁」・『風俗画報434号』

よるシラタ網での鮎の追い寄せの代りに、鵜先が鵜縄を引いて、鮎追いを下流から上流に行っている。

鵜飼漁とそれを見物する屋形船の清遊客も写実的で、表情豊かに描かれている。船の前の子どもを背負う男の水着姿も、当時の風俗を正確に記録している。絵の左前方の流れを横切って打ち並べた木杭は、水制の杭にしては不自然であり、或いは「瀬張」か「堰漁」に用いた木杭の名残りのようにも見える。

「玉川の鮎漁」は、流れを背景に優雅な川遊びの様子が描かれ、多摩川の漁撈文化が盛んな頃を記録した、資料的にも価値の高い風俗画である。

悠々と蛇行する多摩川沿いの丘陵地は遠く霞み、その先に富士が望まれる。流れには釣り人が点在し、河原で布を晒す人の姿がある。馬も川辺で憩い、その頃ののどかな多摩川の風景が描かれている。青い流れに、三艘の屋形船が下り、船の舳先では漁人が投網の機会をうかがっている。

遠景の静と中景の動とが対比する手前に、七人の女性が描かれている。左二人の女子は鮎籠の中の鮎を興味深げに見入り、右手の女性四人と一人の女の子たちは、それぞれ川辺の風情を楽しんでいる。『風俗画報』では、

「…向が岡は横に遠く連り、所々の木の間に茅屋の見え隠れするなど、所謂活パノラマなるべし。朗晴の日には富士山を望むを得るは、更に奇なり。且つ河原潤(ひろ)ければ、水を渡りて吹き来る風は、絶えず人

の袂をなぶる。「オヽ涼しいこと」といふ言は、先ず誰やらの口より漏るゝも愛嬌なり。…」（山下重民）と川辺の光景を述べている。

この絵に描かれた女性たちは、いずれもその装いからして、当時の有産階級に属する人たちである。多摩川まで鉄道が通じたとはいえ、川での清遊を楽しめる人たちは、限られた人たちであった。この点作者の観察眼は鋭く、その頃の多摩川清遊の一コマを伝える貴重な資料になっている。

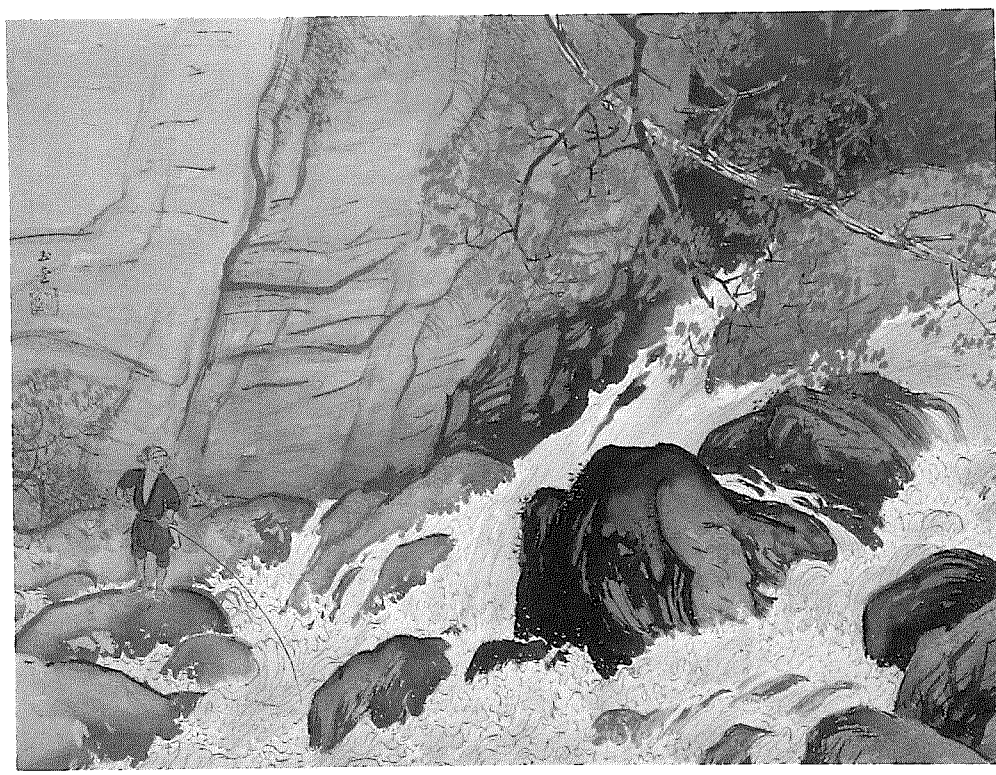
24・『奔湍釣魚』　昭和二十五年頃　川合玉堂画

25・『夏川』　昭和二十八年　川合玉堂画　玉堂美術館蔵

昭和十九年に奥多摩に移り住んだ川合玉堂（明治六年・一八七三～昭和三十二年・一九五八）は、以後、数々の名作を発表した。この二作品も多摩川の釣り風景を描いたもので、奥多摩を愛した玉堂は、この地を題材とした作品が多い。

『奔湍釣魚』は奥多摩渓谷の釣り風景を描いた作品で、岩を嚙む流れが轟々と山峡にこだまし、漁人が一人、釣り糸を垂れる。水の動と岩の静との対比が絶妙で、画面全体に深山の幽邃が漂っている。周囲の景観から岩魚釣りと思われるが、渓流釣りの世界を見事にとらえている。

『夏川』では、照りつける夏の日射しの河原で、流れに立ちこみ竿



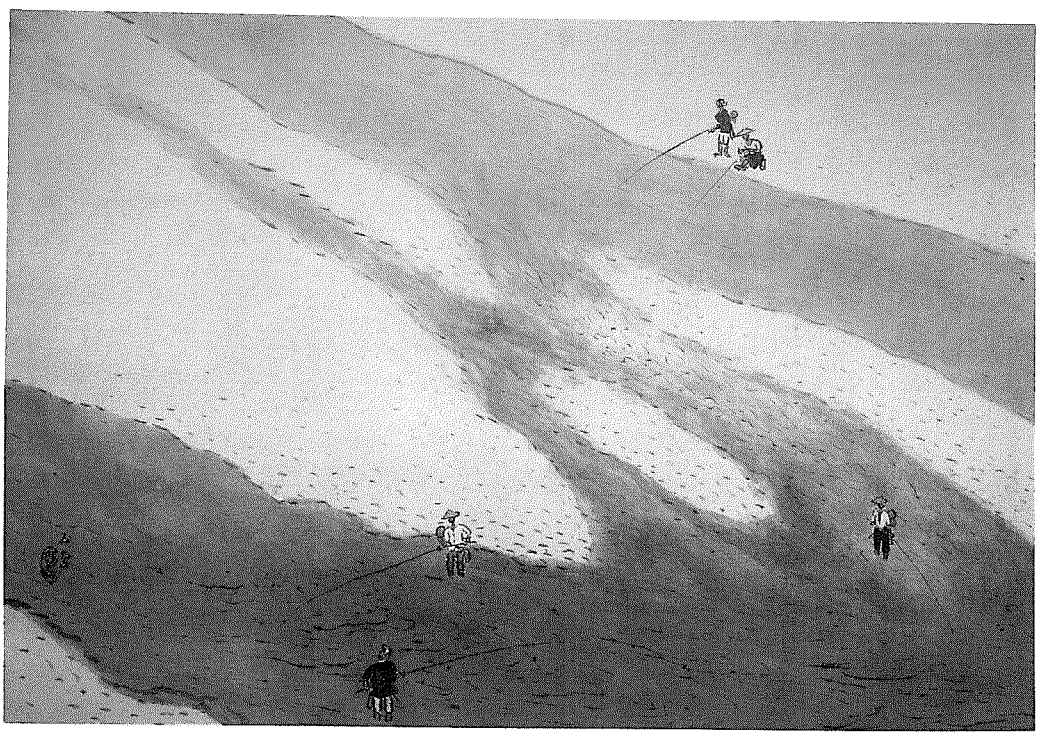
24・川合玉堂画『奔湍釣魚』

を振る釣人は「友釣り」であろうか、川石がおおう中洲の間を流れがさざめき、深瀬の水が青い。夏の川に釣人を配し、画面を単純化した中で、川石や水の表情の的確な表現があり、おおらかな水景に深い余韻が感じられる。作者玉堂自身が気にいっている作品の一つである。

先の『奔湍釣魚』といい、この『夏川』もゆたかな自然を背景に爽やかな釣人の世界を見事に描いている。本書では白黒製版だが、彩色原画では、微妙な水の表情を余すところなくとらえている。

山村の漁撈画　渡辺嘉平画　『画集・多摩のふるさと』より

八王子市郊外、上恩方に生まれ育った渡辺嘉平（大正六年・一九一七～）氏が、その当時の山村生活を描き、二冊の画集にまとめた中から川漁に関するものをとり上げた。氏は余暇に絵を親しみ、山村の景物や当時のくらしを描いたが、素直な筆致は明快で判り易く、当時、北浅川上流水域で地元の人たちが行った漁の絵も記録性にすぐれ、今では貴重な資料となっている。画集に記された渡辺氏の解説を付して掲げてみる。なお文中の案下川とは、陣馬山を水源とする浅川最上流部の渓流である。



25・川合玉堂画『夏川』

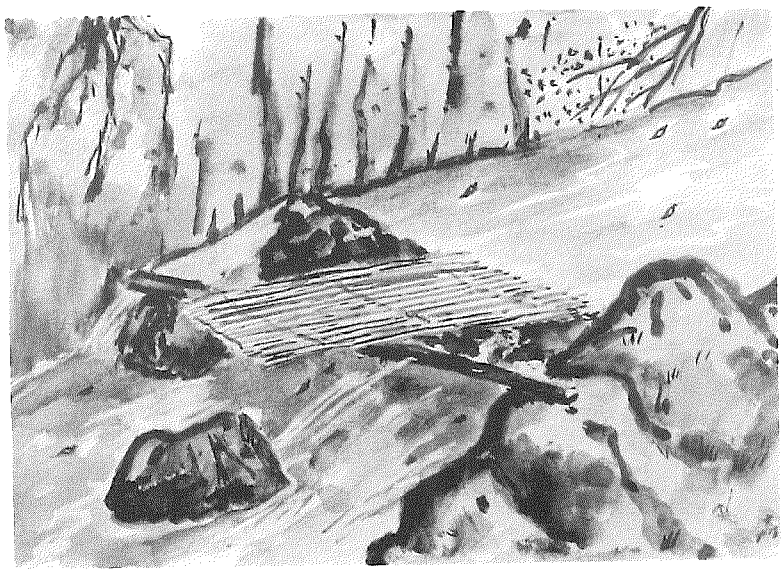
26・『やまめ』

箱面をとおして見る川底には、白い砂と細かい水泡の乱舞の中に僅かにひれを動かしながら静止に近い状態で、流れに抗しているやまめの美しい姿態がある。やまめは谷川の清流にだけ棲む。案下川もちょっと下るともういない。

26・渡辺嘉平画「やまめ」

27・『ヤナ』

冷たく澄んだ谷川を枯葉が流れるようになるとやまめの産卵が始まる。川底の砂の上に三十センチほどのやまめが、ヒラッ、ヒラッと白い腹を返しながら卵を産みつける。多い所では十尾、十五尾と姿を見せる。やまめは産卵のため僅かながらも下流に下る。こういう場所に篠(しの)を編んで作ったヤナをかけておくと、おもしろいようにやまめが獲(と)れる。子供にとって楽しい季節の一つである。



27・渡辺嘉平画「ヤナ」

28・『川狩』

谷川の魚とりは子供の遊びだが、時には大の男が揃って大がかりな川狩をすることがあった。酒の好きな者たちが集まって、獲りたての川魚で一杯やろうというのが目的であった。子供と違ってやることが大きい。杉丸太を挺子にして大きな石を揺り動かす。驚いて飛び出すヤマメやハヤ（ウグイ）は仕掛けたブッタイやドウに逃げ込む。

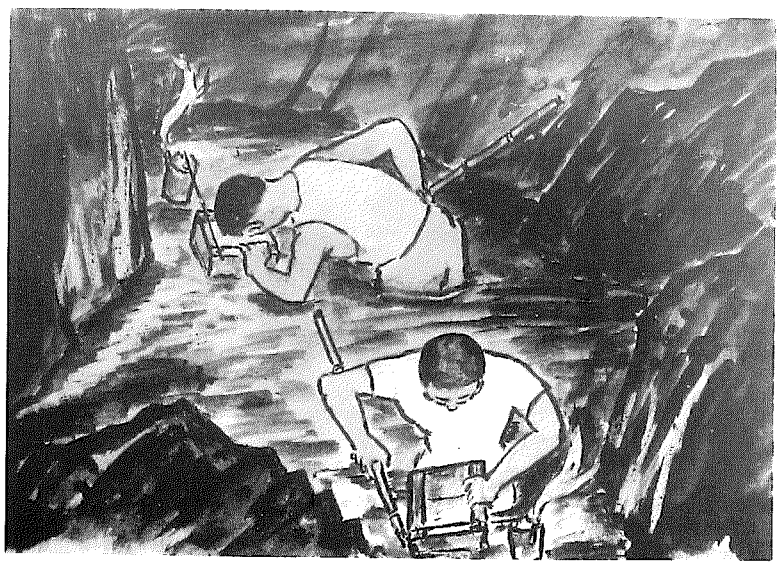
水から揚げたブッタイやドウの中には流れ込んだごみと共にピチピチと銀鱗が跳ねている。この時の喜びはおとなも子供も変わりはない。褌一つの男たちがこうして三時間も谷川を溯るとバケツに半分位魚が獲れた。お盆休みを利用してのレクリエーションである。

「お盆に殺生をするなんて。罰が当たらなきゃあいいが。」老人は心配そうにつぶやくのだったが…。

28・渡辺嘉平画『川狩』

29・『火ぶり』

カンテラをともして箱面を覗く。川底に写し出されたカジッカ（カジカ）は眠ってでもいるのか全く動かない。たゞ妙に大きく見える。あっさり突き棒の先におさまる。時にはうなぎも獲れる。少し気味悪いが大きな獲物である。持って帰ればおとなたちにも自慢ができる。川岸の草むらには虫の声がしきりである。

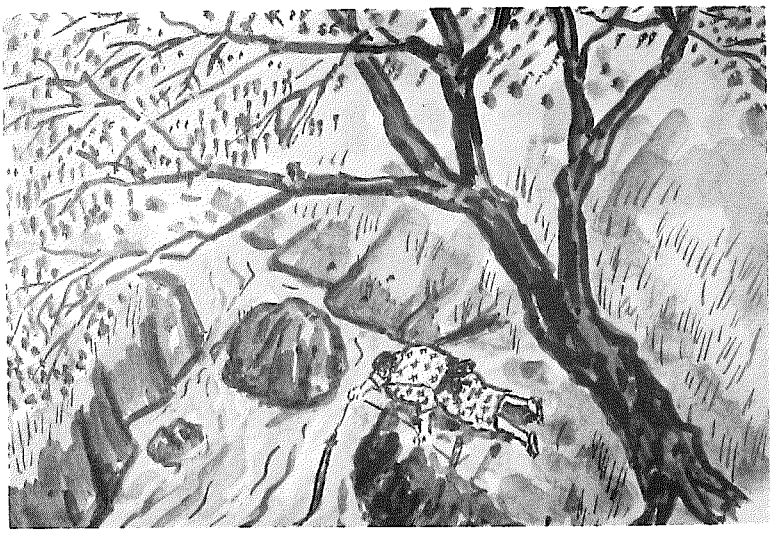


29・渡辺嘉平画『火ぶり』

30・『置き針』

「今夜はいきれる（蒸し暑い）からうなぎがかかるぞ。」と言った。水中のうなぎも蒸し暑さに耐えかねて出歩きたくなるものと考えたのであろうか。

案下川にはうなぎがたくさんいた。海から上って来たうなぎにとって、ここがどんづまりの地点だからと言う人もある。太い釣針を麻糸に結えつけ、これにみみずやかじっかを餌としてつけ、うなぎのいそうな場所に下げて置く。これを置き針という。子供たちは朝早く起きて置き針を見て回る。期待に胸を躍らせるのだが無駄足になることが多い。だから、ずっしりとした手ごたえのあった時の喜びと言ったらない。鈍い金色を帯びた太い胴をくねらせて必死に抵抗するうなぎをたぐり寄せて手で押さえる。子供の手では握れないほど太い。それを精いっぱいの力を出してギュッと握る。ぬるっとすべるその感触がまたなんとも言えない。



30・渡辺嘉平画『置き針』

31・『谷川の憩い』

谷川に石や砂を積み上げて一坪ほどのシマを作る。炎天下の畑仕事で汗した後、昼休みのひと時をここに憩う。岩の間から湧き出た清水そのままの、谷川の水の冷たさ。青葉の天井からかすかに陽光がもれて来る。川面を伝ってくる風が、褌一つの肌をなでる。

31・渡辺嘉平画『谷川の憩い』

第六編　漁撈文化の終焉

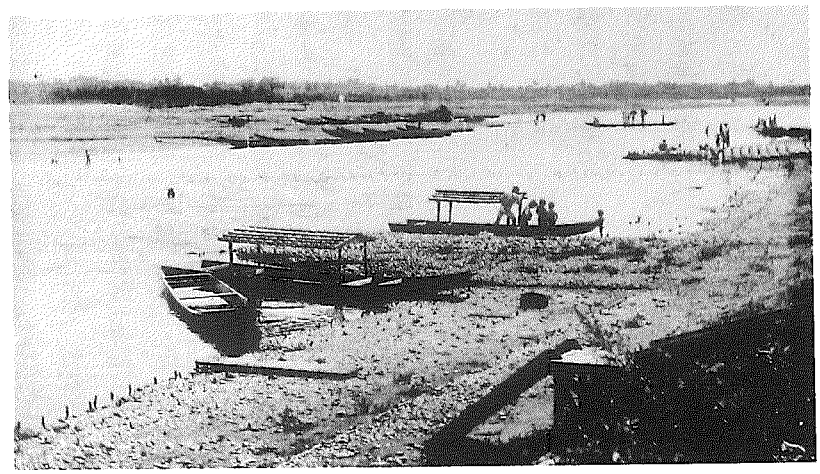
第一章　漁撈文化の終焉

多摩川は江戸時代以降、江戸、東京に近い鮎河川として知られ、昭和初期までのおよそ三百年間に独自の漁撈文化を開花させた稀有な水系である。

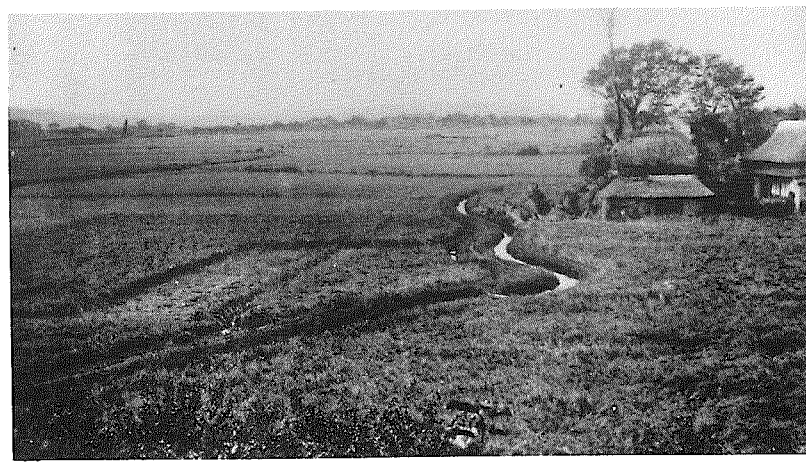
江戸開府以前の多摩川は、武蔵、相模両国に広がる農村地帯を静かに流れる自然河川であり、先史時代より変ることのない流れはたくさんの魚族を育み、川沿いの人たちは農耕の合い間に流れで漁をしながらひっそりとくらしていた。江戸時代以前の多摩川の漁撈関係資料といえば、平安時代の和歌一首だけであるが、その間も多摩川では、昔から受け継がれた伝統的な川漁が営まれていた。

長い時の流れの中で漁の技法の進歩もゆるやかで、偶、近隣水系との交流で新しい漁法がもたらされることがあるが、そうしたものを消化、吸収しながら他の水系に伝えていった。水系間に漁撈の普遍化が進み、江戸時代以前においては、多摩川と近隣水系では、類似的な漁法が広く行われていた。

十七世紀の末頃から行われた御用鮎制度と大都市に発展した江戸の存在が、多摩川に対して大量の鮎需要を生むことになった。豊潤な流れはそれに応えるとともに、漁撈にまつわるさまざまな人の営みは、清流とそれが育む数多の魚族と深くかかわり合う中で、独自の漁撈文化を形成した。



大正時代の多摩川／多摩川名勝絵葉書より



昔の多摩川中流域の農村景観／写真・府中市提供

多摩川は昔から鮎の川といわれるが、中流水域の占める割合が大きい河川形態は鮎の生育に適していた。鮎の生息密度が濃く、石や礫におおわれた川底は鮎の餌である藻類を豊かに育み、瀬から淵、淵から瀬へと変化しながら蛇行する流れは、清冽な水が豊かに流れていた。魚類学者ジョルダン博士をして、「…これほど澄んだ水を見たことがない」と感嘆させたほど多摩川の水は美しかった。

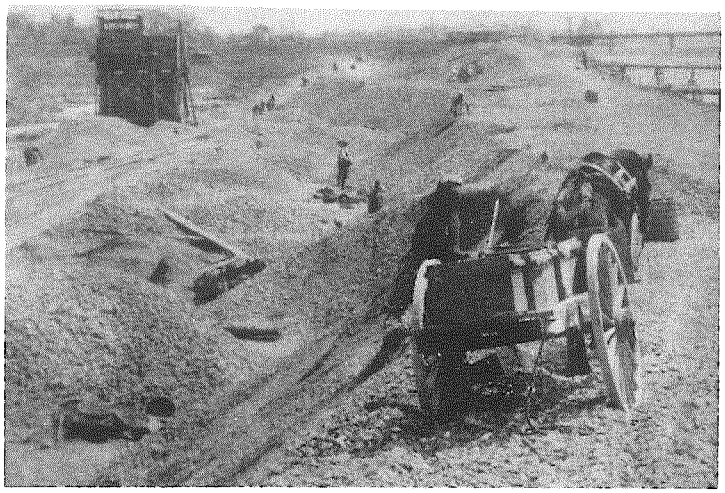
純農村地帯を滔々と流れる多摩川には鮎の他にたくさんの魚が生息し、季節毎に堰のないながれを自由に移動し、淵や瀬で餌を喰み、きれいな河床を産卵場所にしていた。流れではさまざまな漁法が行われたが、とりわけ鮎は多摩川の最重要魚種として、多様な鮎とりの漁法が発達した。鮎の季節になると川沿いの人たちは鮎漁に精を出し、とれた鮎の多くを江戸、東京まで搬送した。「鵜飼」や「瀬張」に「しら」、「跳網」などの鮎漁法とは別に、「瀬干し」や、「寄せ網」をはじめ、上流から下流まで、四季折々、多摩川では百種以上に及ぶ漁法が行われていた。

流れと魚と人が綾なす漁撈文化は、多勢の人が多摩川を訪れた明治中期から昭和の初期に向けて隆昌を迎えるが、その間も多摩川の凋落が徐々に進行して行ったのである。大都市の出現と交通網の発達が多摩川への関心を高めたが、皮肉にもそれが河川からの収奪と環境破壊を促進することになり、流域の都市化とも深くかかわり合いながら多摩川の生命力が萎え、漁撈文化も終焉を迎えることになる。

一、大量の川砂利採取

多摩川における砂利採取は江戸中期から行われたが、明治中期以降、首都の整備、拡張にともなう建設用基本材の需要が高まり、良質の砂利を産する多摩川では、大量の砂利採取が行われた。明治末の記録に「…其の間、到る所石ならざるは莫し。且つ小形の者多きを似て之を掘り取り、道端に敷くの料に供す。称して多摩川砂利といふ。昔時より絶えず掘り取るも減少するを見ず。…」とあり、近代都市の建設に必要な砂利は、鉄、セメントとともに鉄道、港湾、道路、建築、橋梁に大量に使われるようになった。

明治四十年（一九〇七）に渋谷、二子玉川間に玉川電気鉄道（現在の東急電鉄）が開通し、砂利輸送は車馬から鉄道へと変り、その



多摩川の砂利採取場

後、東京砂利鉄道（後の国鉄下河原線・一九一〇～七三）多摩鉄道（現西武多摩川線・一九一七～）、京王電気軌道（現京王帝都電鉄・一九一六～）など、多摩川、東京間には砂利運送用の鉄道網が形成された。首都の発展にともない大量の砂利が採取され、大正十一年の記録では、多摩川産の砂利は関東全生産量のほぼ半分近くを占めるに至った。

大正十二年（一九二三）九月一日、関東南部を襲った関東大震災は、東京、横浜をはじめ各地に甚大な被害を及ぼした。災害復興と耐火建築の建設に骨材となる砂利の需要が急増し、多摩川の砂利は東京への総供給量の二分の一に達し、わが国最大の砂利生産地となった。手掘りから機械掘りへの大量採取に変り、また河川敷での採掘が禁止されたため旧河床での採取が行われるなど、昭和四十年以降の全面的な砂利採掘が禁止されるまでつづき、多摩川はその相貌を変えた。

河床はそこに棲む魚族にとって生息環境を形成する重要な要素であり、川砂利の大量採取は河床の低下と河川形状の変様を招き、生態系に甚大な影響を与えた。礫や岩石におわれた河床がつづき、瀬から淵、淵から瀬へと変化する流れが魚たちの生息の場であり、そうした中でさまざまな魚たちの塒や餌場、通路それに産卵場所が形成されている。多摩川における環境破壊は、江戸中期以降の砂利採取に始まり、首都の膨張がこの流れの荒廃に拍車をかけた。「絶えず掘り取るも減少するを見ず」といわれ、無尽蔵に見えた多摩川砂利も大量の収奪が行われて、多摩川は昔日の面影を留めないほど変ってしまった。

二、治水・利水施設の増大

かつての多摩川はのどかな田園地帯をながれる自然河川であり、流域の人たちに恵みをもたらす豊かな流れは数多の魚族を育みつづけた。普段は静かで清冽な多摩川も、時には洪水で災害をもたらすこともあり、そうした負の部分を考慮に入れたにせよ、この川が流域の人たちに与えた恩恵は計り知れない。

自然河川である多摩川に、治水、利水を目的に人工の手が加えられるのは江戸時代からであるが、近代的な土木工法以前では、石や木、竹などの自然素材を用いた小規模な施設であった。蛇籠や沈床、菱牛などの河川構造物は魚の格好の生息場になり、生態系への深刻な影響は見られない。こうした自然工法による限り多摩川の生命力は少しも衰えることがなく、木と石による用水堰も小規模でその数も少なく、流れを往還する魚への影響もほとんどなかった。

『江戸名所図会』・「多摩川」や『調布多摩川絵図』には江戸後期頃の多摩川の風景が描かれているが、広い河原を縫いながら滔々と流れる岸辺の各所に蛇籠があり、水制の菱牛もある。板を渡した簡素な流れ橋を渡る人、清流で釣りや投網を打つ人、それに鵜飼もあり、脇を筏が通り過ぎる、まことにのどかな多摩川中流の光景がある。蛇籠や菱牛なども河川の自然景観に溶けこんで少しも違和感がない。

江戸から明治になっても、多摩川は自然河川のままの姿で豊かに流れていた。だが下流域の人口増加で洪水被害が頻発するようになり、明治四十年の大洪水、四十三年にはわが国水害史上で記録に残る大災

害を引き起した。このため治水への抜本的な対応をせまられることになり、近代的な治水工法による多摩川の整備が進められた。

流域に降る大雨の水を速やかに海に流す多摩川の水路化が進められ、蛇行する流れは直線化した河道に付替えられた。多摩川の両岸は鉄とコンクリートの護岸や水制で固められ、水の滞留を許さないこうした河川の改変は、河砂利の大量採取と同様に河川の生物的環境を破壊した。そこにはのどかで豊かな川本来の姿は見られず、ただコンクリートの護岸がえんえんとつづく巨大な水路と化し、また利水のための堰や床固、ダムなどの河川構造物が多摩川の各所につくられ、流れを横断した。

大都市に水道を供給するための羽村、調布、小河内などの堰、ダムをはじめ、多摩川中流に多く設けられた用水堰は、いずれも鉄とコンクリートの堅固な河川横断工作物である。そこに設置した魚道も、それぞれの魚種の習性や生態系への配慮に欠け、十分に機能してはいない。それらの施設の出現は、季節ごとに流れを移動するライフサイクルの魚族に対して、致命的な打撃を与えた。また、堰、ダムによる取水で、多摩川のそれまでの豊かな水が収奪されて貧しい流れに変り、さらに流域からの排水の流入で、水質は著しく悪化した。

大都市の膨張と多摩川流域の市街化が進む中で、こうした治水、利水への対応は必要な処置であるかも知れぬが、流れに生きる魚たちにとって、生息環境の破壊は決定的要因となり、あれほど清冽にして豊潤であった多摩川の生命力も次第に萎えて行くことになる。

三、水質汚濁の進行

首都東京の膨張は郊外に及び、とくに戦後以降はそれまで田園の景観を留めていた多摩川流域に宅地化が進んだ。国木田独歩が『武蔵野』で述べたような、雑木林のつづく丘陵地や川沿いの段丘地帯にまで住宅が立ち並んだ。東京都西部と神奈川県東辺部の多摩川流域は、流域面積一、二四〇平方キロにおよそ三三〇万の人が住んでおり、下水道が整備される前は大量の汚水が流入し、その昔、水の美しさで知られた多摩川は、水質汚濁の流れに変った。

田園地帯に宅地化が進む／昭和三〇年頃・目蒲線下丸子～鵜の木間

昭和二十年代から進んだ中流域の人口増加は、三十年代に入ると加速度的な膨張をつづけ、下水道の整備がおくれたこともあって、昭和四十年代の中頃には多摩川の水質汚濁はピークに達した。晴天の日曜の翌日になると、多摩川下流の調布堰下では大量の洗剤の泡が風に飛

ぶ光景が見られるようになり、またかつての多摩川中流では玉石の河原がつづいていたが、水質汚濁による富栄養化が進んで、葦などの好窒素系植物が密生するようになり、水質の変化とともに河川景観まで変った。

昭和四〇年代は水質汚染の進行が著しく、多摩川下流は合成洗剤の泡が浮く流れと化した／丸子堰下・昭和四五年九月

多摩川の水質悪化は、まず清流にしか生きることができない魚たちに甚大な影響を与え、ヘドロ化した淀みはきれいな川床を生息の場とする生き物を駆逐し、同時に魚の産床をうばった。こうした水質汚濁が進む中で、生息魚種の交替が起り、清流に生きる鰍やギバチ、カマツカ、スナヤツメなどが激減し、逆に比較的汚水に強いモツゴやオイカワ、カムルチーなどが生息範囲を広げていった。

川砂利の採取に始まり、その後治水、利水を目的に鉄とコンクリートで造られた堰や床固、ダムと護岸施設、河道の直線化に加えて、流域からの汚濁負荷の増大がもたらす水質悪化など、多摩川における生物的な環境変化は、そこに生息する魚族に致命的な影響を与えた。この半世紀余りの変貌の経緯は、清冽な自然河川がたどった下水路化の歴史であった。とくに中、下流では水のきらめきはなく、あの活力に満ちあふれた、かつての多摩川の生命力はどこにも見られない。

四、川漁の終焉

流域の都市化による河川環境の変化が魚族に及ぼした影響は甚大であるが、加えて漁撈面での乱獲が減少傾向に拍車をかけた。現在の多摩川は遊漁者を対象にした釣漁法と一部の網漁法に限られ、その他の伝統漁法の多くは魚族保護のため禁止されているが、昭和三十年代までは「瀬付き」や「ペラ網」などが行われ、職漁者たちは大量の魚をとっていた。

「瀬付き」は多摩川中流で行われた春のウグイ漁で、川瀬に抱卵したウグイを寄せる人工産床をつくり、真黒になって集まる魚群を投網でとる。産卵魚を大量に捕獲するのでウグイの繁殖に甚大な影響があり、自ら資源の涸渇を招くことになった。現在では「瀬付き」の技法を逆に活用し、清流の人工産床で産卵、孵化をうながし、ウグイの増殖につとめている。また「ペラ網」も、大正年間に多摩川にもたらさ

れた新しい技法で、鮎やウグイ、オイカワなどを大量にとり、「瀬張」や「簗」なども禁止され、わずかな遊漁だけが行われている。

職漁者が流域から姿を消して、三十年以上の歳月が流れた。その昔、海産魚よりも多摩川でとれた川魚を愛した人たちも世代が替り、川魚を食する風習も失われた。川魚から海産魚へ、そして肉食嗜好の現代へと、これは多摩川に限らず全国的な傾向であり、これも時代の流れである。

かつて日常のくらしに深くかかわり、流域の人たちに計り知れない恩恵をもたらした多摩川は、今ではコンクリートの護岸や堰で固められ、水質汚濁によどんで昔日の清冽さも水のきらめきも見られない。このように変貌した現在の多摩川は、河川としての魅力にとぼしく、流域の人たちの関心も薄い。

江戸時代以降、流域と都市の要求に十分応えてきた偉大な流れは、今では疲弊の極みに達して相貌を一変させ、往時を留めぬ落魄した姿となった。太古以来の漁撈文化も、この一世紀の間、稀有な輝きを放ちながら多摩川の流域から消えて行ったが、それは人間のあくなき川からの収奪と時代の大きなうねりが、伝統あるものを押し流してしまったのである。そして再び、かつてのような活力にあふれた、流れでの漁は甦ることがない。

第二章　多摩川における漁撈文化の特質

一水系が形成した漁撈文化という点で、多摩川はきわめて豊かな内容を有する、全国的にも稀有な河川である。大都市近郊の鮎河川として、およそ三百年余りにわたり多様な漁の文化を開花させたが、そのような例は他の河川には見られない特異なもので、多摩川における漁撈文化の形成要因についての解明をこころみ、その特質を明らかにしたい。

まず自然河川としての多摩川の形態であるが、秩父山地の笠取山に源を発し、延々一三八キロメートルを流れて江戸湾（東京湾）に注ぐ多摩川は、中流水域の占める割合の大きな河川である。明治に来朝した米国の魚類学者、ジョルダン博士を感嘆させた清冽な流れは、淵から瀬、瀬から淵へと変化しながら蛇行し、礫におおわれ変化に富む川底は魚族の餌料となる藻類を豊かに育むとともに、彼らの産床や棲み場所になっていた。こうした魚の生息に適した多摩川の生物環境は、流れにさまざまな種類の魚を育んだ。その昔、多摩川には流れを遮断する堰もなく、魚たちは自由に川を往来し種族の繁栄を謳歌していた。江戸時代以降、鮎の川として知られた多摩川は、鮎の生息密度の濃い生産性の高い水系であり、長い間にわたり幕府への上納鮎を供給する河川として、その役割をになってきた。

流れには鮎をはじめ、上流ではイワナ、ヤマメ、中流にウグイ、ニゴイ、カマツカ、カジカ、ギバチ、シマドジョウ、ヨシノボリ、スナヤツメなど、また水田地帯の用水路や細流にはフナ、コイ、タナゴ、ナマズが生息し、下流ではシラウオやハゼ、マルタなど、ウナギは多摩川の全水域に生息していた。季節になるとサクラマスが河口から遡上し、スズキやボラなどの海水魚も中流あたりまで姿を見せた。

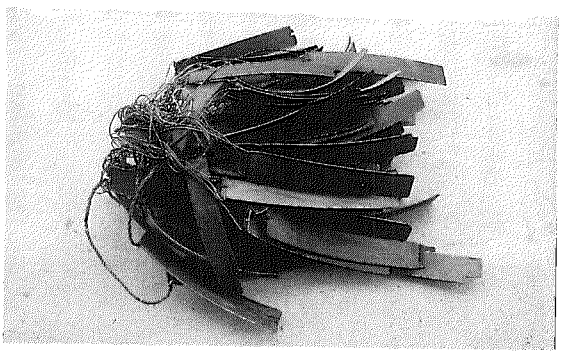
昭和初期以前までの多摩川流域は、静かな農村地帯がひらけ、その中を生命力に満ちあふれた流れが滔々と流域を潤していた。その当時の人びとのくらしは川と深くかかわり合い、流域の人たちはさまざまな漁法で魚をとり、くらしの糧にしていた。恵みあふれる偉大な流れは少しも萎えることなく、魚を豊かに育みつづけた。

近隣河川の相模川や荒川でも多摩川と同種の魚が生息し、古より流域の人びとは漁を行っていた。現在明らかにされている近隣河川の伝統漁法には、多摩川のそれと共通、類似のものが多く、ほと

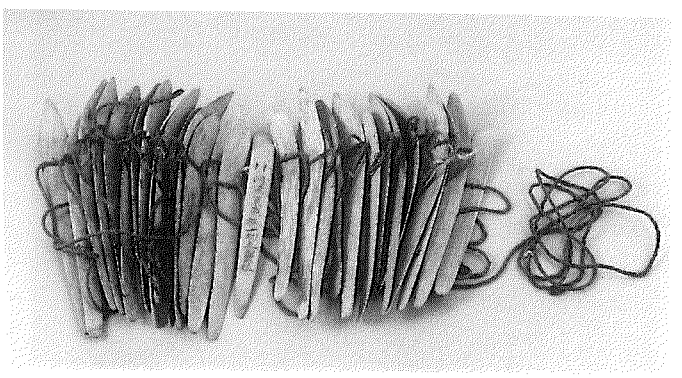
投げ網（右）と投網／昭和四三年・高知県鏡川

ペラを引き、魚を追い寄せる／多摩川日野地先・昭和五六年「伝統漁法実演」

多摩川の「ペラ」／鈴木由太郎蔵



東京湾の漁撈に使われた「ガワ」／千葉県立安房博物館蔵



荒川の「ガラ」／重要有形民族文化財・写真・埼玉県立博物館提供

んど差異が認められない。そのことは、はるか昔に漁の技法の交流、伝播、定着が行われたことにより、各水系における伝統漁法が普遍化したためである。「鵜飼」や「鵜縄」に代表される古典的漁法や「瀬張」、「跳網」などの鮎とり技法についても、多摩川と相模川、荒川とに共通性が見られ、その他の伝統的漁法についても同様である。

だが、三水系における伝統漁撈の中で、二、三の注目すべき事例がある。それは先にも述べた多摩川の「ペラ」と荒川の「ガラ」であり、それに多摩川の「投げ網」である。

ペラとガラは、ともに内湾漁撈の影響が多摩川、荒川に及んだ例で、反り木片を縄に結着した追い具で魚を寄せる技法が、東京湾を同じ河口とする両川で行われたことは、漁法伝播の類似性と両水系の近隣性をよく物語っている。一方、多摩川の投げ網は、昭和の初期に西日本

から伝えられたが、定着することなく飛び火現象的に終った技法で、相模川や荒川には見られない。

伝統漁法におけるペラとガラの系譜が、近隣水系である多摩川と荒川の共通性を示唆するのに対し、投げ網は多摩川の飛び火に終わっている。とくに後者は西日本の影響を物語るもので、多摩川、相模川、荒川の三水系では、古より西日本から漁の技法が移入され、定着した。「瀬張」、「跳網」、「鵜縄」、「追羽根棹網」など、魚おどし具を用いる漁法の多くが、西日本系の技法であり、また「投げ網」や「刺網」も彼の地からもたらされ、それらが長い時間をかけて、三河川にそれぞれの伝統漁法として定着して行った。

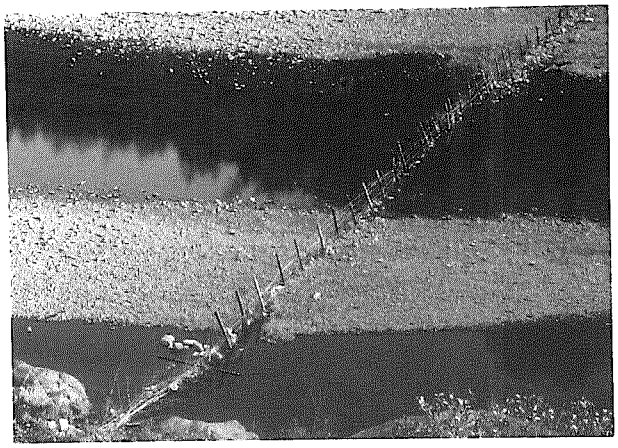
ペラとガラ、それに投げ網は、いずれも三水系の伝統漁法の終焉数十年前に渡来した技法であり、在来の伝統漁法に比してその歴史が浅く、移入水系で十分な時を得ずして廃絶した。

漁法とは別に、多摩川と相模川は、江戸時代に上納鮎を務めた河川で、両川には江戸への鮎かつぎがあり、明治になっても大量の鮎を東京に供給した。相模川流域では、多摩川と同一規格の生鮎を入れる竹製容器「鮎籠」が、江戸時代より使われていたのである。

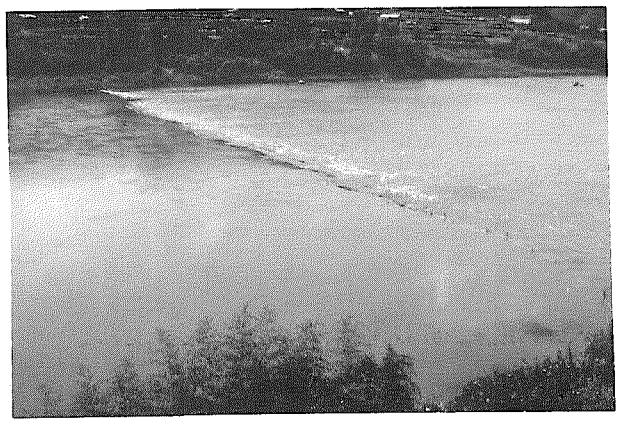
このように見てくると、多摩川、相模川、荒川の三水系は漁撈上に顕著な共通性が見られ、関東の他水系とは少しく趣を異にする「武相漁撈文化圏」ともいうべき姿が浮んでくる。

内湾漁撈の影響による多摩川のペラと荒川のガラ、河口は共にする東京湾を共有する水系であり、また相模川の鮎かつぎや鮎籠は、多摩川の上納鮎の系譜につながるものである。とくに三水系の伝統漁法には共通性が多く、相互交流の濃密さを物語っている。だが利根川以北の水系においても、武相三川と共通する伝統漁法が行われており、「瀬張」や「鵜縄」をはじめ多くの技法がそれぞれの河川に定着している。

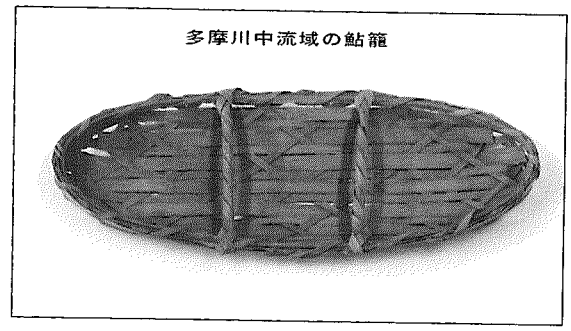
利根川以北の関東諸河川が武相三川と異なる点は、いずれも鮭が母川回帰する水系であり、多摩川や相模川、それに荒川には鮭が遡上しない。昔から「鮭（酒）は銚子かぎり」といわれるように、太平洋側では、利根川以南の河川に鮭は回

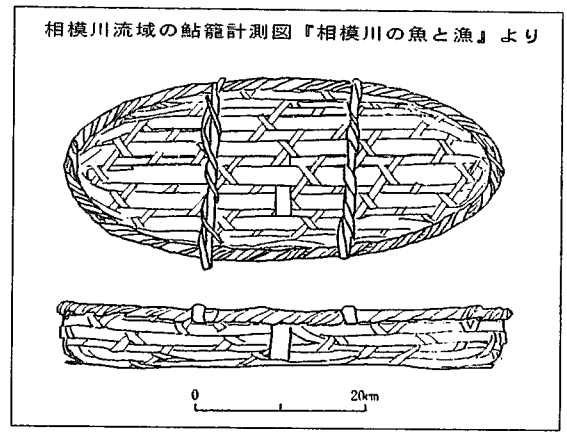


降り鮎をとる「追込み漁」の「サヤ」。葉つきの竹、笹、柳の小枝などで鮎をおどす／昭和五九年一一月・吉野川中流・奈良県



四万十川中流の「鮎瀬張漁」。降り鮎を葉つきの竹でおどし寄せて投網、刺網でとる／昭和六〇年九月





帰しない。

だが多摩川でも鮭が遡上した例はある。天保十五年（一八四四）旧十月十三日、柴崎村（現立川市）の名主、鈴木平九郎が記した『公私日記』に「…築江鮭壱尾落候由…玉川江鮭来り候事古今未曾有之事也…」と築で鮭がとれたのを今までにない事だと記している。恐らくこの鮭は母川回帰を誤った迷い鮭であろう。孵化から稚魚までの母川滞在期間の短い鮭に迷い鮭が多いことは、研究で立証されている。多摩川、荒川は昔から鮭の川ではなく、相模川も同様で、いずれも鮎の川であった。

関東で武相三川の北を流れる利根川、那珂川、久慈川などの水系は昔から鮭が遡上し、江戸時代の『利根川図志』にも利根川での鮭漁が絵図入りで紹介され、また那珂川の水戸郊外の青柳では毎年初鮭を幕府を通じて朝廷に献上した。鮭を産する水系では、鮎河川とは異る漁撈習俗や鮭にまつわる文化があり、関東の鮭河川は、さらに東北、日本海側の水系とも関連する鮭鮎漁撈圏の南限になっている。その接点に武相三川が位置し、広義の西日本系川漁文化圏の東端を占めていることになる。

諸河川における川漁文化の特質は、自然条件である河川形態をはじめ、流域の社会、経済、それに政治的要因などと深くかかわり合っているが、流れに生息する重要魚種の多寡がその河川の川漁文化の性格を規定している。

鮭鮎河川では鮭と鮎の漁期が異なり、漁は競合することなく、流域の住民は周年川の恩恵を享受できる。加えて大形魚の鮭は経済価値も高く、味にもすぐれ、冬期の備蓄蛋白源として貴重な魚種である。鮭が遡上する流域では、伝統的な鮭の調理、加工法が確立され、漁法や漁具をはじめ、鮭にまつわるくらしの文化は、武相三川などの鮎河川とは一線が画される。

水系図を見ると、多摩川を挟んで北に荒川、南に相模川があり、三川の水脈は上流で秩父、多摩の山地に収斂するように流れている。とくに多摩川中流付近では、荒川と相模川が最も接近しており、かつての漁人たちは水系間を自由に往来していた。そうした地形的条件の下で多摩川、相模川、荒川の武相三川は、鮭鮎河川の南端と接しながら共通の漁撈文化を保持してきた。だが江戸開府以来、多摩川は江戸に

近い鮎の川として認識されるようになり、相模川や荒川とは異なる漁撈文化の発展を見た。封建制度下の鮎上納、それを支えた漁撈技法の発達、明治以後には清遊の流れに多くの人びとが多摩川に遊び、他水系には見られない稀有な漁撈文化を開花させた。

漁撈文化の特質は、その川が産する重要魚種とその水系に深くかかわり合った人の営みに規定される。江戸、東京に近い鮎河川として特異な漁撈文化を開花させた多摩川は、鮎関係の文献をはじめ、江戸時代以降の漁撈資料に恵まれた水系である。今後も漁撈文化の全貌が逐次解明されることにより、偉大な流れに対する正しい評価と認識が得られよう。

資料編

多摩川水系伝統漁法一覧表

	1	2	3	4	5	6	7
漁法	瀬張	しら	追い込みもじ漁	鵜縄もじとり	雑魚簗	追い込み漁	鯰簗
漁法の別称	もじ、もじ漁、アイどう、瀬張網、部屋網、瀬網漁、もじづき、鮎瀬張網、しめ縄漁	鮎しら漁 堰止め網漁	上り 下り		上りどう 下りどう		
対象魚	アユ	アユ	アユ	アユ	川魚の総てを対象	ウグイ、オイカワ、フナなど	ナマズ
漁場	中流を中心にその上下傾斜のゆるい瀬	中流域の瀬 秋川水系では五日市まで行われた	中流域 深場の前後の瀬	中流域	全水域	ワンド（浅川水系）	中流域の水田地帯の用水路
漁期	六月上旬から十月	七月下旬から十一月	六月から九月	六月から九月	年間 但し各漁法別に漁期が異なる	年間	五月から七月
使用漁具 捕採	もじ（無舌）	もじ（無舌）	もじ（無舌）	もじ（無舌）	雑魚筌（単舌・一部に複舌）	雑魚筌（単舌）	大型の雑魚筌（単舌）
使用漁具 その他	おかざり 威し縄 部屋網	しら部屋網	仕切網 魚追いの叩き棒	仕切網 魚追いの鵜縄	竹簀など	竹簀 ジョレン	竹簀
漁撈者	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民	職漁者から一般漁撈者まで	主に農民	主に農民
摘要	上納鮎の漁法－江戸期 多摩川水系で最も発達した	瀬張と同じく上納鮎の漁法	強制的陥穽漁法	強制的陥穽漁法 江戸期	汎用性の高い雑魚簗は様々な漁法に使われている		仕掛けは下りどう

	漁法	漁法の別称	対象魚	漁場	漁期	使用漁具 捕採	使用漁具 その他	漁撈者	摘要
8	鰍筌	カジッカどう	カジカ	中流域とその上、下の川底が礫の瀬	年間特に三月から十一月	鰍筌又は雑魚筌（単舌）		主に一般漁撈者及び少年	容易な漁法
9	ドンドン		シマドジョウ	中流域瀬	四月から五月	雑魚筌（単舌）	一尺×六尺の長板	半漁民農民	人工急流に魚を寄せる
10	天王筌	箱伏せ	主にウグイ、他にオイカワ、カジカ、コイ、ナマズなど	中流とその上、下淵の上手の瀬	八月から十二月	箱筌（単舌）	誘引装餌	職漁者半漁民一般漁撈者	
11	桶筌	鉢伏せ桶伏せ樽伏せ	主にウグイで、オイカワも捕る	中流とその上、下淵などの深場の上手の瀬	八月から十二月	桶筌（単舌）	誘引装餌	職漁者半漁民一般漁撈者	竹筒筌に次ぐ簡単な筌構造 筌が桶や樽からブリキ製に変わる
12	山女魚筌	へら、どう、オケ、ヨリオケ	降りヤマメ	上流とその支流	十月中旬から十一月上旬	山女魚筌（無舌）		上流域の住民	
13	鰻筌	鰻もじもじり	ウナギ	上、中、下流及び支流の瀬	五月から十一月七、八月が盛期	鰻筌 簀編み―複舌 笊編み―単舌	誘引装餌が多い	職漁者半漁民一般漁撈者	広域的な漁法
14	鮒筌		フナ、タナゴなど	中、下流域の水田地帯を流れる用水路	三月から十一月	鮒筌又は雑魚筌（単舌）	誘引に装餌する事もある	主に農民や老人、子供	容易な漁法
15	泥鰌筌		ドジョウ	中、下流の水田地帯の水田と用水路	五月から十月七、八月が盛期	泥鰌筌（単舌）	誘引装餌	農民や流域住民、子供	容易な漁法、広域的に行われた

❁網漁法

	漁法	漁法の別称	対象魚	漁場	漁期	使用漁具 捕採	使用漁具 その他	漁撈者	摘要
1	鮎投網	網ぶち、投げ網、網打ち、打ち網、提網	アユ	中流とその上、下	六月から十月	投網	鮎突き箒と箱眼鏡舟も使う	職漁者半漁民一般漁撈者	徒打、舟打、昼投網、夜網、追い川、向え打ち、見打ち、めっぽう、などがある。
2	山女魚投網		ヤマメ イワナ	源流、上流水域の瀬と淵	三月から十月	投網		上流域の住民及び半漁民	
16	鯉筌		コイ	下流水域	四月から十月	鯉用堅筌（単舌）	誘引装餌	職漁者	
17	竹筒漁	鰻筒 筒っぽ ポーポー	ウナギ	下流から汽水域、さらに内湾	五月から八月	竹筒筌（無舌）	舟	職漁者	最も単純な構造の筌
18	蟹筌		モクズガニ	下流水域の瀬	十一月	蟹筌（無舌）		職漁者	産卵に降海するカニを筌で捕る
19	ビン筌	ガラス筌	小ブナ、モロコ、タナゴ、モツゴ、ウグイ、スジエビなど	中、下流域の用水路や池、沼	春から秋	ガラス筌（単舌）	誘引装餌	流域の少年	安易な漁法で、昭和初期以後、遊び漁として行われた

	3	4	5	6	7	8	9	10
漁法	雑魚投網	鯉投網	マルタ投網	瀬付き	ヨリオケ	寄せ網	鱒地引網	白魚地引網
漁法の別称	網ぶち、投げ網、網打ち、打ち網、提網			クキハヤ漁、クキアミ、クキハヤヨセ、クキヤヨセ、クキ漁、ツキデ、ツクキバヤ、ツキバヤ、ツキバヤト、ツキバ、瀬付け	ヨリオケ漁	寄せ川、巻網、廻し網、地曳網、大漁（おおりょう）		引網、地曳き、白魚とり
対象魚	ウグイ、オイカワ、モツゴ、ニゴイなど	コイ	マルタウグイ	ウグイ、マルタウグイ（下流）	ウグイ	アユ、ウグイ、オイカワ、コイ、フナなど、江戸期にはサクラマス	サクラマス	シラウオ
漁場	中、下流水域	中、下流水域	下流水域	中流とその上、下の人工産卵床（瀬）	中流水域の瀬に作った人工産卵床	中流水域水深三、四尺の瀬	下流水域	下流水域
漁期	年間	年間	四月中旬から五月	三月下旬から五月上旬	四月下旬から五月上旬	六月から九月	五月から六月	十二月中旬から五月下旬満潮時
使用漁具 捕採	投網	投網	投網	投網	掬い手網	雑魚筌、投網、囲み刺網、ひっかき竿	地引網	白魚地引網
使用漁具 その他	舟も使う	舟	舟	ジョレン砂利鎌砂利篩い	巻き蓆	シラタ仕切網竹簀		舟一艘又は二艘の場合がある
漁撈者	職漁者半漁民一般漁撈者	職漁者半漁民	職漁者半漁民	職漁者半漁民	半漁民	主に農民	職漁者半漁民	職漁者半漁民
摘要	徒打、舟打、追い川、見打、向え打ち、めっぽう、などがある。	粗目の投網	粗目の投網	技術を要する漁法	青梅地先水域	共同漁撈二、三十人で行なう		丸子から河口

11	12	13	14	15	16	17	18	19
鵜縄	追羽根棹漁	ベラ網漁	ゴリ網漁	板もみ	海老掬い	掬い網	跳網	張網
鵜縄漁、鮎鵜縄漁、鵜縄網、ハネッビキ	ハヤ追い	朝鮮網、朝鮮ベラ		カジッカ掬い		ザッコ網	飛び網、羽子網、ね込み、跳ねかし、受け網	
アユ、ウグイ、コイ、ニゴイなど	ウグイ	アユ、ウグイ、オイカワなど	ゴリ。ヨシノボリなどハゼ科の魚	カジカ	モエビ、スジエビなどの川エビ類	網で掬える総ての川魚	アユ	ウグイ、オイカワなど
中流とその上、下の水深二、三尺の瀬	中流とその上、下水深二、三尺の瀬	中流とその上、下の水域	下流水域の瀬	上、中流の瀬	中、下流域の細流や用水路、池、沼など	上流から下流域の支流や用水路、池、沼など本流を除く全水域	中流水域、水深三尺前後の瀬	中流域の淵など深場所の上、下
三月から十一月	三月から十一月	年間	五月から十月	年間	年間十二月から二月が盛期	冬期以外	七月から十月	十一月から三月夜間漁（夜がけ朝あげ）
叉手網、半円型掬い網、投網	叉手網、半円型掬い網	巻き捕り刺網	太糸布地の掬い具	掬い網、ブッタイ	掬い網、ブッタイ	掬い網	掬い受け網（大型の叉手網）	刺網、網目の異なる三反の刺網を用いる
鵜縄	追羽根棹	ベラ	石付きの追い寄せ縄	追い寄せの揉み板			ウラジロなどの追い寄せ具	
職漁者半漁民	職漁者半漁民	職漁者	職漁者半漁民	流域住民	農民流域の一般住民	流域の一般住民、少年	主に農民	職漁者
魚追いに技術を要す	魚追いに技術を要す	大正末に多摩川に渡来	大正末期まで、砂利採取で川底が変り廃絶				共同漁、十人前後で行なう	魚の摂餌習性と行動を利用した漁法

	漁法	漁法の別称	対象魚	漁場	漁期	使用漁具 捕採	使用漁具 その他	漁撈者	摘要
20	置網	刺網	アユ、ウグイ、オイカワ	中流域の流れのゆるい水深五尺前後	アユは六月から十月、他は年間（夜がけ朝あげ）	刺網、網目の異なる三反の刺網を使用		職漁者	
21	置網（濁り時）		ウグイ、オイカワ	中流の川岸に湧水のあるえぐれ	降雨による濁水時、秋に多い	刺網		職漁者 半漁民 一般漁撈者	立川地先水域
22	巻どり		ウグイ、オイカワ	中流水域、湧水のある川岸	降雨による濁水時	刺網	投石で威す	職漁者 半漁民 一般漁撈者	立川地先水域
23	巻網		ウグイ、オイカワなど	中流水域、沈床や淵などの深場に集まる魚を対象	冬期	刺網、網目の異なる三反の刺網を使用	投石や竹棹で威す	職漁者	
24	刺網		ウグイ、フナ	中流水域の瀬		刺網	竹棹で威す	一般漁撈者	羽村地先水域
25	鮎刺網		アユ	中流水域の水深が二尺前後の急流	六月から十月	刺網	下流から投石で威す	職漁者	
26	鱒刺網		サクラマス	上流水域及びその少し下流	五月から六月（夜がけ朝あげ）	刺網		職漁者 半漁民 一般漁撈者	
27	ハヤ刺網	目刺し	産卵期のウグイ	中流の瀬	三月から四月	刺網		職漁者 半漁民	稲城地先水域

28	29	30	31	32	33	34	35	36
カマツカ網	鯉刺網	白魚刺網	投げ網	鱒の跳網漁	受け網	待網	撫網	白魚掬い網
				踊網			なぜ網、なざ網、にごり掬い	なで網
カマツカなど	コイ	シラウオ	アユ、ウグイ、オイカワなど	サクラマス	アユ、サクラマス	ウグイ、アユ、フナ、コイ、オイカワ、ウナギ、ギバチ、カジカなど	アユ、ウグイ、コイ、フナ、オイカワ、ウナギなど	シラウオ
中流の瀬	下流水域	下流の汽水域、丸子から河口	中流水域とその上、下	上流の滝や堰の下	上流と中流の一部、滝や堰の下	中流とその上、下、川岸で行う	中流とその上、下、川岸又は舟から	下流の汽水域
年間	年間	十二月中旬から五月下旬満潮時	年間、但しアユは六月から十月	五月から六月	五月から十月	増水時、秋の台風期が盛ん	増水時、夏から秋が盛ん	十二月中旬から五月下旬満潮時
刺網	刺網	刺網	刺網	叉手網	叉手網、四つ手網	叉手網、半円型の掬い網	叉手網、長い柄の大型の丸い掬い網	叉手網
		舟	叩き棒で威す				舟からも行なう	舟
職漁者	職漁者	職漁者半漁民	職漁者半漁民	半漁民農民	半漁民農民	半漁民流域住民	職漁者半漁民一般漁撈者	職漁者半漁民
昭和の初め九州から移入した漁法			四国地方から移入した漁法	江戸期	江戸時代に盛んに行われた	危険な漁法	危険なこともある	

❀釣漁法

	漁法	漁法の別称	対象魚	漁場	漁期	使用漁具 捕採	使用漁具 その他	漁撈者	摘要
1	渓流釣り（餌釣り）	沢釣り	イワナ、ヤマメ	源流、上流水域	三月から九月	餌鉤	釣竿	半漁民釣遊者	
2	毛鉤釣り	テンカラ	イワナ、ヤマメ	源流、上流水域	五月頃から九月	擬餌鉤（毛鉤）	釣竿	半漁民釣遊者	
37	四つ手網漁		中流ではウグイやカジカ、下流ではウグイ、マコイ、マルタウ、シフ、ナイ、ウグ、ハギ、ボラ、ウナギ、ウオ、ユ、ゼなど	中、下流水域、特に下流では盛ん	年間、但し中流では夏から秋の間の増水期	四つ手網、下流では大型網を使用	舟も用いる	職漁者半漁民中流では一般の漁撈者	
38	白魚四つ手網		シラウオ	下流の汽水域	十二月中旬から五月上旬、夜間も行なう	白魚四つ手網	舟、四つ手網、漁人小屋	職漁者半漁民	陸と舟
39	四つ手網（遊漁）		小ブナ、モツゴ、川エビなど	中、下流部の細流や用水路、溜りなど	春から秋、夏が盛ん	小型四つ手網		流域の少年	遊び漁

3	4	5	6	7	8	9	10	11
ふっとばし（渓流）	流し鉤	置鉤	打ち釣り	瀬釣り	くいばり	ドブ釣り	友釣り	さくり
	千本鉤、長縄、ゴミ縄、鰻縄	一本流し	叩き釣り、叩き、ベッチャンコ、チョンチョン釣り			溜り釣り、鮎の毛鉤釣り	囮釣り	しゃくり、引かけ、見掛け、テンカラ釣り
イワナ、ヤマメ	ウナギ、ナマズ、ギバチ、ウグイ、コイ、ニゴイ、マルタウグイ、サクラマス	ウナギ、ナマズ、ギバチ、ウグイ、コイ、ヤマメ、イワナなど	ウグイ、オイカワ	アユ、オイカワ、ウグイ	ウグイ	アユ	アユ	アユ
源流、上流水域	上流から下流の本支流水域	上流から下流の本支流水域	中流とその上、下の水域、瀬	中流とその上、下の水域、瀬	中流の淵や沈床回りの深場	中流とその上、下の淵	中流とその上、下の水域、瀬	中流とその上、下、深場所
五月から八月	春から秋	春から秋	五月から九月早朝と夕方	四月から八月	五月から十月	六月から八月	六月から九月	六月から十月中旬
餌鉤	多数装着した餌鉤	餌鉤	擬餌鉤	擬餌鉤（蚊鉤）	擬餌鉤	擬餌鉤（鮎毛鉤）	掛け鉤	さくり掛け鉤
釣竿	下流では舟も使う		釣竿	釣竿	釣竿	どぶ釣り竿	友釣り竿、囮アユ使用	釣竿
半漁民釣遊者	職漁者半漁民流域住民及び少年	流域住民と少年	流域住民	流域住民	流域住民	一部の流域住民及び都会からの遊漁者	一部の流域住民及び都会からの遊漁者	半漁民流域住民
	延縄式餌鉤漁	餌鉤の一本仕掛け	遊漁	遊漁、大正以降から盛んに行われた	遊漁	遊漁、大正末頃から盛んになる	遊漁	

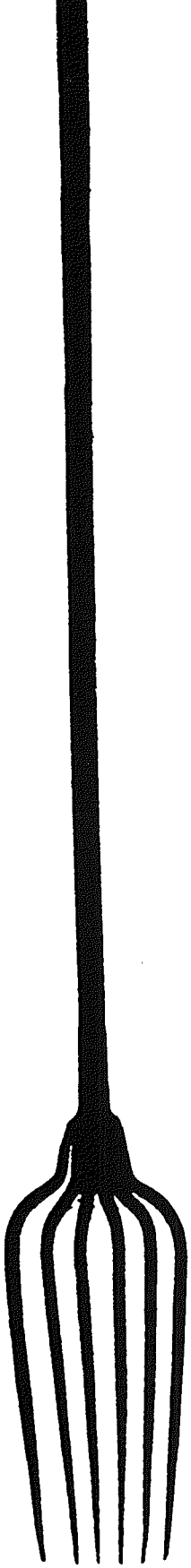
	漁法	漁法の別称	対象魚	漁場	漁期	使用漁具 捕採	使用漁具 その他	漁撈者	摘要
12	ころがし	ゴロビキ、引きかけ瀬引き	アユ	中流とその上、下の水域、瀬および淵	盛夏から秋	掛け鉤	ころがし竿	半漁民遊漁者	
13	鮎の置き鉤	置鉤	アユ	中流の瀬	六月から九月	掛け鉤		流域住民と少年	
14	マルタ釣り		マルタウグイ	丸子堰下	四月中旬から五月上旬	掛け鉤	釣竿	流域住民	
15	眼鏡釣り	眼鏡（がんきょう）めがね釣り、ひっかけ、ひっかき、かけ釣り、かき出し、さくり、かぎばり	アユ	中流とその上、下の水域、瀬や淵	六月から十月	掛け鉤	ひっかき竿箱眼鏡	職漁者半漁民	漁場によりゴロタ、テッポー、ナガレ、メガネなどの漁法がある
16	按摩釣り		ウグイ、オイカワ	中流とその上、下の瀬	夏期	餌鉤もしくは擬餌鉤	釣竿	流域住民、少年	遊漁
17	鮠釣り	浮子釣りと脈釣りがある	ウグイ	上流から下流の水域瀬・淵	年間	餌鉤	釣竿	流域住民	遊漁
18	ふっとばし（清流）		大型ウグイ	中流とその上、下、深み手前の瀬尻	五月から九月	餌鉤	釣竿	流域住民	遊漁
19	籠釣り		ウグイ	中、下流水域、比較的流速のある流れ	春から秋	餌鉤	寄せ餌籠、釣竿	流域住民	遊漁

20	21	22	23	24	25	26	27	28
鯉釣り	ぶっこみ釣り	鯰釣り（叩き漁法）	鯰釣り	とびつき	小物釣り	穴釣り	ひっくくり	数珠子釣り
ぶっ込み釣り、打ち込み釣り		ボッカン釣り、鯰のボッカン釣り	ぶっ込み釣り		ヤマベ釣り、タナゴ釣り、フナ釣り、クチボソ釣り、モロコ釣り	鰻釣り、ヘゴ釣り	ひっこくり	ヅヅコ釣り、ヅヅコ
コイ	カジカ、カマツカなど	ナマズ	ナマズ、ギバチ	ナマズ、ウナギ	オイカワ、タナゴ、フナ、モツゴ、モロコなど	ウナギ（穴ウナギ）	ウグイ、アユ	ウナギ
中、下流水域の深場	中流とその上、下の水域	中、下流域の水田地帯の用水路	中、下流域、水田地帯の用水路	中、下流域の細流、用水路	中、下流水域の細流、池、沼	上流から下流の全水域、沈床、蛇籠などの石の間	中流とその上、下、沈床回りなどの深場所	下流の汽水域から内湾
年間、梅雨期の朝夕が盛期、夜間も行う	夏期	六月から八月、早朝か夕方、夜間	六月から八月、降雨の濁水時	夏期	年間、春から秋が盛ん	年間、但し五月から十月が盛期	夏期	夏期
餌鉤	餌鉤	餌鉤	餌鉤	餌鉤	餌鉤	餌鉤	くくり用の馬素など（無鉤）	装餌した数珠子（無鉤）
釣竿	竹竿、或は無竿	竹竿	竹竿	固定竿	竹竿	穴釣り竿		舟も用いる
流域住民	流域の少年	流域住民農民少年	流域住民農民少年	流域住民農民少年	流域住民少年	職漁者半漁民流域住民少年	少年	職漁者
遊漁	川遊びの一環として行った遊び漁	日中では降雨後の濁水時、遊漁	遊漁	遊漁	遊漁	地獄鉤、又は鰻鉤	遊漁	

刺突漁法

	漁法	漁法の別称	対象魚	漁場	漁期	使用漁具 捕採	使用漁具 その他	漁撈者	摘要
1	岩魚突き 女魚突き	突き	イワナ、ヤマメ	源流、上流とその支流水域	夏期とその前後、夜間も行う	籍	箱眼鏡、夜は松明、カンテラ	源流及び上流域の住民	
2	鰍突き	カジッカ突き、カジッカ捕り	カジカ	上、中流及び下流の一部、川石の瀬	年間、盛期は夏	籍	箱眼鏡	主に流域の少年、流域住民	簡単な漁法
3	雑魚突き	突き、銛突き	ウグイ、オイカワ、フナなど	上流から下流とその支流、主に瀬	五月から十月、夏が盛期	籍	箱眼鏡	流域住民	

	漁法	漁法の別称	対象魚	漁場	漁期	使用漁具 捕採	使用漁具 その他	漁撈者	摘要
29	手長蝦釣り		テナガエビ	中、下流の止水域、池、沼、砂利穴	五月から六月、盛期は梅雨期	餌鉤	竹竿	流域住民及び少年	遊漁
30	食用蛙捕り		ウシガエル	中、下流の用水路	五月から九月	掛け鉤	竹竿	職漁者半漁民	



4	5	6	7	8	9
鯉突き	マルタ突き	潜り突き	泥鰌刺し	火振り	鉄砲銛
見突き、のぞき突き	見突き、のぞき突き		ドジョウヅキ、ドジョウブッサシ、ドジョウブチ、ブットシ、シブリ、火振り、ドジョウ打ち	夜振り、しぶり、ぶっとし、火ぼり、夜とぼし	
コイ	マルタウグイ	コイ、フナ、ウグイ、ナマズなど	ドジョウ	ウナギ、ナマズ、ギバチ、フナ、コイ、ウグイ、ニゴイ、カマツカなど	コイ、フナ、ナマズ、ウグイなど
下流水域	下流水域	中、下流水域の深場	中、下流域の水田地帯、早苗田	上流から下流及び支流など全水域	中、下流水域
年間、特に冬	四月から五月	夏期とその前後	五月から六月、夕方から夜	夏期とその前後	夏期
大型箱	大型箱	箱	ドジョウ突き	箱	鉄砲銛
舟、箱眼鏡を用いる場合もある	舟、箱眼鏡を用いる場合もある	水中眼鏡、但し昔は裸眼	照明具	照明具	水中眼鏡
職漁者	職漁者	流域住民	農民及び流域住民	農民、流域住民	流域の少年
技術を要する	技術を要する	遊漁			遊漁

	漁法	漁法の別称	対象魚	漁場	漁期	使用漁具 捕採	使用漁具 その他	漁撈者	摘要
1	鵜飼		アユ	中流とその上、下の水域	六月から十月	鵜	シラタを用いる場合もある	半漁民	昼川、夜川の徒使い
2	築		イワナ、ヤマメ、アユ、ウグイ、ウナギ、ナマズ、コイなど	上、中流及びその支流	九月から十一月	築、規模に大小あり	竹簀、丸太	半漁民	
3	堰漁	せき、ズリづけ、せきのズリづけ	降りアユ	中流とその前後の本流及び支流	十月から十一月	投網、又はさくり鉤、ひっかき竿	堰を設置	職漁者 半漁民	
4	手摑み漁	ガマ掘り、鮎押し、瀬押し、探り、手探り	ヤマメ、ウグイ、ウナギ、アユ、コイ、フナ、ナマズ、ギバチなど	上流から下流の本支流の全水域	年間、夏期とその前後が盛ん	素手		職漁者 半漁民 流域住民 少年	極めて原始的な漁法、但し技術を要す
5	瀬干し		カジカ、ウグイ、ウナギ、アユ	上流及び中流の州で二分された瀬	年間、春から秋が盛ん	掬い網、雑魚筌	竹簀、桶、バケツ、ジョレン、鍬、シャベルなど	農民 流域住民	協同で行う場合が多い
6	かい掘り	川狩、ケー掘り、干かす、干上げ	イワナ、ヤマメ、カジカ、ウグイ、ウナギ、ナマズ、ギバチ、コイ、フナ、ドジョウなど	上流から下流域の支流や用水路	年間、春から秋が盛ん	掬い網、雑魚筌	竹簀、桶、バケツ、ジョレン、鍬、シャベルなど	農民 流域住民 少年	
7	柴漬け	漬け柴、かりこみ、かいつけ、笹びて、笹ぶて	コイ、フナ、ウグイ、ナマズ、ギバチ、ウナギ、テナガエビ、スジエビ、モエビなど	中、下流域の本支流及び用水路、池、沼、流れのゆるやかな水域	冬期	掬い網、雑魚筌、刺網、簪、ひっかき竿	竹簀	職漁者 半漁民 農民 流域住民	

8	9	10	11	12	13	14	15	16
石倉	石ぶち	石叩き	ブッタイ	泥鰌掘り	鰻掻き	蜆漁	沢蟹捕り	毒漁
川倉、石川倉	石打ち、石ぶつけ	石ぶち、玄翁ぶち、玄翁はたき	ブッタイ掬い、掬い、ブッテ	ドジョウ拾い		腰巻		毒もみ、毒流し
ウナギ、ナマズ、ギバチ、カジカ、ウグイ、コイ、フナ、オイカワ、ヤマメ、アユなど	ウグイ、オイカワ、アユ、タナゴ、フナ	ウグイ、オイカワ、カジカなど	ヤマメ、ウグイ、オイカワ、フナ、川エビ、カジカなど	ドジョウ	ウナギ	シジミ	サワガニ	ヤマメ、カジカ、ウグイなど
上、中流水域の流れのゆるい場所	中流とその上、下の水域、夏は瀬、冬は深みの日だまり	上、中流及び支流の石のある瀬	上流から下流の支流や用水路、池、沼など	中、下流域の水田地帯の田圃と用水路	中、下流水域、川底が泥土の所、下流から河口、内湾が盛ん	中、下流及び支流の川底が泥質の水域、下流が盛ん	上、中流域の細流、水路側の石積みなど	主に上流域の細流
年間	年間	十二月から二月	年間	十月から二月、用水を落した時期	三月から十月	年間、特に冬期	五月から十月	年間
雑魚筌、背負い籠、ひっかき竿、箱、掬い網	石及び礫	掬い手網、そば掬いなど	ブッタイ	素手、又は鍬	鰻鎌	蜆ジョレン、貝掘り	篠竹の先に付けた蛙のむき身	手網、掬い網、ブッタイ、竹簀など
竹簀		大石、大玄翁			舟も使う			毒材、サンショの実と樹皮、エゴの実、藁灰
職漁者 半漁民 流域住民	少年 流域住民	職漁者 半漁民 流域住民	流域住民 少年	農民 少年	職漁者 半漁民	職漁者 半漁民 流域住民	少年	流域住民 他所者
	極めて原始的な漁法		竹簀編みの掬い具		徒掻きと舟掻き		遊漁	毒材は他に石灰、クルミ皮、昭和に入り荷性ソーダ、青酸加里など

資料編

多摩川水系魚種別漁法一覧表

通稱名は多摩川水系の一般呼稱

魚名	通称名	筌漁法	網漁法	釣漁法	刺突漁法	雑漁法
スナヤツメ	ヤツメウナギ		掬い網		突き	
ウナギ	ウナギ	鰻筌 竹筒漁	待網 撫網 四ツ手網	流し鉤、置鉤、とびつき、穴釣り、数珠子釣り、ぶっ込み釣り	火振り	築、手摑み漁、瀬干し、かい掘り、柴漬け、石倉、鰻掻き
ヤマメ	ヤマメ	山女魚筌	山女魚投網	渓流餌釣り、毛鉤釣り、ふっとばし、置鉤	山女魚突き	築、手摑み漁、かい掘り、ぶったい、毒漁
サクラマス	カワマス		寄せ網、鱒地引網、鱒刺網、鱒跳網漁、受け網	流し鉤		
イワナ	イワナ		投網	渓流餌釣り、毛鉤釣り、ふっとばし、置鉤	岩魚突き	築、手摑み漁、かい掘り、毒漁
アユ	アイ	瀬張 しら 追い込みもじ漁 鵜縄もじとり	鮎投網、寄せ網、追羽根棹網、鵜縄、ペラ、跳網、置網、投げ網、受け網、待網、撫網、四つ手網	瀬釣り、ドブ釣り、友釣り、さくり、ころがし、鮎の置鉤、ひっかき、ひっこくり		鵜飼、築、堰漁、瀬干し、石倉、石ぶち
ウグイ	ハヤ ホンバヤ	雑魚筌 追込み漁 天王筌 桶筌 ビン筌	雑魚投網、瀬付き、ヨリオケ、寄せ網、鵜縄、追羽根棹網、ペラ、張網、置網、巻どり、巻網、刺網、四つ手網、撫網、待網、投げ網	流し鉤、置鉤、打釣り、くいばし、瀬釣り、按摩釣り、ハヤ釣り、ふっとばし、篭釣り、ひっくくり	雑魚突き 潜り突き 火振り 鉄砲銛	築、鵜飼、手摑み漁、瀬干し、かい掘り、柴漬け、石倉、石ぶち、石叩き、ぶったい、毒漁

魚名	通称名	筌漁法	網漁法	釣漁法	刺突漁法	雑漁法
マルタ	マルタ		マルタ投網 瀬付き 四つ手網漁	流し鉤 マルタ釣り	マルタ突き	
オイカワ	ヤマベ バカ バッパ ジンケン ペカ オニッパ ビコゼヤ ミワコ ヤサマ	追込み漁 天王筌 桶筌	雑魚投網、寄せ網、追羽根棹網、ペラ、掬い網、張網、置網、巻どり、巻網、撫網、待網、投げ網	打釣り 瀬釣り 按摩釣り 小物釣り	雑魚突き	石倉 石叩き ぶったい 瀬干し かい掘り
フナ	マブナ ブルブナ ブンショウ	雑魚筌、追込み魚、鮒筌、ビン筌	寄せ網、掬い網、刺網、待網、撫網、四つ手網	鮒釣り 小物釣り	潜り突き 火振り 鉄砲銛	築、石倉、手摑み漁、かい掘り、石ぶち、ぶったい
コイ	コイ	雑魚筌 天王筌 鯉筌	寄せ網、鵜縄、掬い網、鯉刺網、待網、撫網、四つ手網	鯉釣り 流し鉤 置鉤	鯉突き、潜り突き 火振り、鉄砲銛	築、手摑み漁、かい掘り、柴漬け、石倉
タナゴ	ニガブナ	鮒筌 ビン筌	掬い網、	タナゴ釣り 小物釣り		
モロコ	モロッコ	ビン筌	掬い網	小物釣り		
ニゴイ	サイッコロ サイ		雑魚投網 鵜縄	流し鉤	火振り	

魚名	通称名	筌漁法	網漁法	釣漁法	刺突漁法	雑漁法
カマツカ	コブシ コト オコト スナムグリ		カマツカ網	ぶっこみ釣り	火振り	
モツゴ	クチボソ	ビン簽	雑魚投網 掬い網	小物釣り		
ドジョウ	ドジョウ	泥鰌簽	掬い網		泥鰌刺し	泥鰌掘り かい掘り
シマドジョウ	オイノメ オイノメ ドジョウ スナムグリ	ドンドン	掬い網			瀬干し
ホトケドジョウ	オカメドジョウ オババドジョウ	泥鰌簽	掬い網			かい掘り
ギバチ	ゲバチ ギンギョウ ギンタバチ	雑魚簽	掬い網 待網 撫網	流し鉤、置鉤、 鯰釣り ぶっこみ釣り	火振り	手摑み漁、かい掘り、 柴漬け、石倉
ナマズ	ナマズ	雑魚簽 鯰簽 天王簽	掬い網 待網 撫網	流し鉤、置鉤、 鯰釣り、とびつき ぶっこみ釣り	火振り 潜り突き	簗、手摑み漁、 かい掘り、柴漬け、 石倉
カジカ	カジッカ	鰍簽 天王簽	板もみ 待網 四つ手網	ぶっこみ釣り	鰍突き	瀬干し、かい掘り、 石倉、石叩き、 ぶったい、毒漁

魚名	通称名	筌漁法	網漁法	釣漁法	刺突漁法	雑漁法
ヨシノボリ	スイッチョコハゼ		ゴリ網漁			
マハゼ	ハゼ		四つ手網	ハゼ釣り		
シラウオ	シラス		白魚地引網 白魚刺網 白魚掬い網 白魚四つ手網			
ボラ	ボラ		四つ手網			
スジエビ ヌカエビ	モエビ	ビン筱	海老掬い 四つ手網			柴漬け 笹びて ぶったい
テナガエビ	テナガエビ		掬い	手長蝦釣り		柴漬け
モクズガニ	カワガニ	蟹筱			突き 火振り	手摑み
シジミ	シジミ					蜆掻き 蜆掘り

参考文献

植田孟縉『武蔵名勝図会』慶友社版　昭和四二年
山田早苗『玉川浜源日記』慶友社版　昭和五〇年
蘆田伊人編『新編武蔵風土記稿』雄山閣版　昭和三二年
斎藤月岑・長谷川雪旦『江戸名所図会』　天保七年
相沢伴主『調布玉川絵図』隣人社
鈴木平九郎『公私日記』第八冊　立川市教育委員会　昭和五二年
宮崎主膳『柴崎往来』立川市教育委員会　昭和五九年
塩野適斎『桑都日記続編』鈴木龍二記念刊行会　昭和四七年
石井盛時撰「玉川紀行」・『世田谷地誌集』世田谷区教育委員会
昭和六〇年
――「松の柴折」・『世田谷地誌集』世田谷区教育委員会　昭和六〇年
成島司直「玉川遊記」・『世田谷第一三号』世田谷区誌研究会
昭和三七年
江口忠房「瀬田之記」・『世田谷第一三号』世田谷区誌研究会
昭和三七年
津田大浄『遊歴雑記』江戸叢書刊行会　大正五年
城東漁父「魚獵手引」・『釣魚秘伝集』渡辺書店　昭和四七年
武井周作『魚鑑』八坂書店　昭和五三年
人見必大『本朝食鑑』平凡社　昭和五三年
広井弘斎・斎藤時泰編『日本地誌略物産弁』八坂書房　昭和五四年
多摩町誌編さん委員会『多摩町誌』多摩町役場　昭和四五年
奥多摩町教育委員会『奥多摩郷土小誌』同所　昭和三九年
原島芳雄編『日原風土記』奥多摩町第六地区　昭和四三年
東京市役所『小河内貯水池郷土小誌』　昭和一三年
泉昌彦「奥多摩のたべもの」・『多摩のあゆみ二二号』多摩文化資料
室　昭和五六年
瓜生卓造『檜原村紀聞』東京書籍　昭和五二年
同　『桜の湖』東京新聞出版局　昭和五五年
同　『多摩源流を行く』東京書籍　昭和五六年
同　『奥多摩町異聞』東京書籍　昭和五七年
戸倉村誌編纂委員会『戸倉』戸倉村　昭和四三年
石井道郎「近世の秋川鮎物語」・『研究紀要第六』東京都立五日市高
校　昭和四八年
五日市町史編さん委員会『五日市町史』五日市　昭和五一年
都立五日市高校『東京都立五日市高校出土石錘調査報告書』同校
鈴木哲太郎『西多摩郷土夜話』八潮書店　昭和五五年
渡辺嘉平『多摩のふるさと』ブックワールド鉄生堂　昭和五〇年
日野史談会『日野の歴史と文化・第一四号』　昭和五五年
潮田鉄雄「川漁」・『青梅市の民族Ⅰ』青梅市教育委員会
昭和四七年
宮本常一・神保教子「青梅の民具」・『青梅市の民族Ⅱ』青梅市教育
委員会　昭和四七年
宮本常一・潮田鉄雄『食生活の構造』柴田書店　昭和五三年
塩田鉄雄『羽村町の民具』羽村町教育委員会　昭和五四年

羽村町史編さん委員会『羽村町史』羽村町　昭和四九年
昭島市史編さん委員会『昭島市史附篇』昭島市　昭和五三年
木村龍生『序章のフォークロア』木村龍生論文集刊行委員会　昭和五五年
福生町誌編集委員会『福生町誌』福生町役場　昭和三五年
福生市教育委員会『福生市文化財総合報告12・福生市の民族・生業・諸職』福生市　昭和五五年
福生市教育委員会『福生市の遺跡』福生市　昭和五二年
宮沢光顕『三多摩物語』有峰書店　昭和五〇年
日野市遺跡調査会『日野市埋蔵文化財発掘調査輯報Ⅳ』日野市教育委員会　昭和六〇年
――『日野市史史料集・続地誌編』日野市史編さん委員会　平成三年
前田耕地遺跡調査会『前田耕地Ⅰ』秋川市教育委員会　昭和五二年
立川市教育委員会『立川民族シリーズⅣ　多摩川と生活－魚と伝統漁法』立川市　昭和五五年
立川市史編纂委員会『立川市下巻』立川市　昭和五三年
立川市教育委員会『立川市史資料集第一集』立川市　昭和三八年
三田鶴吉「多摩川の記」・『多摩のあゆみ・創刊号』多摩文化資料室　昭和五〇年
立川市教育委員会『今昔写真集・たちかわ』立川市　昭和五〇年
国立市民具調査団『国立第一小学校収蔵の民具』国立市教育委員会　昭和五五年
府中市『府中市史　下巻』東京都府中市　昭和四九年
同　『府中市の現存民具調査集』東京都府中市　昭和四五年
同　『続府中の風土誌』東京都府中市　昭和五一年
同　『写真集・むかしの府中』東京都府中市　昭和五五年
潮田鉄雄『稲城のものとくらし　第三集』稲城市教育委員会　昭和五三年
狛江市史編さん委員会『狛江第一小学校校庭遺跡』狛江市　昭和四九年
小塚信一『菅渡船場回顧録』菅町会　昭和四九年
世田谷区『新修世田谷区史・下巻』東京都世田谷区　昭和三二年
同　『せたがやの歴史』東京都世田谷区　昭和五一年
同　「世田谷の河川と用水」世田谷区教育委員会　昭和五二年
東京都世田谷区民俗調査団『せたがやの民俗』世田谷区教育委員会　昭和五四年
中村亮雄「菅の漁」・『川崎市文化財調査集録第八集』川崎市教育委員会　昭和四八年
同　「小向の漁」・『同第七集』　昭和四七年
同　「大師の漁」・『同第三集』　昭和四二年
北村敏「多摩川河口の白魚漁」・『史誌第一六号』大田区史編さん委員会　昭和五六年
同　「漁業」・『大田区史・民俗篇』大田区史編さん室　昭和五八年
東京都大田区『大田区史』東京都大田区役所　昭和二六年
東京府大森区『大森区史』大森区役所　昭和一四年

亀山慶一「大森地区の漁撈伝承」・『史誌』大田区史編纂室
昭和五二年
大田区立郷土博物館『消えた干潟とその漁業』大田区立郷土博物館
平成元年
橋爪隆尚『羽田史誌』羽田神社　昭和五〇年
東京都大田区立羽田小学校『羽田郷土誌』羽田小学校　昭和二九年
川崎市役所『川崎市史』川崎市　昭和四三年
小塚光治『川崎史話　下巻』多摩史談会　昭和五二年
安斎忠雄『多摩川における川漁の技法と習俗』とうきゅう環境浄化
財団　昭和五八年
同　『多摩川中流域の漁撈具』立川市教育委員会　昭和六〇年
同　「多摩川の漁撈」・『民具マンスリー一八巻九号』神奈川大
学日本常民文化研究所　昭和六〇年
同　「栄光の流れの辺で」・『多摩のあゆみ五九号』多摩文化資
料室　平成二年
同　「漁撈」・『多摩川誌』共著・河川環境管理財団
昭和六一年
同　「竹筒漁について・綾瀬川水系の漁撈Ⅲ」・『埼玉民俗一二
号』埼玉民俗の会　昭和五八年
同　「簗」・『みずのわ二号』昭和四三年、「或る鵜匠」・『同四
号』四四年、「白魚」・『同八号』四五年、「渓流釣り」・
『同一七号』四七年、「筌簽」・『同二四号』四九年、「鮎
苗」・『同二七号』五〇年、「手摑み漁」・『同三四号』五二
年、「鰻捕り」・『同三九号』五四年、「多摩川鮎」・『同四
五号』五六年、「川漁」・『同五〇号』五八年、「アイソ漁」
・『同五四号』五九年－前澤工業㈱みずのわ発行委員会
潮田鉄雄「民具の地域研究・筌漁」・『民具マンスリー六巻五・六
号』日本常民文化研究所　昭和四八年
日本常民文化研究所篇「多摩川の筌」・『民具マンスリー三巻四号』
日本常民文化研究所　昭和四五年
竹内秀雄「玉川の鮎猟」・『世田谷第一六号』世田谷区誌研究会
昭和三九年
宮田満「多摩川における上ヶ鮎について」・『多摩郷土研究の会
第四七号』多摩郷土研究の会　昭和五〇年
同　『多摩川水系近世漁業関係史料の収集と考察』とうきゅう環
境浄化財団　昭和六三年
同　「将軍の鮎」・『多摩のあゆみ五九号』多摩文化資料室
平成二年
五十嵐文次「玉川鮎漁の発展と上ヶ鮎御用世話役」・『多摩のあゆみ
五九号』多摩文化資料室　平成二年
原嘉文「公私日記に見る玉川御用鮎について」・『公私日記　第一一
冊』立川市教育委員会　昭和五四年
中島恵子「多摩川聞書－川漁のことなど－（一）・（二）」『西郊民
俗第六八・六九号』西郊民俗　昭和四九年
同　『多摩風物詩』
原育夫『多摩川の水泳五十年』調布史談会　昭和四六年

石井作平『多摩のむかし話』有峰書店　昭和五一年
武蔵野郷土史刊行会『多摩の人物史』同所　昭和五二年
東京府水産試験場『東京府下内水面に於ける水産の概況』同所　昭和一五年
東京府水産会『東京府島嶼及河川漁具図集』同所　昭和一六年
多摩聖蹟記念会『多摩の聖蹟』同所　昭和五六年
東京都内湾漁業興亡史編集委員会『東京都内湾漁業興亡史』同刊行会　昭和四六年
菊地利夫『東京湾史』大日本図書　昭和四九年
村田文夫『古代の南武蔵』有隣堂　平成五年
東京立川ライオンズクラブ編『多摩川は語る』東京立川ライオンズクラブ　昭和六〇年
東京百年史編集委員会『東京百年史　第二・三巻』東京都　昭和四七年
加藤辿『都市が滅ぼした川』中央公論社　昭和四八年
大町桂月「日野の鮎漁」・『秩父の山水・多摩の山と水　上』八潮書店　昭和五七年
国木田独歩「忘れえぬ人々」・『文学に見る日本の川・多摩川』日本週報社　昭和三五年
滝井孝作「魚釣り」・『文学に見る日本の川・多摩川』日本週報社　昭和三五年
杉山康彦『川崎の文学を歩く』多摩川新聞社　平成二年
東陽堂編『風俗画報　第一七五号』東陽堂　明治三一年
同　『風俗画報　第四三四号』東陽堂（国書刊行会復刻版）　明治四五年
同　『東京名所図会　西郊之部』睦書房　昭和四四年
玉堂美術館『玉堂美術館・開館二〇周年記念』玉堂会　昭和五六年
農商務省水産局『日本水産捕採誌』水産社　大正元年
日本学士院篇『明治前日本漁業技術史』日本学術振興会　昭和三四年
金田禎之『日本漁具・漁法図説』成山堂　昭和五二年
最上孝敬『原始漁法の民俗』岩崎美術社　昭和四二年
清光照夫『漁業の歴史』至文堂　昭和三二年
直良信夫『古代人の生活と環境』校倉書房　昭和四〇年
中田薫『古代日韓交渉史断片考』創文社　昭和三一年
上田正昭『帰化人』中央公論社　昭和四〇年
羽原又吉『漂海民』中央公論社　昭和三八年
可兒弘明『鵜飼』中央公論社　昭和四一年
長良川の鵜飼研究会『長良川の鵜飼』岐阜新聞社　平成六年
大岡昇『錦川鵜飼物語』錦川鵜飼振興会　昭和五二年
三角寛『サンカの社会資料篇』母念寺出版　昭和四六年
川崎房五郎『佃島と白魚漁業－その漁場紛争史』東京都　昭和五三年
栃木県立郷土資料館『下野の漁撈習俗』栃木県教育委員会　昭和五〇年
阪本英一『群馬の漁』みやま文庫　平成四年
埼玉県農林部蚕糸特産課水産係篇『埼玉県の漁具漁法』同所
小林　茂「荒川水系の筌」・『埼玉の文化財　第一六号』埼玉県文化

財保護協会　昭和五一年
千葉県民俗総合調査団『東京湾の漁撈と人生』隣人社　昭和四二年
平塚市博物館『相模川の魚と漁』平塚市書籍商組合　昭和五三年
神野善治「筌漁の研究上・下」・『紀要六、七』沼津市歴史民族資料館　昭和五七、五八年
広島県立歴史民俗資料館『江の川の漁撈』みよし風土記の丘友の会　昭和五九年
日本常民文化研究所篇「鵜飼調査資料1～7」・『民具マンスリー二巻四号～一〇号』同所　昭和五〇～五四年
武藤鉄城『秋田郡邑魚譚』アチックミューゼアム　昭和一五年
中村守純「魚類」・『多摩川流域自然環境保全調査報告書』観光資源保護財団　昭和四八年
同　「多摩川水系魚類調査」・『多摩川流域自然調査報告書第二、三次』とうきゅう環境浄化財団　昭和五一、五三年
中島富治「多摩川の魚」・『多摩のあゆみ一九号』多摩文化資料室　昭和五五年
中村守純『原色淡水魚類検索図鑑』北隆館　昭和三八年
宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦『原色日本淡水魚類図鑑』保育社　昭和五一年
井上実『魚の行動と漁法』恒星社厚生閣　昭和五三年
石川千代松「鮎の話」・『石川千代松全集　10』興文社　昭和一一年
松井魁『鮎』法政大学出版局　昭和六一年
秋道智弥『アユと日本人』丸善　平成四年
宮地伝三郎『アユの話』岩波書店　昭和三五年
小山長雄『アユの生態』中央公論社　昭和五三年
松井魁『うなぎの本』丸の内出版　昭和四六年
松下高・高山謙治『鮭鱒聚苑』水産社　昭和一七年
市川健夫『日本のサケ』日本放送出版協会　昭和五二年
――『川釣り歳時記・夏』平凡社　昭和五八年
福田紫汀『毛鉤の話』丸の内出版　昭和四八年
建設省河川局監修『一九八一年河川ハンドブック』㈳日本河川協会　昭和五六年